

---

# くーな

藍田陽介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くーな

### 【著者名】

藍田陽介

N2597D

### 【あらすじ】

突然僕の前に現れた少女くーな。僕は意味も分からないまくーなの兄にされてしまった。不思議な縁で結ばれた僕、リュウイチとくーなは一緒に生活を始めるが、その裏にあるものは……。

## 1 出逢い（前書き）

初めての投稿作品になります。まだ途中ですが、最後まで書き通すことが今の最大目標です。  
時間はかかるかもしれません、よろしければお付き合いください。

## 1 出逢い

今になつて思い返してみると、背筋がゾッとする。もう一十年くらい経つだろうか。リュウイチがぐーなに出会つてから。

リュウイチはまだ大学を出て、ある研究所に就職したばかりの頃である。それまで武藏野丘陵の一角にあるT大学で、物理学を専攻し、量子力学を学んでいた。その後、就職した研究所は、同じく武藏野丘陵のまだ周りに雑木林が多く残る中にひっそりと建っていた。首尾よく就職できたのは、大学のゼミで師事した教授の推薦のおかげである。教授には今も感謝している。

リュウイチは、入所してすぐに、主に原子炉に関連した研究をするプロジェクトチームに入った。普段から身の周りにウランやら、プルトニウムのような、まるで化学の時間に元素記号表でしかお目にかかることがない放射性金属を、日常的に扱うこととなつた。そのせいか、いきおいプロジェクトチームの雰囲気はいつもピンと張りつめた糸のようだつた。それは入つたばかりのリュウイチに、想像以上の緊張を強いた。

研究所に通いだしたばかりのリュウイチは、チームの中に一日身を置いているだけで、激しい疲弊感を覚えた。研究所にいる間は、呼吸をするのさえ無意識ではできないような気がした。毎日、その繰り返しだつた。

研究所を出て帰宅の途に着くと、ピンと張りつめた彼の神経は、膨張しきつた風船に針を刺したかのように、パチンと音を立てて弾けるのが常だつた。

その日もそうだつた。

研究所に勤めだして、二ヶ月くらい経つた頃である。まだリュウイチの神経は、極端な緊張と弛緩を繰り返していた。

異常なほどの神経の緊張状態から一気に開放されたりュウイチの体は、その激しい弛緩に耐えかねた。研究所から駅までの帰り道、道端の電柱に右腕を伸ばして、己が体を支えた。そして激しく嘔吐するど、そのまましばらく肩で荒い息をしていた。

ここに来てからは、何度もあつたことだ。

己の吐瀉物でえた臭いを含んだ空気を何度も大きく吸い込んだ。やがて「ふう」と一つため息をつくと、やおら電柱から離れ、再びリュウイチは駅に向かつて歩き出した。

いや、歩き出そつとした彼の足は、半歩踏み出したといひでピタリと停止した。

リュウイチの視線の先に、まだ少女と呼んでも差し支えないような、一人の女が立っていた。少女は少し笑みを浮かべたまま、リュウイチの視線を的確に捉えた。

リュウイチと少女の間の空気だけが濃度を増した。一人はその濃密な空気の両端に対峙して、約十三秒完全に停止した。

残りの半歩をリュウイチが踏み出すのと少女が口を開いたのは、ほぼ同時であった。

「大丈夫？」少女は、意外にハスキーな大人びた声だつた。リュウイチは一度、自分の体から湧き出した汚物のわだかまる電柱を見やつた。

「ああ、大丈夫だ」

「よかつた、お兄ちゃん」リュウイチは「えつ？」と聞き返した。少女はリュウイチの疑問符を無視して、続けた。

「私、くーな つていうの」

「くーな、ね。それよりも今僕のことを お兄ちゃん つて言わなかつた」

「言つたわよ。いいじゃない。今日からあなたは私のお兄ちゃんよ。あなたじゃ変ね、名前は？」少女、くーな は、一気に畳み掛けるように言い切つた。

「ミネギシ、リュウイチ」

「じゃリュウイチ兄さんね」そう言つと、くーなは屈託のない笑顔でリュウイチの前まで来た。と、彼の横に立ち、瞬く間に彼の左腕に自分の右腕をすべり込ませた。白く細長いくーなの右腕は、リュウイチの疲れ切った心の桎梏となつた。

リュウイチはくーなを左腕にぶら下げたような格好で、下を向いて二十七歩歩いた。その間くーなは、雑木の群れの間に民家の立ち並ぶ変哲のない風景を見回していた。

二十七歩、足を進めたところで、リュウイチは顔を上げて立ち止まつた。

「くーな つていうのは、本名じゃないよね?」

「多分、ね。私にも分からぬ。でも誰もが私のことを くーなつて呼ぶわ」

「そう。じゃ名前そういうことにして。けれどもどうして、僕が君のお兄さんになるんだい」

「どうもこうもないでしょ。お兄ちゃんはお兄ちゃんよ」

「……そう言われても、つこさつきまで僕は自分が一人っ子だと思つていたよ。二十二年間、兄弟と呼べる人はいなかつた。だからさ、急に君が妹として名乗り出ても困るんだよ」 実際、リュウイチは二十七歩の間、隣を歩くまだ幼さの残る くーな をこれからどうするべきか逡巡していた。「今まで君はどうして、どこから来たのか」

「一度にたくさん聞かれても、答えに困っちゃうな。おいおい話すから、まずは家に帰ろうよ」 くーなの言葉には、すでに兄弟の親しさが十分に込められていた。

「帰るつて、どこへ」

「お兄ちゃんの家に決まっているじゃない

「君もかい?」

「そうよ」

「しかしそこは、僕の住処であつて、君のではない」

「いいじゃない、兄弟なんだから。それに……」

つとくーなは前を向くと、今度は彼女がリュウイチを引きずるような形で、数歩歩いた。リュウイチはいきなり引かれ、バランスを崩して転びそうになって、慌てて走るようにくーなの横に行つた。

前につんのめるような格好で走つたリュウイチの目に、くーの胸元が映つた。

くーの胸はあまり豊かではなかつたけれど、ギリシャ彫刻を思わせるような白さで、首から胸にかけてのラインはミロのヴィーナス像を想像させた。リュウイチは少し眩しそうに眉をひそめた顔をした。

「いきなり引っ張るから、コケそうになつたじゃないか」早口で、少し強い口調で言つた。くーなは全く意に介さない様子で、前を向いたままぼそりと呟いた。

「他に……、行く所なんてないんだもん」

それきり一人は黙つて、再び歩き出した。

空気は重く、一人の間に垂れこめた。駅までの道すがら、雨が降り出した。梅雨のどつしりとした空気はいよいよ重さを増し、二人の肩にのしかかつた。息苦しささえ覚えるほどである。雨がアスファルトの道を叩き、土埃の臭いが充満した。

リュウイチはカバンから折りたたみ式の黒い傘を取り出した。それを横から奪うようにくーなが取つた。手早く広げると、くーなより頭一つ背が高いリュウイチに合わせて、左腕をぐつと伸ばし二人の間に差しかけた。

傘は一人で共有するには小さすぎたが、くーなはリュウイチにぴつたりとくつつくようにして駅まで歩いた。

京王線を調布で降りると雨は止んでいた。止んだばかりと見えて、駅前の道にはまだそこかしこに雨水が溜まつていた。

二人は結局、車中でも口を利くことはなく、黙つて改札口を抜け、黙つて空を見上げた。背格好こそ違え、まるで映し鏡のように二人

は同じ動作をした。

駅からリュウイチの部屋のあるマンションまでは、リュウイチの足できつちり十分間かかる。この日はくーなを連れていたので、十三分を要した。

家に着くと、まずリュウイチはバスタオルを一枚持ち出して、薄桃色の方をくーなに手渡した。

「濡れただろ。拭きなよ」

玄関で立つたままのくーなに言った。長いこと黙つたままだったので、うまく声が出なかつた。

傘からはみ出していた右肩を拭いながら、部屋に入ろうとしたとき、玄関からくーなの声が響いた。

「お邪魔します」

くーなはバスタオルを頭に載せて、部屋に入ってきた。まるで薄桃色のフードを被つたような格好で。

食事に行こう、とリュウイチが提案した。しかしきーなは、先にシャワーを浴びたい、と言つた。

「困つたな。でもうちにほ、くーなが着るような服はないよ」

「やつと私のことを普通に くーな つて呼んでくれたね」くーなは出会つてから初めて、天使の笑顔を見せた。相変わらず問い合わせとくーなの答えはかみ合わない。

「……だからさ、とりあえず食事に行こう。その帰りに服を買つたらいいだろ」

あえてリュウイチもくーなの返事に取り合わず、もう一度提案した。少し照れくさそうに、横を向いた。

「分かったわ。じゃ行きましょ」

リュウイチはこの期に及んで初めて気がついた。くーなはバッグ一つ持たずに、あの研究所から駅に続く道に佇んでいたのだった。

## 2 くーなの夜話

「ただいま

マンションに近づくと、リュウイチの部屋の明かりが点いていた。まだくーなは部屋にいるらしい。

玄関を開けると「おかえりい」という大きな声がした。くーなは元気よく話すときに、語尾を伸ばす癖があるらしい。部屋の中は、カレーの匂いが充満していて、玄関までその匂いは届いた。

部屋で上着を脱いで、ベッドの上に置いた。くーなが素早く取り上げて、ハンガーに掛けた。その甲斐甲斐しい様子を見て、リュウイチは照れくさい気持ちになつた。

いいよ、自分でやるよ。

くーなが笑いながらリュウイチに言った。

「居候だから、これくらいやるわよ。お兄ちゃんには感謝しているしね」

着替えて、手と顔を洗い、部屋の小さなテーブルに着くと、くーながカレーライスを盛った皿を運んできた。

「こんなものしかできなくて」

「カレーライスは大好物だよ」

その言葉に気を良くしたのか、くーなは「いただきます」と元気良く、語尾を伸ばした。くーなの言葉を合図に、二人は食事を始めた。一人とも黙々とカレーライスを頬張つた。

食事を終えると、リュウイチはテーブルの上のリモコンで、テレビのスイッチを入れた。

テレビでは、防衛庁の不正への糾弾をする野党党員へのインタビューや流れていた。続いて国際問題に関するニュースが始まり、核兵器開発に関する諸外国の対応をテーマにした特集が始まつた。

(自分の関わる仕事も一步間違えれば「核兵器」にもなり得るな。)  
リュウイチはサイケデリックな花柄模様の蛇を見たような顔になつた。

「ねえお兄ちゃん、どうしたの?」

先程から食い入るようにテレビを見ているリュウイチに、くーなが呼びかけた。

「いや、なんでもない。ただニュースを見て、軍事的な問題は怖いなと思つただけさ」

大学で学んで以来、リュウイチは、いわゆる核融合という化学作用の持つポテンシャルエネルギーの威力が、すばらしく強烈なものであることを知つた。しかし核の持つ潜在的な威力が、専ら兵器開発という側面で利用されていることは恐ろしかつた。

すでに核兵器を持つ国が、新たに核兵器を持とうとする他国をあたかも極悪人のように批判し、糾弾し、必死で止めさせようとすることは、大いなる矛盾であると感じた。我知らず、リュウイチは大きなため息を付き、眉間に大きなしわが刻まれた。

「お兄ちゃん、本当にどうしたのよ。疲れてるの」

心配そうにくーなが顔を覗き込んだ。リュウイチは何かを振り払うように大きく、数度頭を横に振つた。そしてくーの方に向き直つた。

「ここにこころ自分の生活も大きく変わつたから、疲れているのかな。昨日もいろいろあつたしね」

「私のこと?」

「うん、それもだ。ところでくーなはどうして僕のところに来たんだい。それに、なぜ僕が君の　お兄ちゃん　になつたのかなあ」　くーなの口調を真似てみたが、くーなは笑わなかつた。

しばらく、くーなは黙つていた。何事か、考えている様子だつた。リュウイチも黙つてくーなが口を開くのを待つた。

リュウイチは何としても、くーなの出自、自分の前に現れた理由を聞き出すつもりだつた。そうしなければくーなをここに置いておけ

ない気がした。突然現れて自分の妹を名乗るくーなを、びり扱つていいものか決めあぐねていた。

ややあつてくーなは決心したように毅然とした表情で、リュウイチの顔を見た。あどけない表情に、今は厳しさが絶妙の割合でブレンドされていた。

「じゃ話すわ」

リュウイチが大きくなづくと、くーなは毅然としたまま話し始めた。

くーなは防衛庁の今は幹部である父を持つ。その父は、先程リュースで糾弾されていた与党議員とも何らかのパイプがあるらしい。

くーなは自分の書斎には常に施錠し、家族といえどもその部屋に入ることは堅く禁じられていた。くーなが小学生の頃、一度たまたま鍵を掛け忘れた父の書斎に入り込み、そこで本を読んでいたことがある。くーなはその部屋で、いつしか寝入ってしまった。

帰宅した父は烈火のごとく、くーなを叱り飛ばした。以来、くーなは父に肉親の親愛よりも 敵 対する憎しみといった感情を持つようになつたらしい。

それからも常に家族さえも立ち入ることのできない結界に足を踏み入れてしまつたくーなを父は疎ましく思つたようだつた。はつきりと父の口からそのような感情が語られたわけではないが、くーなははつきりと父の思いを感じ取つた。

だからくーなは家を出ようと思つた。やがてくーなの決心は、彼女の成長とともに具体的な計画の実行へと昇華する。

高校を卒業したらね、家を出ようと思つていたの。そつして本当に家出しちやつた。

くーなは一気に話しあがめて、一つ息をついた。

(そういえば自分も同じようなことを思つた時期がある) リュウイチはかつての自分に重ね合わせた。

くーなの話によれば、くーなは本名を「大和田国子」<sup>くにこ</sup>といつ。「く

「にちゃん」と呼ばれていたのが「くーにゃん」になり、最終的な愛称として「くーな」と呼ばれるようになった。

「ということは、やっぱり僕は君のお兄ちゃんではない。つまり血を分けた兄弟ではないということなんだね。それに君が昨日、『本名なんてわからない』と言ったこともウソ、ということになる」リュウイチはやや非難するような目でくーなを直視した。くーなは決まり悪そうな顔をした。

「えへへ」そう言って、くーなは頭を搔くふりをした。

「だつてあんなところで、今のような話をするのも変でしょ。それに自分の名前も嫌いだつたわ。だから言いたくなかったの」

「家を出たくらいだから、それはそうかもしけないけど、何でよりによつて僕を お兄ちゃん に選んだの？」

「何となく、かな」くーなは冗談めいた口調で言った。

「だつてお兄ちゃん、優しそうだつたし、そもそもあの場所まで駅から歩く間、お兄ちゃん以外の人に会わなかつたよ」

「たしかにあの駅は人通りも少ないけどさ。よりによつてどうしてあの駅で降りたのさ」

「それも、何となくね。風景が田舎っぽくて気に入ったの。こういうところなら、きっと優しい人がいるにちがいなって思ったのよ」

「それで、電柱に寄りかかつてゲロしていた僕が、その いい人 だつたつて訳かい」

「ちょっと見ていて痛々しかつたけどね」くーなはそこで大笑いし、リュウイチもまた、つられて笑つてしまつた。

テレビではまたニュース番組が始まっていた。内容は、先程見たものと変わりなく、どの番組でも「核を放棄しろ」、「役人が税金を無駄遣いすることはけしからん」といった、ステレオタイプで大衆うけのする論調を 解説員 と称する人間が、生真面目な顔をしてテレビカメラに必死に訴えていた。その必死さが可笑しかつた。

「ところでくーなのお父さんが、家族にまで秘密にしたかつたこと

つて、何なんだろ？

「さあ、本当に必死に隠し通していたから分からないわ。でも一度父の部屋に忍び込んだとき見たんだけど、本棚にはやたら『核兵器』に関する本がたくさん並んでいたわね。英語で書かれた本もたくさんあつたわ。私は小学校の宿題で、感想文を書くために何かいいお話をないか、探しに入っただけなんだけど。我が家で本といえば、父の部屋以外にはほとんど置いていなかつたから」

「ふうん、核兵器ね」リュウイチの心に、何かが引っかかった。それは先程から、ニュースでやかましく核問題について、繰り返し語っていたからかも知れなかつたが。

リュウイチが腕組みをして、ニユースを眺めているとぐーなは思い出したように、頓狂な声を出した。

父の部屋はノートがときどき何となく賞えているんだけど、マリ秋のマークが入った分厚い書類が机の上にあつたの」ぐーなは何かを思ひ出すように、一秒間黙つた。

「確かに『日本の核兵器開発に関する』何とかって書いてあつたような気がする。子供の頃のことだから、よく覚えてないけど」

卷之二

「アーティスト」

「今から十年くらい前ね」

リコウイチは自分の思ひつこに懲りしいものを見て、それを口にするべきかどうか、逡巡した。いくらか顔が青ざめたように見え

た

「お兄ちゃん」心配そうにく一ながリュウイチの顔を見た。

リュウイチは口をつぐんだままだつた。二人の間には三十秒間、沈黙が居座つた。リュウイチはそれを払いのけるように、重い口を開

「今のがくーの話を聞く限り、君が小学校三年生だった約十年前か

ら、日本は核兵器を開発していた、いや少なくともしようとする計画があつたことになるんじゃないのかな……」

リュウイチは言つてしまつてから、自分の言葉の重みを改めて思い、再び口をつぐんだ。

くーにもその重みは伝わつた、ようだつた。岩にへばりつく貝のように堅く口を閉ざしたリュウイチとテレビとの間を、くーなの視線は行き来するばかりだった。

リュウイチは知つてしまつた、あるいは気付いてしまつた者の煩悶にもがいた。傍目からは瞑想でもしているかのように見えたが、自分の研究テーマでもあり、己の生業としても関わりのある「核」というものが、このような形でくーなという一人の少女とともにに入り込んできたことに、言い得ぬ戸惑いを感じた。

リュウイチの前に、不定形の大きな「何か」が立ちはだかっているように思えた。恐怖とともに、好奇をくすぐられた。我知らず高揚していた。

くーなが夕食の後片付けを始めたので、リュウイチは風呂に入った。入浴を終えて、再びテレビを見始めたリュウイチの横に、後片付けを終えたくーなが座つた。

「私もお風呂に入つていい、お兄ちゃん」くーなは最後の「ちゃん」のところで少し甘えるような口調になつた。リュウイチはこれまで兄弟を持ったことはなかつたが、あたかもくーなが本当の妹であるような錯覚を覚えた。（妹がいるのも悪くないな）

「うん。バスタオルは、洗面台の下の棚に入つている」

「ありがとう」くーなはそう言い残して、スキップでもするような足取りで浴室に向かつた。くーなは妹としての地位を得つつあつた。

「ああ、やつぱりお風呂つていいわね」くーなが年寄りじみた口調で言いながら、浴室から出てきた。風呂上りで頬を赤く上気させた彼女を見て、リュウイチの心拍数は毎分八十五回まで上昇した。

一人はしばらく風呂上りのコーヒーを楽しんだ。くーなはまだ未成年だったし、リュウイチもあまり酒をたしなむ方ではなかった。食後の「コーヒーならぬ、風呂上りのコーヒータイムは、」の日以来一人の習慣となつた。

「コーヒー タイムを終えると、リュウイチはくーなに、そろそろ寝ないかと提案した。昨日から、リュウイチの身に様々なことが続けさまに起きたせいで、リュウイチは心も肉体も疲弊していた。

「くーなはそこで寝ろよ」

リュウイチは今まで自分が寝ていたベッドを指差した。自分は昨夜くーながベッド代わりに使った、部屋の片隅に打ち捨てるように置いてあるソファに毛布を持つていつた。

「お兄ちゃんがベッドに寝たらしいじゃない。私はソファでいいわよ」

「いいから、ベッドで寝ろよ」リュウイチはさつさとソファに横になり、上から毛布をかけた。くーなは暫く立つたまま、どうすべきか迷っていた。やがて寝ていたリュウイチの腕を取り、彼の体を強く引っ張つた。

「ねえ、お兄ちゃん。そんなところで寝たんじゃ、寝た気しないでしょ。あつちで一緒に寝よ」

リュウイチの体はソファから引きずりおろされた。「いてて」と言いいながら、リュウイチは仕方なく立ち上がつた。

「何するんだよ。もういいから、ベッドで寝ろよ」

「だからあ、ベッドでお兄ちゃんと一緒に寝るう「やたらと語尾を伸ばした口調だった。リュウイチは狼狽した。

「何言つてんだよ。あんな狭いベッドに一人も寝れないよ。それにくーなは女だし、な

「別に男も女もないじゃない。だって私とお兄ちゃんは兄弟なんだから」

言い合いは一分三十秒の間続き、軍配はくーなに上がつた。リュウイチは狼狽した顔のままベッドに入った。身を横たえるとすぐに、

くーなが横にすべり込んできた。

リュウイチは眠つたふりをした。しかし横でくーながぴつたりと身を寄せて寝ていると思うと、再び心拍数が毎分八十五回になつた。眠ることなんてできなかつた。くーなはそんな様子に気付くことなく、リュウイチの腕にしがみつくように横になり、果ては足まで絡めてきた。

(困つた、全然眠れない。) リュウイチは仕方なくくーなの寝顔を見た。しかしくーなはまだ起きていた。至近距離で目と目が合つた。くりつとした丸いくーなの目が、微笑をたたえて細長くなつた。

「お兄ちゃんに会えてよかつたな」

くーなは一言呟くと顔をリュウイチの腕に埋めた。程なく静かで、安らかな寝息が静寂で満たされた部屋に響いた。すぐ目の前には、安心して警戒心を完全に解いてしまつた仔犬のように眠るあどけない少女がいた。

リュウイチは手を伸ばして、枕元の照明スタンドの灯りを消した。それからもリュウイチはくーなを起こしたりしないように、じっと体を硬直させたまま、まんじりともせず、時間だけが過ぎた。

結局リュウイチがうとうとしたのは、もう空も白み始めた頃だった。

### 3 研究所の朝

東京の梅雨は長く、その日も朝からひどい雨が降っていた。空気は比重を増し、体中にまとわりつくようだつた。傘をさして、研究所までの道を歩くリュウイチの足取りも重かつた。研究所に着いたときには、リュウイチの下半身は雨に濡れ、家を出たときと同じ服を着ているとは思えぬほど色が変化していた。濡れたズボンはリュウイチの歩みをいよいよ重くした。

研究所の入り口には、掌をかざす装置があつた。これで掌の静脈を読み取り、その形や模様から個人を認証し、識別する。

リュウイチは装置に手をかざした。緑色のランプが点灯状態から点滅状態に変わり、三秒経過するとピッという電子音とともに、入り口が解錠し、金属製の扉は滑るように横にスライドする。リュウイチは研究所の中に入った。

入り口のすぐ横にある階段で一階へ上がり、廊下を一番奥まで進んだところにある右側の部屋が、リュウイチの属しているプロジェクトルームだった。部屋の前にも入り口と同様の扉と認証装置が設けられており、研究所員であつても、立ち入りのできる部屋は厳しく制限されている。

また研究所の建物には、窓がなかつた。換気ダクトの取り込み口などは設けられているけれども、いわゆるガラス窓といつもののは一切なかつた。

研究所は遠くから見ると、雑木林の中にはまんと屹立する 箱に見えた。実際、数少ない近所の民家に住む人々は、研究所のこと を 箱 と呼んでいた。

リュウイチが箱の中のプロジェクトルームに入ると、その日は朝からざわついた雰囲気に満たされていた。主任研究員であるジジイを中心には、キトウ、コラ、ミヤシタという先輩メンバーが頭を寄せ合

い、何事かを話し合っていた。普段ならプロジェクトで使用している装置やその試験媒体となる重金属などの点検を行う当番である者が、最も早くプロジェクトルームにやってくる。ほかのメンバーは、当番が点検を終えた頃に出社してくるのが通例であった。この日、多くのしかも上級のメンバーがこのように早く出社することは、異様といえる。この日の点検の担当は、リュウイチだったのである。何か問題があつたのではないか。それでプロジェクトの主要メンバーの面々がツジイに呼び出され、こうして集まっているのではないのか。

リュウイチはそう推測して、部屋の入り口に掛けたる白衣を着ながら、先輩の集まっている部屋の中心に進んだ。

「おはようございます。何かあつたんですか？」

皆がいっせいにリュウイチを見た。口々に「おはよう」と挨拶を返してくれたものの、集まっている理由については誰の口からも説明はなかつた。

「リュウイチ、今日の点検当番は確か君だな」主任であるツジイは、今までの話し合いを中断して、そうリュウイチに呼びかけた。

「はい」

「では、まず点検をしてくれ。その後で話があるんだ。できるだけ早く、点検を済ませてくれ、頼むよ」

「は……はい」

主任研究員のツジイにそう言われては、点検にとりかかるしかなかつた。皆が何を話し合つて居るのかは気になつたが、取り付く島もない。

点検を始めた途端、リュウイチは部屋の様子が不可思議だと感じた。（今朝は、すでに誰か点検をしたのではないか）

いつもなら試験を終えた器具やらが雑然と放置してあり、それを正しい位置に戻すのも点検当番の役割の一つであった。しかしこの日は、一分の隙もないほどに整然とそれらが並んでいた。もちろん床などもきれいに掃除が終わっている。試験内容によつては、空氣中

の塵芥の類も影響するため、特別な掃除機で床といわば壁といわば、埃を吸い取るのもまた点検作業の一部になっていた。

結局、リュウイチは文字通り 点検 はしたけれど、この研究所で点検と称している作業は、この日に限っては何もすることがなかつた。

一通り点検を終えた後、リュウイチは皆のところに戻ろうとして、ふと足を停めた。

やはり、おかしい。明らかに、今日はもう誰かが点検をしたとしか思えない。だがツジイ主任は、僕に点検作業をするように命じた。どうしてだ。これはもしかして、僕に（つまり僕のような下っ端研究員に）彼らの話し合いの内容を聞かれたくなかったのではないか？

点検はすでに誰かが作業した後をなぞるようなものだつた。普段なら慣れているメンバーでも、三十分くらいかかるところだが、十分ほどで終わつてしまつた。ツジノはできるだけ早く戻つてくるようにと言つていたが、あまりに早く終わつてしまつた。今すぐ彼らのところに戻れば、点検作業の手を抜いたと思われる可能性がある、と考えた。そこでリュウイチは、部屋の奥にある衝立の中の、コーヒーなどが置いてあるちょっとした休憩コーナーに行つた。

衝立の中にある休憩用の丸テーブルには、先客がいた。

同期で研究所に入社したユイである。彼女は研究所の数少ない女性研究員であり、リュウイチが所属するプロジェクトチームの唯一の女性メンバーもある。少しだけ褐色の長い髪が印象的な、美しい女性だつた。背が高いこともあろうが、落ち着いた風貌は実際の年齢よりも年上に見えた。しかしそれは、彼女の美しさを低減することはなく、むしろその 落ち着き は、彼女の魅力に華を添えていた。

今やユイは、研究所創設以来のビューティフルウーマンとして、すべての男性所員に認知されていた。しかしその美しさは、容易に他

人が近づくことのできない、不可侵領域を彼女の周りに形成するものでもあった。そのためか、今のところユイは、特定の男性所員との噂などはなかった。

ユイは今朝も、オリュンポスの山に住むアフロディテのように、気高い美しさを伴い、静かにコーヒーを飲んでいた。白衣を着て、優雅に伸びた足を組み、静かにコーヒーを飲んでいる姿はやはり美しいかった。

コーヒーをカップに注いで、テーブルの脇にフラクタルな形状を構成するように置かれている四つの椅子の一つに、リュウイチは腰かけた。その椅子の位置は、ユイの椅子と六十度の角度に置かれていた。椅子に座ると、ユイのスラリと均整のとれた足が、眩しくリュウイチの目に飛び込んできた。

昨夜、くーなど飲んだコーヒーと比べたら、小豆のどしき汁のよじこ不味いコーヒーを一口すすつた。あまりの不味さにやや顔をしかめて、その顔のままユイの方に向き直つた。おはよう、とユイに声を掛けた。

「リュウイチ君、おはよう。今朝はずいぶん早かつたのね。私も早めに来ただけれど、すっかり点検が終わつてたんで驚いたわ」

「いや、そうじゃないんだ。確かに今日は僕が点検当番だったんだけど……」

今朝出社したら、錚々たるメンバーが集まつて、何事かを話し合つていたこと。ツジイ主任に点検を指示されたこと。点検をやるうとしたが、実際には点検はもうすっかり終わつていたことを、ユイに説明した。

だからあつという間に点検もおわつてしまつて、仕方なくコーヒーを飲みに来たんだ。

するとユイが答えた。

「そうなのよ。ツジイさん達が集まつて、話をしていたから、私もなんだか入りづらくて、結局ここに来てしまつたの」ユイは形の良い唇の端を少しだけ持ち上げて、ヴィーナスの微笑をたたえながら、

そう言った。

「それにしても、一体、何を話しかけているんだろう？」

「よく分からぬけど、皆さん、とても真剣な顔をしていたわね。近づくな、というオーラを発しているみたいだつたわ」

「本当にそうだね。『点検』の指示も、まるで僕に『この場から去れ』と言っているように思えたな」

「そんなことはないと思つけど……」

二人はコーヒーを飲みほすと、どちらともなく、そろそろ戻ろうかと言つた。コイは美しく伸びた髪をさつと翻し、立ち上がつた。リュウイチと自分の空の使い捨てカップを取り上げると、傍らのダストボックスにポンと放り込んだ。カラントカップとダストボックスが奏でた、乾いた音だけを置き去りに、リュウイチ達はツジイ主任と先輩メンバーが話し合いをしていた結界に向かつた。

二人が再び、そこに戻つたとき、ツジイを中心とした結界は、すでに解けていた。コイとリュウイチが近づくと、今度は結界の中心にいたツジイも、名前通りオニの形相で結界の境界に守役のように立つていたキトウも、快く笑顔で迎えてくれた。

「おはようございます」

コイとリュウイチの挨拶が、研究所の部屋にシンクロナイズされて反響した。

「おはよう」ツジイもすぐに挨拶を返し、リュウイチのほうを見て、手招きした。

リュウイチは二歩半進み、ツジイの正面に立つた。太字のフォントで印刷された一枚の書類を、ツジイは手にしていた。正面のリュウイチからは、その太い字が、逆さまに見えた。その文字は「研究所 視察計画」と読めた。さらに目を走らせると、小さく判読し難い文字も見えた。「大和田」と書いてあるようだつた。

「おい、リュウイチ！」

ツジイの呼びかけに、心ここにあらずといった表情のリュウイチは、

ばね仕掛けの人形のように飛び上がりながら「はい！」と反射的に答えた。

「なにをボーッとしてるんだ。今日は 特別な日 なんだ。ちょっとお願いしたいことがあるんだよ。説明するから、そこに座つてくれ」ツジイは自分の後ろにある椅子に腰を掛けながら、その正面の椅子に手を差し伸べて、リュウイチに勧めた。

リュウイチがやや緊張した面持ちで腰掛けると、ツジイが手にしていた先程の書類を見ながら話出した。

「実は今日、防衛厅のお歴々がこの研究所の視察に来られることになつた」

「えっ？ 防衛厅！」

「そうだ、防衛厅だよ。この研究所では、原子炉関係の研究が主なテーマだ。けれどうちの荒木所長は、一時期、防衛厅にいたことがあつてね。その頃一緒に兵器に関する調査なんかをやつていた、大和田さんという方がいる。間もなく書記官に昇格されるという噂もあるキャリア組だよ。その大和田さんが、所長に『一度視察させてくれ』と依頼してきたらしいんだ。その視察というのが、実は今日で、私はその視察の案内役を所長から仰せつかつたって訳だ」説明しながら、先程見た「大和田」という文字を指差した。今は、はつきりと見える。そこに書かれた文字は、「大和田」に相違なかつた。

ツジイは続けた。

「そこでだ。相手は何せ防衛厅のエライさんだ。しかも所長の親友にもある。粗相があつちゃいけない。」

「はい」リュウイチの声は、緊張のため若干ビブラーートを帶びていた。

「ああ、それと、とツジイはより厳しい顔をして言つた。

「もちろん今日の視察のことは、トップシークレットだからな！ 大和田さんもお忍びで来られる。だから、私も今まで、君たちにも大和田さんが来られることを黙つていたんだ」

「わかりました」二人の声が、絶妙のハーモニーで響いた。その声は、この日突然降ってきたイベントの重要度を、十分に理解していた。

「よし。無論、所内の案内、説明は私が行う。荒木所長の特命だからな。だが所内を一通り見て回るだけでも、結構大変だろ。だから君とユイ君に、休憩の際、コーヒーの給仕や所長との昼食の準備をお願いしたいと思っている。いいな。」

後ろで立つたまま、話を聞いていたユイの方を一度振り返り、顔を見合わせて軽くうなずいた。リュウイチは、一人を代表して「承知しました」と答えた。

「ところでツジイ主任。コーヒーは、あのいつもの休憩所の「コーヒードヨルシイ」でよいらしいでしようか？」

「何言つてるんだ。あんな不味いコーヒーをVIPに出してどうする。昼食もVIPが来られたとき用のお弁当を調達する店がある。君たちには、今から外でそれらを調達ってきて欲しい」

そういうとツジイは机上のメモ一枚を取り、白衣の胸に挿してあったボールペンでお弁当を調達する店の名前と簡単な地図を書いた。そして「ほい」と言いながら、それをリュウイチに手渡した。

「さあ、大和田さんは、十一時過ぎにはこちらに到着されることになっている。もう一時間そこそこしか残っていないぞ。手分けして、抜かりのないように急いでくれ」

そういうとツジイは、ポンポンと一つ大きく手を叩き、「じゃ、一旦解散」と言って、書類を手にして部屋を出て行った。

(「大和田」……どこかで聞いたような。くーな？ そうだ、確かくーの本名が「大和田匡子」って言つてたな。しかもくーのお父さんは……確か防衛庁のお偉いさんじやなかつたか。まさか！ 今日来る大和田という人が、くーのお父さん！)

座つたままで、いつまでも立とうとしないリュウイチに、後ろで立っていたユイが凜とした良く通るソプラノで、彼の頭上から声を掛

けた。

「リュウイチ君、時間がないわ。遅れるとまずいでしょ。早く行きましょ！」

コイの声は、細く研ぎ澄まされた針のように、痛みを感じることもなくリュウイチの頭に刺さった。彼は我に返った。

「ああ、ごめん。そうだね、早く行こう」リュウイチは椅子に座つたときと同じように、ばね人形になつた。

研究所を出ると、リュウイチはコイに、手分けして「おいしそーヒー」と「ベーグル弁当」を買つて行こう、と申し出た。彼女も同意した。

「じゃ、私コーヒーを買つてくるわ。おいしいのをね」「おいしい部分だけが、一オクターブ高かった。コイは少し上田遣いで、意地悪そうな顔をして笑つた。

「じゃ僕も、せいぜい大和田先生でも、箸をつけていただけるようなベーグル弁当を探してくるよ」

リュウイチは研究所から駅に向かう道に出た。最初に交差する四ツ辻で、手を振りながらコイと別れて、左に折れた。三十分後に研究所の前で落ち合つことにし、遅れそうなときは、互いの携帯電話に連絡することを申し合わせた。「粗相のない」ように、である。

弁当を買つに向かう道すがら、リュウイチはべーなの顔と「大和田」の文字をずっと反芻した。

#### 4 邊境（前書き）

2008年、あたましておおでいひるがこあ。今はまだひじへお  
願いします。

箱の前に、大きな黒光りした車が到着した。入り口では、荒木所長以下、研究所のメンバーが整然と並び、今や遅しと車の到着を待っていた。

荒木は紺色のスーツを着ていたが、その横には一様に白衣で固めた所員が、ズラリと並んだ。灰色の空と灰色の箱を背景にして、白衣の集団は周りの景色からくつきりと浮かび上がった。さまざま色彩に揺れている傘と白で統一された集団のコントラストが、ますます彼らだけを浮かび上がらせた。

禍々しいほどに黒い車が、箱に向かつてゆっくりと進んできた。その車は、荒木の三メートル手前で、右にステアリングを切った。見事に荒木の横に左後部座席の扉が停止した。

後部の座席には、誰かが乗っているようであった。しかしリアウインドウには車と同様の黒い遮光フィルムが貼られており、車中の人間を外部から確認することはできなかつた。

車が停止して約十五秒経過した。右のフロントドアが開き、中から典型的な運転手と思しき人物が頭を出した。車越しのため上半身しか見えなかつたが、神經質そうな線の細い男である。車を出るとすぐ、黒い大きな傘を開き、荒木に向かつて会釈をした。そして長く伸びた車のフロント部分を大きく回り、左後部の扉のところに進んだ。

「中川さん、『苦労さまです』田の前に運転手が来たときに、荒木が声をかけた。中川と呼ばれた男は、扉に伸ばした手を一度停め、改めて荒木に向かい、今度は深々と頭を下げた。

「『無沙汰しております、荒木所長。研究所の視察をご快諾いただけ、本当にありがとうございます』

いささか芝居がかつてゐると思われるほど丁寧で紋切り型の言葉で、中川は挨拶を返した。再び扉に向き直り、持つていていた大きな傘を扉

の上部に差しかけた。そして純白の手袋をした手で、ゆっくりと扉を開いた。「ガチャリ」と扉の開く音は、あたかも大聖堂の扉を開けたときのように、莊厳な音に思われた。

開かれた扉から、中川に輪をかけて神経質そうな男が、ゆっくりと立つた。仕立ての良いダークグレーのスーツに包まれた体躯はがつしりしていたが、太っている印象はなかつた。十分すぎるほどの威儀を保つてはいたが、むしろどことなく脆さを感じさせる雰囲気があつた。

すぐに中川は濡れないように傘を差しかけた。

中川と今しがた車から出た男は、扉をはさんで立つていた。そのため大きな傘といえども、一人を雨から覆うことはできなかつた。中川の衣服にはたちまち梅雨の重たい雨がしみこんだ。

「やあ、荒木君。元気そうだな」

「そちらこそ。ずい分出世されたみたいで何より。今日は生憎の天氣だな」

荒木の言葉に、男は相好を崩しながら右手を差し出した。荒木もそれに応えて、三秒間笑顔で握手をした。男は、横で傘を差し出している中川には、まったく頓着しなかつた。

荒木が握手をしながら、ちらつと中川に目を走らせた。そして握手していた右手を解くと、男に言った。

「さあ雨の中で立ち話もなんだから、早速だが中へ入ろう、大和田君」

「うむ」荒木に促され、大和田は研究所の入り口に進んだ。後ろから傘を持って、中川が寸分違わぬ歩幅で、傘を持ったまま続いた。扉の前で、大和田はようやく後ろに中川が立っていることに気付いた、という風に振り返つた。

「ああ、中川君。今日は一日お忙しそうになる。午後四時にまたこちらに車を回してくれ」

「わかりました、先生」中川は恭しく答えた。

「うやうやしくね」

荒木の合図でツジイが認証装置に掌をかざし、入り口の扉が開いた。

大和田は感心したように、荒木に尋ねた。

「荒木君、こちらの研究所は静脈認証で制御されているのかい？」

「うん、そうだ。入り口も各部屋も、すべて地下の中央監視センタ－にある認証用サーバに繋がっている認証装置で制御しているんだよ」

大和田と荒木を先頭に、所員が続いて入り口のホールまで進んだ。

そこで振り返つて、荒木は集まつた所員たちに、大和田を紹介した。「みんな、こちらが今日、当研究所の視察に足を運んでくださった、防衛庁の防衛政策局におられる大和田局長だ」

横に立つた大和田は、一度首だけでお辞儀をした。

「今、荒木所長に紹介いただいた大和田です。皆さん日々研究に取り組んでおられるお忙しい身ながら、今日は私の視察を承諾いただいて、ありがとうございます。かねてから荒木所長には、最先端の研究設備や優秀な諸君があげてこられた成果の話を伺っていた。だから一度、この目で研究所と諸君の成果を見たくなり、荒木君にわがままを言って、視察を了承いただいた次第だ。是非、いろいろと見せていただきたい」

いかにも役人調の、いささか長い挨拶が終わつた。大和田は再び、目の前に並ぶ白衣の集団に頭を下げた。今度のお辞儀は、腰から深々と下げるもので、きつちり三秒間だった。

「そういう訳で、今日は君たちの口頃の成果をとくと大和田局長に見ていただくなつむりだ。大いに成果を自慢してやつてくれ」

荒木は言いながら、大和田と顔を見合わせ、笑つた。その声はホール中に響いた。白衣の集団が大和田に揃つて頭を下げた。

荒木がツジイに右手を伸ばして、手をひらひらさせて「ちょっとこつちへ来てくれ」と合図した。ツジイは素早く、荒木のところまで小走りした。荒木はツジイを、大和田に紹介した。

「こちらが当研究所の主任を務めるツジイ君だよ。君の視察の案内

は、ツジイ君に任せてある。僕の片腕といつてもいい男だ」

「本日は案内役を務めさせていただきます。ツジイです。よろしくお願いします」

ツジイが大和田に頭を下げる。大和田は右手を差し出して、「ああ、よろしく頼むよ」といながら握手を求めた。おずおずとツジイも右手を差し出した。

握手が済むと荒木が、大和田にまず自分の部屋に来いと誘った。

「視察の前に、これまでの成果なんかを一通り説明しよう。まずは私の部屋で話そつ」

荒木はツジイに言った。

「ツジイ君、悪いが私の部屋に「コーヒー」を一つ運んでくれないか。君が運んでくるんだぞ」荒木は大和田とともにホールの奥にある所長室に向かつて歩き出しながら、もう一度念を押した。

「いいかい、僕の部屋には君が運んでくるんだ」

二人はツジイと白衣の面々に見送られながら、ホールから続く廊下を進み、所長室に吸い込まれた。一人の姿が消えると、それまで整然と並んでいた白衣は、それぞれの部屋へと散つていった。

ツジイはプロジェクトルームに戻ると、リュウイチとユイを呼んだ。

「どうだい、準備の方は」

「はい。コーヒーも貰つてきましたし、昼食の方も手配できました。昼食は、お昼前にこすりに届けてもらつよう、お願ひしてきました」リュウイチが答えた。

「そうかい、ありがと」

「ところでツジイ主任

「うん、何だい？」

「先ほど所長が、ツジイ主任に、自ら「コーヒー」を持ってくるよう命を押していましたが、どうしてですか？」

「あの部屋に入れるのは、きっと所長以外に僕だけだからじゃないかな」

「そりなんですか！」

「今日の視察の案内を任されたときに、所長がいろいろと打ち合わせもあるからと言つて、下の管制センターに所長室への入室権限りストに私も登録してくれるよう、お願いしてくれたんだ」

「なるほど、そういうことですか。ほかに登録されている人はいないんですね」

「うん。確かに所長以外には、僕だけのはずだ。所長の部屋にはいろいろと機密情報もあるからなあ。そういう誰でもが立ち入れるようでは、困ってしまうだろ？」

そういうとツジイは立ち上がった。「じゃ、これから打ち合わせが始まると、何かあつたら連絡してくれ」

リュウイチとユイも、ひとまず今日の実験の準備にとりかかった。

結局、荒木と大和田の会談は、その日の午前中いっぱいの時間を要した。

## 5 ハッピー・バースデイ

リュウイチは調布駅に降り立つと、汗を拭った。梅雨はもう明けようとしており、真夏の陽光に地表にある全てのものがとろけてしまいました。

七月二十九日。くーなの十九回目の誕生日にして、リュウイチの二十三回目の誕生日である。奇しくも同じ日に生まれた二人は、突然の出会いから三十日という期間を共有したことになる。

武蔵野丘陵にあるこのベッドタウンの空は暮れなずみ、それでも暑さは一向に衰えを知らずにいた。コンコースを抜け、駅に併設されたビルに飛び込むと、冷たい空氣に包まれた。吹きだした汗が瞬時に揮発して、急激に体温を奪い去るような寒さを覚える。

地下に降りて、リュウイチはいくつかのコンフェクショナリーを順に見て周った。しかし見れば見るほど、どの店でくーなのバースデイケーキを買つべきかという、簡潔だが深遠な命題を前に困惑うばかりだった。

しかし冷風に包まれた地下街で、深遠なる命題への思索をするための時間は、長くは与えられなかつた。リュウイチが着ているスーツの胸ポケットの中で、携帯電話が震えたからである。

くーからのメールが届いていた。

おつかれさま。お兄ちゃん、誕生日ケーキ買つたからね！ 早く帰つて、一緒にお祝いしよう。

了解。実は今、俺もケーキを買おうと迷つっていたところ。じゃこれから家に帰るよ。

手早く返信すると、再び地上階に出た。

一階でフロアマップを見て、小さなジュエリーショップに向かう。

店員は愛想良きいらつしゃいませと声をかけたが、リュウイチはその声を意図的に無視した。そして素早くショウウインドウの中にちりばめられたアクセサリーと、その横に鎮座する、顔を近づけな

いと読み取れないほど小さな字で値段の書かれた札を見回した。

声をかけた手前、リュウイチの前から動くこともできず、笑顔を凍りつかせたまま、その場に硬直した店員に、一つのピアスを指差した。

「これを」リュウイチが放つた短い呪文に、店員の凍りついた微笑は氷解した。

「こちらでござりますね」ほっとしたような顔の店員はすかさず顧客向けの微笑を作り直し、リュウイチをにこやかに直視したまま言つた。

ショウウイングウの中に、すらりと伸びた白い腕が差し入れられた。ピンク色の小さなダイヤ型をした石がはめ込まれたピアスは、店員のすらりとした指につままれ、ショウウイングウの上に置かれた。「どなたかへ、贈り物ですか？」

「……ええ、まあ。兄弟なんですが。誕生日で」

「では、ギフト用にお包みします。こちらへどうぞ」  
店員に促され、リュウイチはレジカウンターに進んだ。店員にリボンの色を尋ねられ、桃色のリボンを選んだ。くーなを思い出すと、一緒に家に連れ帰ったときの、薄桃色のバスタオルを被つた姿が、今も印象的な記憶としてあつた。そのとき以来、リュウイチにとって、くーなのテーマカラーは桃色になつた。

青いパステルカラーの紙に包まれた小さな箱をカバンにしまうと、リュウイチは出口に向かつた。自動ドアが開くと、重く、湿っぽい外気がビルの中へなだれ込んできた。

「ただいま」

リュウイチが部屋に入ると、すでにテーブルの上にくーなの心づくしの料理が並んでいた。

テーブルの真ん中には、純白のクリームの上に色とりどりのフルーツが並んだケーキが鎮座していた。中央にはチョコレートできた楕円形のプレートが置かれている。白いチョコレートで、英語のよ

うな文字が書かれていた。

H a p p y   B i r t h d a y   R y u i c h i   & a m p ;  
C o o n a

リュウイチの顔がほころんだ。キッチンから、最後の一皿を手にし  
たくーなが出てきた。

「おかえりなさい。お兄ちゃん、お誕生日おめでとう」

「ありがとう。くーなも今日だろ。おめでとう」  
くーなは手にしていた皿を、テーブルの残り少ない隙間に無理やり  
押し込んだ。

「さあ、お兄ちゃん、早く着替えて、手を洗ってきて。お祝いしま  
しょ」

「うん」リュウイチは部屋に入り、カバンを置いた。スウェットに  
Tシャツといいでたちで洗面所に向かうと、汗でぬらぬらした顔  
と手を洗った。そしてもう一度忍び足で自室に戻ると、カバンの中  
から桃色リボンの箱を取り出し、スウェットのポケットに押し込ん  
だ。

テーブルに着くと、ケーキには太いキャンドルが一本と細いのが三  
本立っていた。

「くーな、君の歳にあわせたうつくにしたらいいじゃないか。そ  
のほうが本数も多いしさ」

「多すぎて、一度で吹き消せないわ。それに、それしかうそくを  
貰つてこなかつたの」

リュウイチの許に身を寄せてからすぐ、くーなは調布駅の近くの洋  
菓子店でアルバイトを始めていた。この日のケーキも、その店で安  
く譲つてもらつたのだと言つ。

食後のコーヒーを飲みながら、リュウイチはポケットから小箱を取  
り出した。長い間、ポケットの中に幽閉されていた小箱は、リボン  
の形がやや崩れかけていた。リュウイチは、リボンの形を手早く直  
し、包みをくーなに手渡した。

「改めて、誕生日おめでとう」

くーなは突然差し出された小箱に、目を丸くした。

「ありがとう！ 本当に貰つていいの」丸い目をしたまま、くーなは両手で包み込むように、小箱を受取った。

「何かなあ？ 開けてみてもいい」

「ああ、安物ですまないけど……」

細く白い指先がリボンの端をつまみ、惜しむようにゆつくりとリボンが解かれた。包装紙を開けると、中からビロードのような布が貼つてある、小さな箱が現れた。

「わあ、ピアスね。カワイイ！ 本当は高いんじゃない、大丈夫？」  
くーなは笑いながら、リュウイチの顔を覗くようにした。

「いや、安物だよ。まだ安月給だから、それで勘弁してよ」

「どんでもない。嬉しいわよ、お兄ちゃん。本当にありがとう。居候させてもらつていいだけでもありがたいのに……」

一瞬、くーなは顔を歪めた。双の瞳がうるんでいた。

それまで着けていた本当に小さなピアスを外すと、くーなはピンクに輝くプレゼントを手にした。くーなの両耳で揺れるそれは、小さくて白い彼女の顔によく映えた。

「どう？」

「うん、とってもよく似合つよ。馬子にも衣装、だな  
「ひじ」

くーなはからかうリュウイチを叩く真似をして、一瞬ふくれつ面をした。そして二人は顔を見合わせて、大きな声をあげて笑つた。

「さあ、お次はケーキね」

くーなはケーキに並ぶキャンドルに火を点け、部屋の灯りを消した。  
再び席に着いたくーなの両耳のピアスが、キャンドルの光を受けて、艶かしく揺れていた。

「吹き消していいわよ、お兄ちゃん」

その声にリュウイチは一息で炎を吹き消した。真つ暗な空間に、キヤンドルの先からほの白い煙が、ゆらゆらと立ち昇つた。

部屋の照明が再び室内を明るく照らした。くーなは拍手をしながら、

歌いだした。このときのくーなはリュウイチのところに来て、一番楽しそうに、輝いて見えた。

わざやかな誕生日の祝いの翌日。蒸し暑さは相変わらずである。この日、仕事を終えて調布駅に降り立ったリュウイチの横に、一人の女が立っていた。ユイだつた。

金曜日だったので、週末を深大寺の近くに住む姉夫婦のところで過ごすと、彼女は話した。リュウイチは、それならば調布まで一緒に行こうとユイに申し出た。

そのユイが、リュウイチと一緒に調布駅の改札を出て、バスターーミナルのある駅のロータリーに現れたのである。時刻は七時を回っており、くーなは一時間ほど前にアルバイトを終えて、もう部屋に戻っているはずであった。

しかしきーなは、駅の横の、昨日リュウイチがプレゼントを買い求めた店のあるビルから、今まさに出てきた。

昨日、自分だけプレゼントを貰った手前、ネクタイでもと思い立ち、アルバイトの帰りに立ち寄つていたのだつた。

リュウイチはくーなに気付いていなかつた。しかしきーなからは、背の高いリュウイチとあまり背格好の変わらないすらつとした容姿の、美しい女性が並んで歩くのが良く見えた。

くーなはぐるりと踵<sup>きびす</sup>を返した。駅のロータリーを大回りして、後ろを振り向くことなく、一目散に向かつた。

リュウイチとユイは、談笑しながら 深大寺行き のバス停の場所まで、肩を並べて歩いた。ユイはまだくーなと面識はなかつたが、リュウイチはすでに、突然我が家に闖入してきた我が妹について、すでにユイに話していた。

「このバス停から乗ればいいよ。じゃおつかれさま。気をつけて」バス停で、リュウイチはユイにそう言つと、再び駅の方へ戻ろうとした。ユイの声が、リュウイチの背中を追いかけた。

「じゃ、妹さんにもよろしくね」

リュウイチは、コイに背を向けたまま、大きく上げた手を三回降つて、挨拶した。丁度バス停に、深大寺と表示されたバスが入ってきたところであった。

その頃、くーなはすでに駅を離れて、大股で、今にも駆け出しそうなほどの早足になり、マンションへと向かっていた。

帰宅するなり、リュウイチはまだ靴も脱ぎ終わらない「ひー、くー」ながら細長くて、薄い、黄色の包装紙にくるまれた箱を押し付けられた。

「はい、プレゼント」

くーなはそのまま、サンダルを履いて出て行った。すれ違ひざま、ちらと見えたくーなの横顔は、泣いていたように見えた。

「おい、くーな……」

その声は階段を駆け下りるサンダルの音にかき消された。

取り残されたリュウイチは、彼の胸の中に取り残された包みを見た。テーブルの脇にカバンを置いて、包みを開けた。

中から細長くて薄い箱が出てきた。開けると黄色地に水玉模様をあしらったネクタイの上に、誕生日おめでとうと書かれた小さなカードが添えられていた。

リュウイチは玄関を振り返った。くーなの幻影でも探すように。しかしそこには、開け放たれたままのドアと、ドアで長方形に切り取られた廊下の白い壁が見えるだけだった。

カードを箱に収めて、再び閉めた。リュウイチはソファに上着をポンと放り投げ、もう一度靴を履いた。廊下に出て、階段を駆け降りた。

マンションを出ると、左右を見回しながら、大きく「一回、「くーな！」と叫んだ。無論、返事はない。

リュウイチは駅に向かつた。まだあまり土地勘のないくーなは、おそらく駅の方角に向かうと判断した。

しかし駅までの道程で、くーなを見つけることはできなかつた。駅

とマンションの間を何度もくーなを探しながら、三往復した。リュウイチは今にも泣きそうな顔になつて、もう一度駅に向かつた。駅に着くと、ロータリーを三人組で歩いているコイに出くわした。姉夫婦とともに、再び食事に出てきたところだつた。

コイは姉夫婦を紹介しようとしたが、リュウイチの姿を見て、その言葉はコイの口から出る前に飲み込まれた。

汗みずくになって、荒い息をしているリュウイチを見て、コイは目を丸くした。

リュウイチ君、どうしたのよ？ 汗びっしょりになつて、家に帰つたんじゃなかつたの？

くーなが……あ、妹が出て行つてしまつたんだ。  
リュウイチは膝に手を突いて、前かがみになると大きく五回、肩で息をした。そしてコイに家に帰つてから、くーなが家を飛び出すまでの経緯いきわざを話した。

ふうん、くーなちゃん はリュウイチ君に誕生日プレゼントを渡してから飛び出たのね。

そうなんだよ。まったく訳が分からない！

未だ息が整わず、途切れがちな言葉でリュウイチが語つた。

そうでもないわね。きっとくーなちゃんは、駅で私たちが話しながら歩いているのを見かけたのではないかしら。

でも、あの時間にくーながどうして駅に……。それに君と僕が歩いているのと、くーなが家を出でいくことの因果関係が分からない。

ふふふ、とコイは口に手を当てて笑つた。

そういうものよ。オンナゴコロね！

オンナゴコロ？

そう。失礼だけど、くーなちゃんはリュウイチ君と血が繋がつた兄弟ではないでしょ？ つまり 恋ね。ジェラシーと言い換えてもいいわ。

ジェラシー……、じゃくーなは君と歩いている僕に妬いていた

という訳かい？

おそらくね。まして今は、あなたのところしか身を寄せる場所がないんだもの。唯一頼りにしていたリュウイチ君が、私と歩いているのを見て、心細くなつたかもしれないわね。

そう言つと、ユイはくーな搜索の手伝いを申し出た。

折角食事に出てきたんだろう。お姉さんたちに、悪いよ。

ま、私にも責任の一端があるわけだし。くーなちゃんとつて、知らない土地でいつまでも一人にしておくのは可哀そだわ。

しかし、君の責任ではないよ。

いずれにしても、一人より四人の方が早いわ。

ユイは姉夫婦に向かつて言つた。

「人探しをするの。私もあまりこの辺りの地理は詳しくないし、手伝つてくれない？」

そういうと再びリュウイチを見た。

「ところでくーなちゃんの写真、持つてない？」

リュウイチは携帯電話を開き、デジタルカメラで撮影したくーなの顔を見せた。ユイは忘れないように、ユイの携帯電話に写真をメールで送信してくれないかと言つた。

万事できぱきと事を進める、研究所での姿そのままのユイがいた。見つけたら、互いに携帯電話で連絡することを申し合わせて、駅周辺はユイと姉夫婦に任せた。

「折角のお食事を邪魔してしまって、申し訳ありません。よろしくお願ひします」

姉夫婦に一つ頭を下げて、リュウイチは再び自分のマンションの方へと駆け出した。

マンションに近づくと、街灯の物陰に人影が見えた。くーな、だつた。

くーなは電柱に寄り添うようにして、しゃがみこんでいた。それを見たりリュウイチも、一気に膝の力が抜けて、同じようにしゃがみこ

んだ。

「くーな

荒く呼吸を繰り返す合間に呼びかけた。返事はなかつた。しゃがみこんだくーなは、電柱の街灯が形づくる、影のわだかまりの一部と化していた。

「くーな、だらう?」

リュウイチは立ち上がりと電柱に近づいた。黒いわだかまりがわざかに動いた。くーながリュウイチから顔を背けたせいだつた。

「どうしたんだ、くーな! とにかく家に戻ろ!」

それきり微動だにしようとしない影をリュウイチは掴んで、強引に引き上げた。泣いた痕がくつきりとついたくーなの顔が、街灯の明かりでぼんやりと照らされた。

くーなは何度か、リュウイチの手をふりほどこうとしたが、やがておとなしくなつた。手を掴んだまま、リュウイチは部屋に戻つた。テーブルの足の横に置かれたカバン、ソファに打ち捨てられた上着、テーブルの上の細長い箱が、出て行つたときのまま空しく置かれていた。

リュウイチはテーブルの上の箱を手にすると、軽く二回、テーブルの脇にうずくまるようにしているくーなに振つて見せた。努めて平靜を装うように、くーなに語りかけた。

「これ、ありがとう。くーなもいいセンスしているなあ」

そういうつでくーなに微笑んで見せた。くーなは笑わずに、自分の膝を見つめていた。

そつとリュウイチは、くーなの腕をとつて、立たせた。もう抵抗はしなかつた。再び、くーなの瞳は涙で満たされた。

「さあ、もう泣くな。顔を洗つてこいよ。明日は休みなのに、その顔じやどこにも出かけられないぞ」

口を開くとためどなく涙が出そうだったくーなは、何も言わず、かすかに頷いて、洗面所に向かつた。

くーなが洗面所に言つてゐる間に、リュウイチはユイの携帯電話に

ダイヤルした。三回の呼び出し音の後、ユイが出た。まだ何も言わないうちに、ユイの声が電話口から飛び出した。何かにつけ先を読む、回転の速いユイらしかった。

「くーなちゃん、見つかったの？ 見つかったのね。

「ああ、実はマンションに戻ると、マンションの入り口についてさ。灯台下暗しつて感じだよ。

「良かつたじゃない。じゃくーなちゃん、今家にいるのね。うん。ところで君たちは今、どこにいるの？」

「メゾン調布第一 つて建物が見えるわ。

「じゃあ、僕の家の近くだ。ちょっと待ってくれるかい。

リュウイチは表の道路に面したベランダに出た。さっきまでくーながしゃがんでいた電柱を見た。電柱の先に、小さく三人組が見えた。

「おおい。

電話にそう呼びかけながら、ベランダから手を振った。ユイは何度か振り返つたりしていたが、やがてベランダのリュウイチを発見した。

「ああ、見えたわ。そこね。

「せつかくだから、少し寄つていってられないか。お茶くらいいりだらう。

「そうね、じゃお言葉に甘えるわ。くーなちゃんにも会いたいしね。

そこで電話は切れた。三人組は電柱の影まで来ていた。

くーなも洗面所から戻ってきた。腫れぼつたい目をしていた。リュウイチはコーヒーを淹れるために台所に向かいながら、くーなに話しかけた。

「くーな、もうすぐ素敵なお客さんがやつてくるぞ。インターфонが鳴つたら、鍵を開けてくれ」

五秒後、果たしてインターфонは鳴った。くーなが玄関の鍵を開けた。ドアノブがゆっくりと回り、ドアが開いた。

くーなの目の前に、先程駅で見た綺麗で背の高い女性がいた。

「「んばんは。くーなちゃん、ね」

くーなの目の前に、再び件の美麗な女性が現れ、いたずらっぽい顔で微笑んでいる。その女性の後ろに、もう一人の男女がいた。

「どうぞ」

くーなは目を丸くした。

（さつきのきれいな人じゃない。どうして私の名前を知っているのかしら？）

「お邪魔します」ユイは、くーなのジョラシーを再び増長させるほど上品な口調で言った。静かだがよく通る声だった。脱いだハイヒールにも、くーなにとつては大人の女性の魅力があふれているように見えた。

「いらっしゃい」リュウイチは台所から出てきて、ユイと姉夫婦を迎えた。

「くーな搜しを手伝つてくれてありがとうございました」もう一度、三人に頭を下げた。リュウイチとユイの顔の間を、秒間一往復のスピードで、くーなの視線がせわしなく往復運動を繰り返した。

「くーな、こちらは僕と同じ研究所のユイさんだ。後ろにいるのが、ユイさんのお姉さんとその旦那さん。お姉さん達は調布の近くに住んでいて、ユイさんは週末、お姉さんのところに遊びに來たつて訳さ」

まだ見開いた目を往復運動させているくーなに、かいつまんでユイを紹介した。リュウイチに対するライバルとして見ていたユイにする、リュウイチ自身からの説明を聞いて、くーなは自身の誤解に屈服するしかなかつた。

くーなは恥ずかしそうに下を向いた。

早くも察したユイが、くーなの肩にそっと手を置いて、語りかける調子でくーなに囁いた。

「くーなちゃん、いいのよ。勘違いするのも無理はないわよね。それにおかげで、こうしてリュウイチ君の『自慢の妹さん』に会えたんだし……」

「おいおい、僕がいつ自慢したんだい」リュウイチはいきなりのコイの言葉に、思わず横槍を入れた。コイは取り合わず、くーなの顔を見たまま、「ふふふ」と笑っていた。その笑みはまさしく大人の女のそれであった。くーなは、その余裕を悔しく思った。

しかしそう完全に失つたわけではないくーなのプライドが、彼女の顔に笑みを作った。やがて悔しさは、コイがリュウイチに 特別な感情を持つていないとわかると、姉に対する思慕へと変化した。

リュウイチはその笑顔を見て、再び台所に戻った。程なく湯気を立てている五つの「ホールカッブ」を載せた盆を持ち、テーブルに現れた。

結局その日は、リュウイチ、くーな、コイ、コイの姉夫婦で、リュウイチの部屋で食事を共にした。近くで買ってきた寿司を皆でつまむだけの簡素な食事だったが、久しぶりの賑やかな食卓は、リュウイチもくーなも、晴れ晴れとした気持ちにさせた。コイらが暇乞いをする頃には、くーなとコイもすっかり打ち解けて、あたかも本当の姉妹のように談笑しているのだった。

「じゃそろそろ失礼するわ。リュウイチ君、すっかりお邪魔したわね

「いや、こちらこそ……」リュウイチの言葉をすぐに受け取つて、くーなが横から口をはさんだ。

「コイさん、また遊びに来てね」

「現金な奴だ」そう言つと、リュウイチはくーなの頭を小突く真似をした。くーながコイに向かつて、ぺろりと舌を出した。

ひとしきり五人は晴れ晴れとした笑いを交わし、コイと姉夫婦は立ち上がつた。

リュウイチは玄関まで見送りに出たが、くーなはそのまま玄関を、ユイたちと一緒に出て行つた。

「おい、くーな。今度はどこへ行くんだよ

「コイ姉さん を下まで見送りに行くだけよ 振り向いてくーな

はリュウイチに頷いた。

「一体、何人を兄弟にしたら、気が済むんだ！」あきれ顔でリュウイチが言った。

ユイがくーなに向かつて、諭すように言った。やはり 大人の女の余裕を含んだ口調で。

「だめよ、くーなちゃん。そんなこと言っちゃ。今度は、お兄ちゃんが妬くわよ」

リュウイチを玄関に残して、ドアがゆっくりと閉まった。リュウイチは「ほっとけよ」と口を尖らしたが、その声は閉じたドアに跳ね返された。

仕方なくリュウイチは、ベランダに出て眼下の道路を見た。去りゆく三人組に向かつて「また来てね」と言いながら、いつまでも手を振っているくーなが見えた。

その姿を見ていると、くーながあの 大和田局長 の娘かと、リュウイチは訝しく思った。リュウイチの心に兆して以来、ずっと黒い濁おりとしてわだかまっている あのこと が、またも鎌首を持ち上げていた。

くーなが手を振っている間、リュウイチは飽かず彼女をじつと見つめた。

## 6 檻、兵器、ペアス

誕生日の翌日、リュウイチはくーなと連れ立つて、動物園に行つた。前夜、ユイと姉夫婦が帰った後に、リュウイチは「明日、ディズニーランドにでもいかないか」と持ちかけた。くーなの年頃なら、きっと誰もが一番行つてみたい場所だと考えたからである。

しかしきーなの反応は、案外だつた。

「動物園がいいな。私ね、遊園地の乗り物つて苦手なの。特にジエットコースターのようなものは、あまり好きじゃないわ」リュウイチは自分の提案が却下され、しばらく逡巡した。だがくーなの意思を尊重することにした。

調布からなら、京王線で行ける動物園もあるしな、と考えた。

「じゃ、そうしよう。実は僕もまだコアラを見たことがないしね」

動物園に着いた途端、くーなは子供に返つたよつこほじやぎ、檻のなかの動物に「こんにちはア」などと話しかけ、手を振つていた。両耳に光るピアスだけが、くーなの本当の年齢を主張していた。開園とほぼ同時に入场したにもかかわらず、午前中いっぽいかけて、おおむね半分の動物を観るのがやつとだつた。

「遠足の前の日みたいな気分で、眠れなかつたの」と言い、やたら早起きしたくーなが作った弁当を、シマウマの見えるベンチで広げた。快晴の空から降り注ぐ陽光は、一人のむき出しの腕を焦がすようだつた。

だが「一人とも、気分は清々しかつた。<sup>すがすが</sup>

「くーな、おいしいよ。それにしても、随分たくさん作つたなあ」「だつて眠れなくて、作る時間がたつぱりあつたもの。どんどん食べてね」くーなが笑つた。

「でも、どうして動物園なんだい？ 普通、くーなぐらいの女の子つて、ディズニーランドなら間違ひなく行きたがると思つていたん

だけどな

「嫌いじゃないけど、動物園には 本物 の動物がいるでしょ。デイズニーランドじゃ、中に人間の入ったネズミやアヒルしかいないじゃない」

「ま、それはそうだけど……」

「それに海賊が戦争するアトラクションとか、あまり夢があると思わないわ。檻に入っていても、本物の動物を見ているほうが素敵よ」動物の方が良いと語るくーなの瞳は、不思議に強い意志を持った輝きを放つた。

くーなの心づくしの弁当を食べて、リュウイチは近くの売店で、コカコーラを二つ買ってきた。よく冷えた黒褐色の液体は、炎天下に焼けるような一人の喉を快く潤した。

「じゃあさ、午後は檻に入っていないライオンを観よう。ライオンの代わりに、僕たちがバスの中から観るんだ。僕たちが檻に入るんだよ」笑いながら、リュウイチがそう持ちかけた。

「なるほど、私たちがライオンに観られるって訳ね。面白そう！」弁当の後始末を終えると、通称ライオンバスと呼ばれている、色が塗られていなければあたかも護送車を思わせるバスの乗り場に向かつた。

バスに乗ると、しばらくしてライオンが群がつてきた。バスの窓にはライオンが首を突つ込まないよう、鉄格子が嵌め込まれていた。鉄格子を張り巡らしたバスの車内は、動く檻であつた。

ライオンがバスの外に取り付けられた肉片目がけて、のつそりと歩み寄つた。肉片をむさぼるライオンを、鉄格子一つ隔てた車内から見た。その迫力に、くーなは手を打つて喜んだ。まるで自分の指まで差し出してしまってではないかと、心配になるほどに。

「おい、くーな。騒ぎすぎだぞ。子供だつてもう少し行儀良くライオンを観ていいんじゃないかな」

「だつて……」くーなは少しそうな素振りをした。それでもバスの周りの肉片にかじりつくライオンから、目を離すことはなか

つた。

「こんな近くでライオンを観るの、初めてだもん」  
ゆっくりとバスは走っていたが、それでも十分そこで短いサフアリツアーは終わった。くーなは名残惜しそうに、遠くなるライオンの群れを見送った。

「ああ、楽しかった。じゃいよいよ、次はコアラね」「そう言って、コアラ館と書かれた看板が示す矢印の方角へ、駆け出した。

全ての檻を余さず観た。

最後に出口の脇に設けられた土産物売場に立ち寄った頃には、閉館も間近い時間だった。夏の空はまだ高かつたが、土産物を物色していると、閉館を告げるアナウンスが流れてきた。

くーなはおそろいのマグカップを手にして、リュウイチに見せた。風呂上りの「一ヒー用だと言つ。

閉店間際で、レジの前には列ができていた。カップを抱えたくーなが最後尾に並んだ。

二つのカップの入った袋を大事そうに持ち、くーなは動物園から駅までの道を、リュウイチの腕に身を寄せて歩いた。

帰りの車中、くーなは発車するなり眠りだした。カップの入った袋がずり落ちそうになり、リュウイチがくーなの手から袋を取りあげた。くーなはそれにも気付かず、すやすやと気持ち良さそうに、深いまどろみに落ちた。ピアスが少しだけ傾き始めて、車窓から射す陽光を弾いていた。

家に着き、くーなは昼間の興奮の余韻を残したまま、話出した。

「私ね、動物園なんて幼稚園か小学生の頃、遠足で行つたきりなの。父は動物とか植物とか、そういう自然のものが嫌いだったみたい。博物館や美術館には何度も連れて行ってもらつたけれど、動物園や水族館はだめ。博物館にある、昔の大砲とか鉄砲の説明は良くしてくれた。でも私はさっぱり興味がなかつたわ。一応聞いて

いる振りをしていたけど、わざと頭には入つてこないの。  
くーなは遠くを見つめながら、血虐的な笑いを浮かべた。

結局、父は兵器マニアなんだわ、きっと。

そうして話は、あのたつた一度、父の部屋に忍び込んだときの記憶に飛んだ。

部屋に大きなガラス棚があつてね。その中に、銃の模型がいくつも並んでいたわ。それに兵器に関する本や戦争の本もあつた。もちろん 核兵器 の本もね。あの秘密の資料も、父の趣味に関係あるのかなあ。

そこまで言つて、くーなは我に返つたよつて頭を四回横に振つた。

「ああ、嫌なことをまた思い出しちやつた」

くーなは立ち上がつた。

「ねえ、お兄ちゃん。今日は楽しくて、騒ぎすぎたせいかちょっと疲れちゃつた。先にお風呂に入つてもいい？」

「ああ、入つてきなよ」

くーなが浴室に向かつと、リュウイチは向いとかを考え込むよつて、下を向いた。

リュウイチが入浴を終えた頃、すでにくーなは先程のマグカップで、風呂上りのコーヒーを飲み終えていた。リュウイチが出てきたのを見て、すぐにリュウイチの分を運んできた。くーなのカップにはライオンが描かれており、リュウイチのはコアラだった。

「ありがとう」リュウイチは皿をさうにコーヒーを一口すすつた。

「じゃお兄ちゃん、先にベッドに入つているわね」

「随分早いな。分かつたよ。じゃこれを飲んだら、僕も今日は寝る

よ

コーヒーを飲んでいるおよそ十五分間、リュウイチは再び考え込んだ。自分が普段、研究所で見たり、手にしたりしているものが、つい先程のくーなの言葉と頭の中で錯綜し、いくら考えを巡らしても、収束しそうになかった。畢竟リュウイチの考えは、『核兵器』とい

う言葉のイメージからくる関連性に依拠しているに過ぎない。

カップの中の残り少なになつたコーヒーを見て、リュウイチは考えることに疲れ、単なる 核 という言葉の符合に過ぎないと結論付けて、思考を中断させ、残りのコーヒーを飲み干した。

ベッドに入ると、くーなはまだ起きているようだった。枕もとの小さな灯りだけが点いていた。

「もう寝たと思っていたよ。まだ起きてたんだ」

そう言つて、くーなの横に身を横たえた。

刹那。

くーなの細い腕が、リュウイチの手首をつかむや否や、その手首は乳房にいざなわれた。パジャマの前のボタンは、すでに全て外れていた。リュウイチの手は例えようもないほど柔らかなヴィーナスの丘の斜面をなぞり、その頂点に達した。頂点だけはそれまでの柔らかさと対照的に、堅く屹立しひときわ突き出していたが、その自然な堅さとは明らかに異質で、人工的な堅さを同時に感じた。（なんだ、このリングみたいなものは）

声を出す間もなく、ヴィーナスの丘の頂きに手が達すると同時に、リュウイチの唇もくーなの柔らかな唇に塞がれた。口と手の自由を同時に奪われたリュウイチは、ベッドの中で、まるで大海のまつただ中で溺れる者のようにもがいた。

驚きのあまりもがき回つて、くーなの手を振り解いたリュウイチは、ベッドの布団をこきなりめぐり上げた。枕元の小さな灯りが絶妙の陰影を作り、くーなの白い裸身を浮かび上がらせた。

丘の頂上に屹立したものに、さつきまでくーな自身を美しく飾つていたピアスが、突き刺さっていた。

おそらくリュウイチがコーヒーを飲んで、思索にふけつていった間に、急いで開けたものであろう。頂上の桃色がかつたように見える褐色の突起には、血が滲んでいた。その血は、一筋の細く赤い線を描いて、突起からヴィーナスの丘を伝い、丘の中腹で線の輪郭がぼや

けていた。

くーなの目にも、涙が滲んでいた。

「くーなは何も言わず、潤んだ瞳でリュウイチを見つめた。

「くーな。こ、これは一体、どういうことなんだ。なぜ、こんなことを、するんだよ。見ろよ。血が……、血が、出ているじゃないか」興奮のあまりどもりがちな言葉で、リュウイチは激昂した。それとは対照的に、くーなは無表情なほど冷静な顔で言った。

「ボディピアスよ。今どき、みんなやっているわよ。一度やってみ

たかつただけ。お兄ちゃんにだけ、見せてあげようと思ったの」

「とにかく血も出ているし、もういいから外せよ。もしも化膿したりしたら、どうするんだ」

「わかったわよ」

痛むのか、くーなはやや顔を歪めながら、ピアスを外した。鮮血が、新たな線を描いて、一筋流れ落ちた。リュウイチは思わず、顔を背けた。

「お兄ちゃん、私のこと嫌いになつた?」

不安げに、くーながリュウイチの顔を覗きこむ。

「そうじやない。でもそつやつて自分の体を傷つけるようなことはして欲しくない。もう一度と、ボディピアスなんてするなよ。いいな。少なくとも、僕の趣味じやない」

返事の代わりに、くーなは胸をはだけたままの格好で、リュウイチの胸にしがみついた。困り果てたリュウイチの顔に、再びくーなの小さいがぽっちゃりした唇が迫った。リュウイチの胸に押し付けられて、あらわになつたヴィーナスの双丘が、その美しい形を失つた。二度目のキスは三十秒間続いた。くーなの舌は、ちろちろと休むことなく、リュウイチの口の中を這い回つた。燃えさかる炎をまとつた蛇のような舌は、リュウイチの中の何物かを焼き焦がすように、せわしなく動いた。そしてその小さい、桃色の炎は、三十秒かけて、リュウイチの理性を焼き尽くし、心の底に宿る官能を召喚した。

リュウイチの手が柔らかな丘に再び触れると、桃色の小さな蛇は安

心したように巣穴へと戻った。

濡れ光るくーなの唇が、呟いた。

「今日で、妹はおしまい」

じつとリュウイチの目を見据えて唱えた磁きは、なお一層彼の本能を揺さぶり、喚起した。リュウイチは百八十度回転して、己の体をくーの上に横たえた。そうしてくーなの最も柔らかな部分を彩る、半ば乾きかけた紅い血筋を舐め取り、その手はヴィーナスの最も敏感な場所へと伸びた。かすかにくーなが、リュウイチの頭上で呻いた。

くーながリュウイチの妹からオソナになつた翌朝、ベッドのシーツには紅色の染みが三つ残つていた。しかし前夜、くーなは一言も「痛い」とは言わず、ただ黙つて最愛の兄だつた者を受け入れた。

その夜、リュウイチは夢を見た。夢の中で、鮮血と違わぬ深紅のキノコ雲が、大きな爆音とともに、龍のように空に立ち昇つていた。

## 7 眠れる天使

リュウイチが研究所に来て、最初に手掛けたプロジェクトも、この日が最後である。これまでの研究で得たデータを整理し、資料として、ツジイに提出した。

ツジイは黙つて、データに誤りがないか、内容に漏れがないかを見て、言った。

「うん、いいね。『ぐるりとま。最初のプロジェクトでこれだけ書ければ、上々だよ』

「ありがとうございます」

ツジイの承認を得て、リュウイチは不要なデータの削除や資料の整理を始めた。

リュウイチの心中では、昨日のくーなのイメージだけが、傷ついたレコード盤のように幾度も幾度も繰り返し再生されていた。イメージの中のくーなは、紅い血筋だけ色が付いていて、他は色を失いモノクロームであった。次第に心の中が、真紅に染めつくされてしまうのではないかという、漠然とした恐怖の念にとらわれた。

資料整理が一段落して、リュウイチは休憩コーナーに向かった。ユイがいた。

「昨日は大変だったわね。でもくーなちゃん、最後は元気になつたみたいだし、よかつたわ」

「本当に昨日は迷惑をかけてしまつたね。ありがとう。ユイちゃんにもすっかりなついてしまつたね。あいつは誰にでもそうなのかな」くーなの話題になると、モントーンを深紅で塗りつぶしたイメージが彼を席卷した。憂鬱な心が、彼の顔を屈託で満たした。

「ところで資料の整理は、もう終わつたのかい？」

「ええ、大体。今日でプロジェクトも解散ね。またリュウイチ君と一緒にプロジェクトに入れるといいね」

「そうだね。同期入社は君だけだし、ね」

そこで会話が途切れた。二人は沈黙とコーヒーを飲み干した。彼の心中に、再びくーなのイメージが兆した。

あつという間に時間は過ぎて、夕方を迎えた。プロジェクトを解散するにあたり、ツジイが解散の弁を述べた。締めの言葉 というやつだ。メンバーは皆、ツジイの周りに集まってきた。ステレオタイプな挨拶が始まった。

みんな、本当にごくろうさま。今回のプロジェクトは、メンバーにも恵まれて、とても素晴らしい成果を上げられたと思っている。特に新人として入ったリュウイチ君とユイ君、非常によくやつてくれたね。次のプロジェクトでも頑張ってくれよ。

このプロジェクトの成果は、日本国内の原子力発電所に公開され、より効率的な発電システムの開発に利用される予定である、という主旨の話で、ツジイによる 締めの言葉 は終わった。

最後にプロジェクトメンバーの、次の配属先がツジイから発表された。リュウイチとユイは同じプロジェクトだった。一人とも、再びツジイの率いるプロジェクトへの参画を命じられた。

午後六時。プロジェクトは解散し、次のプロジェクトのリーダーに挨拶に行く者もあれば、帰り支度を始める者もいた。帰ろうとしていたリュウイチに、後ろからツジイが呼びかけた。隣にユイもいた。「どうだい、リュウイチ。次も同じプロジェクトで仕事をすることになったことだし、ユイ君と三人で打ち上げでも。次のプロジェクトのキックオフも兼ねてな」

そう言って、ツジイは右手を、コップをつかむ形に丸めて、飲む真似をした。

「はい」くーなのが気にかかつたが、リュウイチは承諾した。このようなとき、リュウイチは意に反して断れないことが多かった。我ながら、優柔不斷だと思うことがしばしばあった。きっとユイならば、己の意に副わなければ即座に拒絕するのだろう。

「じゃ、帰る準備ができたら声をかけてくれ。一緒に出よう」  
ツジイはそう言い残し、自席に戻った。ユイが耳元で囁いた。

くーなちゃん、大丈夫？

仕方ないよ。遅くなるから、食事は先に済ませてくれとメールを入れておくよ。そうすれば大丈夫だろう。

そう。何ならまた、リュウイチ君のところへ言い訳しにお邪魔するわよ。

ユイは笑いながらソファに座って、「また後で」と手を振りながら、席に戻つて行つた。

二十分後、リュウイチ、ユイ、ツジイの三人は、研究所の一階のホールにいた。

「じゃ行こうか」

「あっ」ユイがいつになく取り乱したように、声を上げた。

「一つデータを消し忘れていました。ツジイさん、申し訳ありませんが、先に行つていいただけますか。十五分くらいで終わると思いますので、終わり次第追いかけます」

「ほう、ユイ君らしくないな。じゃ先にリュウイチと行つているよ。駅前の『鳥玄<sup>とりげん</sup>』にいる」

「わかりました、すみません」一つ頭を下げて、ユイはホールの奥へと消えていった。

ユイが去り、かすかな違和感だけが残つた。何か変だ、とリュウイチは感じた。

データを消すなら、一階のプロジェクトルームに行かねばならないはずだ。ホールの奥には実験器具や材料の倉庫になつてゐる部屋と所長室 しかないはずだが。

「おい、リュウイチ。どうした、行くぞ」

ツジイの呼びかけに我に返り、リュウイチは連れ立つて研究所を出了た。

鳥玄 は地鶏のハツを塩だけで焼いた焼き鳥が旨い店だった。研究所に入つてしばらく経つた頃、リュウイチは同期の友好を深めるという名目で、ユイと来たことがあつた。ユイも、こここのハツはお気に入りだと言つていた。この店の焼き鳥が、とつつきにくい印象のユイとの距離感を縮めてくれた。

くーなることを話したのも、この店に来たときだ。

二人はユイを待たず、プロジェクトが無事終わったことに乾杯をした。大役を終えた安堵感からか、ツジイはよく飲み、饒舌だった。一方、リュウイチの顔に書かれた屈託は、未だ拭い去られてはいけなかつた。

結局ユイが到着するまで、ツジイが一方的に話し、リュウイチは曖昧な領きを繰り返すばかりだつた。

まつたくな。お前たち新人二人とも面倒を見なくてはいけないと決まつた時は、どうなることかと思つたよ。

はあ。

それに僕たちの研究で扱う重金属は、一つ間違えば被曝する。直接、生命に危険が及ぶ場合だつてある。そんなところに新人二人を放り込まれたんだからな。被曝は免れただけど、胃に穴が開きそうだつたよ。

そういうとやら赤ら顔になつたツジイは、がははと大声で、リュウイチの知る限り最も閑達に笑つた。リュウイチはすまなそうに、頭を搔くしかなかつた。

しかも、ほら、あれだ。大和田局長の視察の案内役まで任されたからな。あれも突然、荒木所長に頼まれて、びっくり仰天だ。防衛庁の局長で所長の親友じや、粗末には扱えないし……な。

そこで空になつたジョッキを振つて、ツジイは店の女将に「お代わり」と大声で言つた。そしてリュウイチのまだ半分ほど残つているジョッキを見て、「何だ、飲んでいないな」ととろんとした目を向けた。ツジイは独白するような調子で、もはやリュウイチの相槌も

気に留めずに、続けた。

大和田局長が来られたとき、所長と何やら話し込んでたろう。何を話していたと思う？ 「核兵器」だってよ。所長のデスクの上の仰々しい資料が、コーヒーを持って行ったとき、チラッと見えたんだ。うちの研究所じゃ、兵器開発なんてテーマはないけどな。きっと、大和田局長が持ってきた資料だろう。一人とも妙に真剣な顔で、議論していたな。もちろん僕がいる間は、何も話さなかつたけどな。余程真剣だったと見えて、一人の声が廊下まで聞こえたよ。そこへちょうど女将が、新たなジョッキを持ってきた。一口ツジイが飲んだところへ、遅れてきたコイが現れた。

「遅れて申し訳ありません。あら、ツジイさん、もう結構ご機嫌ですね」

ユイは一人が陣取っていた奥座敷に上がり込むと、リュウイチの横に座った。リュウイチが座敷を降りかけた女将に、コイのためにジョッキを一杯追加した。

「妹さん、大丈夫だつた？」とコイがリュウイチにそつと尋ねた。リュウイチは、「ああ」とだけ答えた。それを眠そうな顔をしていたと思ったツジイは、聞き逃さなかつた。

「なんだ、リュウイチ。お前、妹がいたのか？」

仕方なくリュウイチは答えた。

「ええ、最近、一緒に住み始めたんです」

「一度だけ会つたことがあるんですけどね。とても可愛い妹さんなんですよ」コイが追いかけるように、付け加えた。

「ほう、それは一度お会いしたいものだな」ツジイは冗談めいた調子で、笑つた。

二時間ほど店について、もう一軒、と帰宅を済るツジイを何とかなだめ帰し、リュウイチとユイは同じ電車に乗つた。

「ツジイさん、随分飲んでいたけれど、大丈夫かしらね」

「めずらしく盛り上がつていたね。まあ大きな仕事を終えたんだか

ら、今日くらいハメを外してもいいと思っていたんじゃないかな」話題は自然とユイが店に到着するまでに、ツジイが話していた内容に移った。

新人二人は、ツジイにとつて厄介者と思われていたこと。大変なプロジェクトの上に、大和田局長の視察の案内役まで任され、大変だつたこと。所長の部屋に入つたとき、所長と大和田局長が 核兵器に拘泥して、何かを議論していたこと。

最後の核兵器の話題に触れたとき、ユイの顔がかすかに曇つた……。ようを見えた。ユイが話題を変えた。何かしら、慌てたような素振りに見えた。

「くーなちゃんにお土産の一つも買って帰つた方がいいわよ。きっと愛するお兄様が遅いって、心配しているから」

「そんなことはないと思うけど」

「一人を見ていると、兄弟っていうより恋人同士に見えるもの」

ユイの言葉にリュウイチは狼狽した。酩酊がしばし忘れさせた昨夜の記憶が、再び鮮明な映像として蘇生した。それからはずつと無言のまま、調布駅に着いた。

リュウイチはユイに、「それじゃ」と手を挙げて、電車のドアまで進んだ。ユイはさらに三つほど先の駅に住んでいる。ドアが開いたとき、リュウイチはもう一度、ユイに小さく手を振つた。

改札を抜けると見知った顔が立つっていた。ユイの姉である。駅の時計は午後十時を示していた。時刻と目の前にいる人の不釣合いで、リュウイチはやや怪訝そうな顔をした。

まさに改札を出たリュウイチの前に突然出現したというタイミングだつた。ユイの姉は、リュウイチを見ると、黙つて頭を下げた。くーなを一人で待たせていることが気に掛かり、先を急ぎたかった。しかし目の前に立つている彼女の前を素通りすることもできなかつた。今は、己の優柔不斷な気質が鬱陶しく思った。

「こんばんは」仕方なく、リュウイチは挨拶を返した。

「どうされたんですか？ こんな時間に」

「主人に頼まれて、夕食後に買い物に出たんです。でも探していたら、いつの間にか遅くなってしまって。こんな時間に開いている書店って、なかなかないですね」

「そうですね、特にこの辺りじゃなかなか……」

「それで駅前の書店から出たら、リュウイチさんが出てくるのが見えたものですから。こんな時間に失礼だとは思つたんですけど、ご挨拶せずに素通りするのもどうかと思いまして」

「そうでしたか、わざわざすみません」

「もしよろしければ、私の車で家までお送りしますよ。ついでと言つてはなんですけど、せっかくお知り合いになれたことだし、少しだけお茶でもいかが？」

内心リュウイチは困窮した。田の前でコイの姉は、コイそつくりの聰明な微笑をたたえていたが、その目は強い意志を持つてリュウイチの否定を拒絶していた。（血は争えないな）とリュウイチは苦笑した。改札を出たときに、田を合わせたことにほぞを歯む思いだつた。

結局、リュウイチは彼女の申し出を受け入れるしかなかつた。

「ええ、少しだけなら」

「では参りましょ。そこに車を停めておりますので」

思い立つたら素早く行動起こすところまで、コイにそつくりだと思った。

コイの姉は、駅のロータリーに停まっている、ブルーメタリックのプロジェクトを指差した。

ゆつたりとしたシートに乗り込むと、彼女は、リュウイチのマンションの方角に車を走らせた。マンションまでの道程の途中にある、深夜まで開いているファミリーレストランのパーキングに車を入れた。時間のせいでもある。店内は若い客がいくつかのシートを占めているだけで、閑散としていた。

店員の案内で、窓際のボックスシートに座った。向き合つたコイの

姉は、明るいところで改めて見ると、間違いなくコイと姉妹であることを感じさせた。コイよりも、ややふっくらとした顔立ちをしていた。近寄りがたいほどに理知的で、ときに冷たささえ感じさせる

コイと比べると、幾分優しい印象を『えた。

「本当にこんな時間にごめんなさい。先日お会いしたときには、ろくな自己紹介もしていなかつたものですから。私、コイの姉のアキと申します。深大寺に住んでおります。リュウイチさんのお住まいとは、ちょうど駅を挟んで逆方向になるかしら」

コイの姉、アキは席に着くなり、手早く自己紹介をした。濶<sup>あ</sup>みないはきはきとした口調も、コイとそつくりである。

「先日は、妹のことで大変ご迷惑をおかけしました。僕はリュウイチです。コイさんには研究所でいつもお世話になつていまして……」

「お名前はコイから聞いておりますのよ。いつも電話でね。何でも研究所では、コイと同期の方だとか。優秀な研究員だと伺っておりますわ」

「とんでもない。コイさんにいつも助けていただいています」

コーヒーを一杯飲む間、そんな取りとめのない社交辞令が続いた。十五分ほどで一人はファミリーレストランを後にした。この十五分間に得たものは、コイの姉が アキ という名前だということだけである。

車内のデジタル時計が午後十時三十三分を表示したとき、アキのプロジェクトは、リュウイチのマンションの前に到着した。アキとは車で別れた。

「今日はわざわざ送つていただきて、ありがとうございます。お気をつけて」

「夜遅くにお引止めして、『めんなさい』。妹さんにもよひこくおつしゃつてくださいね。では、おやすみなさい」  
ドアを閉めると、プロジェクトは静かに夜の闇に溶けた。テールランプの赤が、最後まで夏の空気に溶け残っていた。

テールランプを見送ると、リュウイチはマンションの三階に昇った。二階から三階への階段の途中、リュウイチの目の高さが、三階の廊下と一致したとき、廊下にわだかまる塊が見えた。

塊と見えていたものは、人のようだった。

さらに近づくと、倒れていたのは 天使 だった。リュウイチの最愛の 天使 。

その瞬間、リュウイチはツジイらと居酒屋に立ち寄ったこと、アキと短い世間話をしていたことを後悔した。研究所に行つたことさえも悔いた。己の優柔不断さが恨めしかった。

今更ながらに、彼にとって、その 天使 は何物にも代えがたい宝であることが、はつきりと認識された。

（僕の天使が……）

くーなは目の前の廊下に、やや青白い顔で、うずくまるように、倒れていた。

リュウイチの部屋の、ちょうどビードアの前で静かに眠っているようだつた。

リュウイチは駆け寄り、くーなをそっと抱きかかえた。見る限り、外傷はないように見えたが、くーなは彼の胸で眠つたままであった。リュウイチは鍵を取り出し、ドアの鍵穴に差し込んだ。鍵を回したが、不思議に手ごたえがなかつた。

（鍵が……開けられている！）

もう一度くーなを廊下に横たえると、意を決してドアを開けた。部屋の灯りは点いたままだつた。

足音をたてないように、そろそろと進んだ。気配はない。見渡しても、誰もいない部屋を空しく照明が照らすばかりであった。

リュウイチはばね人形のように、廊下にとつて返した。くーなを抱きかかえ、ソファに寝かせた。眠り続けるくーなを見て、泣きたい気持ちになつた。

まだ息はあつた。ヴィーナスの双丘も、呼吸に合わせて上下運動を繰り返していた。

唇を重ねた。柔らかく、暖かい唇は生きていて、温かい。しかしそのキスは、眠れる王女を目覚めさせることはできなかつた。

携帯電話で、一一九番をダイヤルした。

数分後、眠つたままのくーなは、赤く瞬く車にリュウイチとともに乗つていた。

くーなを乗せた救急車は、夜の闇にまぶしく赤いサイレンを瞬かせ、マンションの前を発車した。静かな夜に突如鳴り出した音に、何事かと、近所の人々が家から出てきた。明らかに物見の野次馬もいれば、本当に心配そうな表情で救急車を見つめる者もあつた。

サイレンを鳴り響かせながら走る車中で、リュウイチはくーなを心配そうに見つめた。

くーなの身に降りかかった災厄は、図らずも、リュウイチに変化を生じさせた。眠るように、目を閉じて動かないくーなを見つめるしかない車中で、リュウイチは己の意志の弱さを、優柔不斷な心を激しく呪つた。そしてそれは、一つの衝動を生み出した。いや、その衝動は、リュウイチの目の前で無防備に横たわるくーなへの思いが原動力だつたのかもしれない。

(くーな、お前をこんな目にあわせた奴は一体誰なんだ。きっと僕がかたきは討つてやろう。だから頼む、目を開けてくれ。もう一度笑つてくれ。そうしてお前に危害を加えた者を、僕に教えてくれ。) そう考えたリュウイチの表情からは、持前の優柔不斷さは完全に消えていた。

リュウイチはただただくーなの蘇生を祈り、未だ見えない 敵 の報復を誓つた。

しかし敵とは一体誰なのか、何なのか、それがわからない歯がゆさに、リュウイチは身悶えしたくなるような思いだつた。 敵 とそ の企みの大きさに、このときはまだ氣付く由もなかつた。

くーなはマンションから一番近かつたC病院に搬送された。救急車が病院に到着して、ベッドに載せられ院内に運ばれると、すぐに医師や看護師が詰めているガラス張りの部屋に入れられた。部屋の入り口に置かれた細長いベンチで、リュウイチはガラス越しにくーな

の様子を見守った。

深夜だからであろう。当直の医師が一人で救急診療にあたっていた。数名の看護師たちは、忙しそうに部屋中を飛び回っていた。

くーなを診てている医師は、まぶたを開けてライトを当てたり、聴診器で心音を聴いたりしていた。その様子を、リュウイチはガラス越しにじつと見た。

くーなを診察していた医師が部屋の入り口のところで、リュウイチの方を見た。リュウイチの心臓は、にわかに早鐘を打つた。

「大和田匡子さんのお知り合いの方ですか？」医師は入り口から半身だけ部屋の外に出して、リュウイチに尋ねた。

「ええ、そうです」

リュウイチが頷くと、医師は「じゃ、中にお入り下さい」と言つた。リュウイチは医師の後ろに従い、くーなが寝かされているベッドの横に立つた。医師が診察結果を説明し始めた。

どうやら、何らかの麻酔作用のある薬物により、一時的な昏睡状態に陥っています。ただ診る限り、呼吸は正常ですし、心拍、血圧にも特に異常は見られません。錠剤や液体のようなものを嚥下したということも考えられます……、状況から見て麻酔作用のある気体を吸引した可能性が高いと思われます。具体的な麻酔剤の種類は、血液検査などの結果を見なければ特定できませんが。

それで、くーなの……あ、いや匡子の意識は？

リュウイチはそのことが一番聞きたかった。医師が長々と所見を語るのを聞いていて、少々苛立ちを覚えた。

医師は、慎重に言葉を選ぶように説明を続けた。

生命には別状ありません。薬物の種類にもよりますが、麻酔剤による昏睡状態であることには間違いないでしょう。麻酔剤ならば、麻酔作用がなくなれば覚醒します。ただ麻酔剤をどれくらい吸入したのか、現段階では分かりかねます。また麻酔作用の効力も、個人差があるので、どれくらい経過したら覚醒するのかは、今の段階でははつきりと申し上げられません。

では、いざれにせよ時間が経てば、彼女は目を覚ますつてことですね？

ええ。まれに麻酔作用が永続する例もありますが、呼吸や心拍の状態から考へても、そういう状況に陥るリスクはまずないでしょうね。あくまで推測ですが、おそらく一日以内には、意識を回復されるのではないかでしょうか。

一応命には別状がないことを知り、リュウイチは胸を撫<sup>な</sup>で下ろした。医師は続けた。

麻酔というものは、一般に麻酔ガスを吸引するか、あるいは注射によって麻酔作用のある液体を体内に入ります。しかし患者さんの腕には、少なくとも注射の痕跡は認められませんでした。そもそも注射は、一般の方にはかなり難しいです。気体なら……、例えが不謹慎ですが、よくテレビなんかでハンカチに沁みこませた液体を嗅がせて眠らせるシーンがありますよね。あの程度の方法でも、眠らせるることはできます。そう考へると、やはり麻酔作用のある気体を吸引した可能性が高いでしょう。

医師の説明はいささか饒舌すぎて、リュウイチは、最後の部分を半分くらいしか聞いていなかつた。くーなの命が助かると医師が言ったこと、今はそれだけが大切だつた。

看護師が用意してくれた椅子に腰掛け、ベッドの上のくーなをしばらく眺めていた。リュウイチの手は、くーなの手と繋<sup>つな</sup>がつっていた。祈るような表情で、固くしつかりと、くーなの小さな掌を握りしめていた。

やがて女性の看護師がリュウイチの許にやってきて、今晩はもう帰宅するようにと告げた。これ以上付き添つても、今晩中に意識が回復するとは考えにくいし、何かあればすぐに電話連絡をする、と看護師は言つた。

「これから一般の病室に移送します。一〇五号室になります。明日は午前十時半から面会できますので、それ以降の時間にお越し下さい

さいね。一階のナースステーションにお声掛けしていただければ、部屋にいこ案内しますので。

事務的にそう言つと、看護師はもう一人呼んできて、移送用のベッドにくーなを移した。リュウイチは何か言おうとしたが、看護師は自分の任務を遂行するのみで、取り付く島もない。

仕方なく、リュウイチは部屋を出た。薄暗い廊下には、誰もいなかつた。まとわりつゝように響く自分の足音を聞きながら、リュウイチは出口に向かった。

外に出ると、まばらに植えられた木々の隙間から洩れ出る薄暗い街灯の明かりが、わずかに足下を照らすのみで、遠くを見ても、そこは墨を流したような闇であった。流しのタクシーも走っておらず、リュウイチは家まで、歩いて帰った。ダークグレーのスーツを纏つたまま家を飛び出した彼の後ろ姿は、漆黒の闇に同化した。わずか一ヶ月と少しの期間、一つ屋根の下で暮らしただけなのに、くーなのいない部屋に戻るのだと思うだけで、リュウイチは堪らないほどの寂寥<sup>せきりょう</sup>の思いにとらわれた。

帰り道、リュウイチはこの一ヶ月あまりのくーとの生活を反芻した。今はくーなが、何故あのような事故に遭遇しなければならなかつたのかを突き止めなければならなかつたからである。

まさかくーなが自ら意識を失うようなことはすまい。きっとくーなをあのような状況に陥れたものが、他にいる。

くーの意識が回復すれば、はつきりしたであろうが、リュウイチは、くーなが自らやつたのではないことには確信があった。それはこの一ヶ月あまりで、くーとの間に形成された信頼であり、寄る辺なきくーなの愛の力であつたろう。今のリュウイチには、くーなと共有した時間は、そしてその時間が育んだ愛は、それほどに濃密だつた。

(にもかかわらず……僕は……)

再び悔恨が彼を支配していた。リュウイチの目に潤むものがあつた。それはわずかな夜の光の中で、くーなの耳によく似合つたピアスの

ようにてピュアな輝きを放つた。

くーなどの思い出もまた、リュウイチにとつては同じ輝きを伴つていた。

突然の研究所の前での出会い。そのままリュウイチの家の居候となつた不思議に人懐つこい女。誕生日にくーなが作つてくれた手料理。ユイとの駅前での出会いとその後のくーなの搜索。妹からの卒業。ペアのマグカップ。

どのシーンを思い浮かべても、くーなが彼つた事件に結びつくようには思えなかつた。リュウイチは家にたどり着くまでの間、何度も繰り返し、頭の中でこれらのシーンを再生した。

しかし原因にたどり着けぬまま、彼はマンションのある最後の曲がり角に着いた。

最後の角を曲がると田の前に赤い光が見えた。車のテールランプに見えた。そのときリュウイチは既視感<sup>デジャヴ</sup>に襲われた。

くーなが倒れているのを発見する直前、マンションの前でユイの姉、アキの車を見送つた光景が甦つた。田の前を遠ざかつてゆく車のランプは、あのときのように、同じ形のまま闇の中に滲んでいった。（まさかな。もう数時間も前の出来事だ。きっと僕は、疲れている。）

それでもどこか釈然としないまま、リュウイチはそのテールランプが完全に闇に消え去るまで、マンションの前で見送つていた。

翌朝、ツジイに電話をして休暇を取つた。ちょうどプロジェクトが終わつたところでもあり、快く承諾してくれた。

それからは時計が十時半に近づくのが待ち遠しかつた。秒針の一周期はかくも遅いものかと感じながら、十時まで時計とにらめっこをして過ごした。

時計が十時になつたとき、リュウイチは堪らず部屋を飛び出した。途中小走りで病院に向かつたため、十時十五分過ぎには、病院に着いた。病院の入り口の脇にある駐車場から、印象的なブルーメタリ

ツクが田に飛び込んできた。

アキのプロジェクトが停まっていた。そしてアキ自身が車に向かっているところだった。リュウイチの動悸は、毎分六十回から八十五回に上がった。

はやる気持ちを押さえつけながら、リュウイチはアキに駆け寄った。  
おはようございます。良くお会いしますね。

昨日のアキとは別人のように、今朝の彼女は愛想が悪かった。

昨夜はどうも。風邪をひいてしまったみたいで、少し熱っぽかつたので朝一番で来ました。遅くなると混みますでしょ。  
それだけ言うと会釈をして、アキは運転席に体をすべり込ませた。  
ほどなく快いエンジンの音がして、アキは再び会釈をすると車を走らせた。リュウイチは果然とテールランプを見送っていた。

ナースステーションは一階への階段のすぐ田の前にあった。時計は、あと一分で十時半であることを示していた。

カウンターの一番近くにいた女性看護師に、声を掛けた。

「あのう。一〇五号室に入院している大和田匡子の知り合いの者ですが」

「一〇五号室、大和田さんですね。はい、じ案内します。こちらへ」  
台帳を見ながら、看護師は患者の名前を確認すると、ナースステーションから出てきて、廊下を奥に進んだ。

くーの病室は、廊下の両脇に並んだ病室の、向かって左側の廊下の中ほどにあった。病室に掛けられた名札を見ると、一〇五号室には 大和田匡子様 の名前だけが、黒いサインペンで書かれていた。  
病室には二つベッドが置かれており、くーなは奥の窓際のベッドに寝かされていた。

「今朝確認したところ、少し意識も回復されてきているようです。

まだ寝ている状態に近いですが、おそらく今日の夕方辺りには、だいぶ回復されると思いますよ」

そう言いながら看護師はリュウイチをくーなが寝ているベッドに案

内した。

白いシーツに包まれたくーなを見た。昨夜よりいくらか血色も良くなり、時折まぶたをヒクヒクと動かした。だがリュウイチが耳元で「くーな」と呼びかけても、まだ目を開けることはなかつた。

横で看護師が言つた。

「そういうえば少し前に、一人お見舞いに来られた方がいましたよ。まだ面会時間ではないのでと一度はお断りしたんですが、『用事がある。一皿見るだけでいいから』とおっしゃったので、病室に通しました」

「えつ、それは誰ですか……」

「私どものところでは、面会の方のお名前は伺わないことにしています。だからお名前の方は分かりませんけど、女性の方でした」

（女性？）やつき病院の庭ですれ違いになつたアキのことが、思い出された。

「どんな女性の方でしたか」

「そうね。割と背の高い方でしたよ」

「面会に来たのは何時ごろ？」

まるで刑事さんの尋問のようですね、と笑いながらも看護師は説明を始めた。

「十五分くらい前かしら。ちらつと園子さんの顔を見て、すぐに出て行かれました。『声を掛けてあげて下せ』と申し上げたのですけど、何もおっしゃいませんでしたね」

「そうですか」

アキと出会つた時間と、辻褄はあつてゐると思つた。だがアキは風邪で来院したと言つていた。それにくーなが倒れて入院したことは、アキには話していない。いや、アキに限りず誰にも話していないはずだ。

「では、じゅつくづ。何かありましたら、その枕元のナースコールのボタンを押してください」

リュウイチが黙り込んだのを見て、看護師は病室から出て行つた。

リュウイチはくーなの顔を見ながら、考え込んだ。いつしか、まだ濃い闇の中を浮遊しているようなくーなに話しかけていた。

「おい、くーな。お前のお見舞いに来た女って、一体誰なんだ」返事はなかつた。くーなは相変わらず、ときどきまぶたを動かすのみで、まだ深い睡眠状態にあつた。

リュウイチはそれからおよそ一時間、くーなの手を握つたまま、ときどき名前を呼び、飽くことなく彼女の顔を見て過ごした。傍目に見は、リュウイチまで眠つてしまつたかに見えるくらい、微動だにしなかつた。

やがてリュウイチは、そつとくーなの手を離した。まだ何も答えてはくれないくーなに、また後で来るよと囁いて、立ち上がつた。ナースステーションの前で、病室を案内してくれた看護師に会釈をすると、リュウイチは病院を後にした。外は真昼の太陽がぎらぎらと照りつけて、殺人的な熱光線を放射していた。

一度家に戻つたものの、何かしら落ち着かない気分のまま。リュウイチは昼食に出た。家で食べてもよかつたが、くーなのいらない殺風景な部屋での食事が嫌だつた。つい一か月前まではそれが日常だつたが、今はたつた二部屋のマンションが、やけに広く感じられた。マンションから駅へ向かう途中にある、小じんまりとしたコーヒー・ショッフルで、軽い食事をとつた。

よく冷えた、香りの良いアイスコーヒーを飲んでいると、携帯電話がテーブルの上で震えた。小さな液晶画面に『コイ』と表示されていた。

もしもし、コイちゃん。

リュウイチ君、大丈夫？ 風邪でもひいたの。

いや、実は僕じゃなくて、くーなんんだ。ちょっとした事故があつて、入院しちゃつてるんだよ。大したことはないと思うけど、一日くらいは入院になると思う。それで休暇をもらつたんだ。

まあ、大変ね。くーなちゃんの具合はどうなの？

うん、一時的な昏睡と病院の先生は言っていた。たぶん今日の夕方くらいには、意識は戻るだろうって。

てっきりリュウイチ君が病気か何かだと思つたわ。それで、今は病院なの？

いや食事に出たところだよ。

そう。私もお昼休みだったので、気になつて電話してみたのよ。くーなちゃんは、どこの病院に入院しているの？

調布のC病院だよ。

わかつたわ。それじゃ帰りにお見舞いに寄らせてもらひうわね。また夕方、電話するわ。あまり気を落としちゃダメよ。

うん、それじゃまた夕方に。

電話が切れた。ユイの心遣いが嬉しかった。気弱になつていたリュウイチは、少し勇氣をもつた気がして、半分ほど氷が溶けて香りが薄くなつたコーヒーを飲み干した。

昼食を終えて、再び病院に行つたリュウイチは嬉しい驚愕を覚えた。くーなが病室で目を開けていたのである。

まだ麻酔効果から醒めやらぬ様子で、視点も定まつてはいなかつたが、リュウイチが見舞いに来たことははつきりと認識していた。まだくーなは何も話さないけれども、ベッドの脇に立つたリュウイチを見て、安心したような笑顔を見せた。

リュウイチが病室に入ると間もなく、担当医が来た。巡回の時間とということだった。

担当医はあのガラスに囲まれた部屋で、くーなを診察していた医師であった。リュウイチを見て、くーなの容体について説明を始めた。

やはり匡子さんは、麻酔ガスの作用による昏睡状態でした。今はもうほとんど麻酔作用が抜けていますから、あと数時間もすればほぼ元の状態まで回復するでしょう。今はまだ少し、通常時と較べると意識のレベルも低いので、話が十分にできる状態ではありません

ん。

そうですか。でも意識が戻ってくれたので、安心しました。

このまま順調に回復すれば、明日には退院できますよ。

振り返るとくーなはじつとリュウイチを見ていた。うまく話をできないことがもどかしげだった。

ところで先生。その麻酔ガスというのは？

化学的にはジエチルエーテルと呼ばれているものです。一般には、単にエーテルと呼ぶことが多いですね。常温では液体ですが、氣化しやすく、一時は病院でも麻酔に使っていたものです。ただ使用する量の調整が難しく、一つ間違うと死に至ることもあります。だから今では、麻酔薬としてはほとんど使われません。

ジエチルエーテル？ 普通の人人が簡単に入手できるものではないですよね。

ええ。麻酔科の同僚に、エタノールと硫酸から生成できると聞いたことがあります。だから化学に詳しい人なら、生成できないこともないかもしれません。

リュウイチは黙つて、考え込んだ。それを見て、医者は病室から出て行った。リュウイチはしばらく、石膏の彫像にでもなつたかのようにそこに立ち尽くしていた。医師の語ったエーテルの製法が気になつた。

エタノールにしろ、硫酸にしろ、試薬として研究所に常備されているものだ。ということは、研究所の人間なら、知識があれば作れるのではないか。

そのときリュウイチの大腿部に何ものが触れた。はつとして、リュウイチは自分の太ももの裏側を見るように、振り返った。見ればくーながベッドから白い腕を伸ばして、まだ緩慢な動作ではあつたが、懸命にリュウイチを呼ぼうとしているのだった。くーなは言葉こそ発しないものの、今にも何かを語りかけそうに、口が動いていた。

リュウイチはベッドの横に置かれていた、面会客のための椅子に腰

かけると、くーなの腕をそつと持ち上げて、その手を握った。

「くーな、分かるか。僕だよ、リュウイチだ。お医者さんも言つていたけど、すぐ良くなるつて。明日には一緒に家に帰れるぞ。もう少しだから、頑張るんだよ」

ゆつくりと、言い含めるようにくーなに言つた。くーなはリュウイチの一言ごとに、かすかに頷いていた。

くーなの目からは、あのピアスに嵌め込まれたストーンのように輝きを放つ涙がにじみ出していた。やがてその涙は、あふれんばかりにとめどなく、流れ出た。リュウイチが握つていたくーなの手に、すこし力が込められた気がした。

リュウイチは空いている方の手でポケットからハンカチを取り出すと、そつとくーなの涙を拭つた。

再びくーなが眠り込んだのを見て、リュウイチはトイレに行くために病室を出た。ついでに、飲み物を買いに、一階の売店に向かつた。ナースステーションの前を通りかかったとき、今朝リュウイチを病室に案内してくれた女性看護師が、話しかけてきた。

「匡子さん、順調に回復されているようで、良かつたですね」

看護師は我がことのように、嬉しそうに笑いかけた。リュウイチは頭を下げた。

「ありがとうございます」

「ところで朝もいらっしゃった方が、お昼頃またお見舞いに来ていたようですよ。ちょうど帰る時に、ここの前を通るのを見ましたから。匡子さんも一日中、誰かしらお見舞いに来てくれるんだから、幸せですね。入院しているときは、お見舞いに来てくださる方がかけてくれる言葉が、患者さんにとって、何よりの元気づけになりますからね」

リュウイチは絶句した。黙つてしまつたリュウイチを見て、看護師は怪訝そうな顔をした。しかしリュウイチは構わず、駆け降りるよう一階に向かつた。

見えない誰かにリュウイチとくーなの行動を盗み見られているような気がして、うそ寒い気持ちになつた。

今や誰かがリュウイチ、あるいはくーなに何らかの意図を持つて近づき、危害を加えようとしているといふことに、リュウイチは確信を持った。

(くーなの傍を離れてはいけない。) リュウイチは階段を一段飛ばしで駆け上ると、病室まで走った。ナースステーションの前を、疾風の如く駆け抜けたリュウイチを、先ほどの看護師が驚き顔で見送つた。

息を切らしながら、リュウイチが病室に入った。くーなの天使のような姿が、病室を出る前とまったく同じく、ベッドの上にあつた。ほつとした。

考えすぎかな、とリュウイチはあまりにも悪い方向にばかり考えたことを少しだけ恥ずかしく思つた。しかし偶然が、しかも同じ日の朝と昼という極めて短い時間の中で、一度も起きるだろうか。頭の中にわだかまつた猜疑心は、やはり払拭できなかつた。

面会時間もあと一時間という頃、花と花瓶を手にしたユイが来た。  
「連絡したけど、出なかつたのね。何度か携帯に連絡したんだけど。くーなちゃんの本名が分からなくて、病室を探すのに手間取つたわ」ユイは少し恨みがましい口調でそう言つた。リュウイチは座つていた椅子をユイに勧めながら、電話に出られなかつたことの言い訳と謝罪をした。

「ごめん。院内では携帯電話の電源は切るルールになつてゐるから、午後はずつと電源を切りっぱなしになつたんだ。君からの連絡があることを忘れた訳じやないんだけど。何時頃来るのかもわからなかつたから、病室からも離れられなくてね。本当にごめん」

「まあいいわ。病室の名札を見たけれど、くーなちゃんの名前、大和田匡子 っていうのね。せめてそれだけでも、お昼に電話したときに聞いておけばよかつた」

そう言つと、ユイはくーなの顔を見て、言葉をかけた。

「くーなちゃん、何があつたか分からなければ、大変だつたわね。もう大丈夫なの？」

くーなはうなずいた。そしてかすかに「うん」と言葉を発した。ユイは微笑んで頷き返していたが、リュウイチは久しぶりに聞くく一なの肉声に驚いた。

ユイは花瓶をして病室を出た。水を満たした花瓶を、少し重そうに抱えながら戻つてくると、枕元の台の上に置いた。そしてその中に、色とりどりの花を挿した。

それまで何もなく、殺風景なほどに純白だった病室が、一度に華やかになつた。

「急いでいたから、安物の花瓶を駅の近くで買つてきたの。花を買つついでにね。こんなので、ごめんなさいね」

ユイはリュウイチにとも、くーなにともれるように言った。

それから面会時間が終わるまで、三人は病室で過ごした。少しづつではあるし、まだ幾分呂律ルツツもあやしかつたが、くーなも話に加わつていた。

午後八時を五分ほど回り、リュウイチとユイは病室を後にした。

「また明日、来るからな。ゆっくりと休むんだぞ」

リュウイチとユイは、くーなに手を振つた。くーなは少し心細そうな顔をしたが、小さな声で「うん」と言つた。

二人は病室を出た。一階への階段を降りながら、リュウイチはユイにお願いをした。

「ユイちゃん、お願いがあるんだけど

「何かしら？」

「予定では、明日くーなが退院することになっている。だからいつもを迎えてやりたいと思っているんだ。それでツジイさんに、もう一日休むと伝えて欲しいんだけど、いいかな」

「何かといえば、そんなこと。お安い御用ね。わかつたわ、伝えておくわよ。今はくーなちゃんの頼る人も、リュウイチ君しかいない

しね

病院を出て、二人は薄暗い道を駅に向かった。駅の近くでユイと別れて、リュウイチは自分のマンションに向かった。  
そこで携帯電話の電源を切りっぱなしだつたことを思い出した。ちょうどそこは、この前、アキがプジョーを停めていた場所であり、その前にはアキが夫に頼まれて、何かの本を買いに来たと思われる書店があった。

何気なく後ろを振り向いた。しかしそこからは、今まさに改札口に吸い込まれそうになつていて、ユイの姿は見えなかつた。  
リュウイチは花のお礼を言い忘れたと思い、ユイの携帯電話に短いメールを送つた。

今日はくーなに花をありがとう。

すぐによいから返信があつた。

付添いおつかれさま。安物だから、気にしないで。おやすみなさい。

駅から近くの中華料理屋に入り、リュウイチは遅めの夕食をとつた。リュウイチが店に入り、扉を閉めた五秒後、店の前をブルーメタリックの車が通り過ぎた。

## 9 くーなの告解

翌朝、無事に退院したくーなを連れたりュウイチは、一日ぶりに明るさを取り戻した我が家に帰ってきた。くーなも今は一日前の元気を取り戻している。

「ああ、久し振り。やつぱりこの部屋が一番だね」

リュウイチはそう言って大きく伸びをしたくーなを、微笑ましく見ていた。日々の暮らしの中で、空気や光を必要とするのと同じように、リュウイチにとつてはくーなが絶対不可欠であることをひしひしと感じた。

「とりあえずコーヒーでも飲むかい」と言つて、リュウイチはキッチンに向かおうとした。

「いろいろと助けてもらつたし、私が入れてあげる」

リュウイチより早く、くーなはキッチンに入った。続いてリュウイチもキッチンに入つたが、くーなは早くもコーヒーの入つた缶を手にしていた。

「大丈夫なのか？ 少し座つて休んでいてもいいんだよ」

「大丈夫よ。ベッドで寝ていただけだから、却つて元気になつたらいいよ、リュウイチ」

「えつ、リュウイチ？」

「だつてもう お兄ちゃん とは呼べないじゃない。でしょ？」

くーなは女の顔になつて、笑つた。戸惑うリュウイチは「そつか」と言つて、曖昧に頷くしかなかつた。

三か月前。家を飛び出したくーなは新宿を歩いているところを一人の男に呼びとめられ、そのまま一軒の店でアルバイトすることにしたという。十九歳のくーなはそのまま、金を手にした男たちが、ひとときの癒しを求めてやって来る店で働くこととなつた。

働き始めてひと月くらい経つた頃、店で何度か見かけた紳士然とし

た男が、くーなを自分のテーブルに指名した。くーなはその店でも

くーな という源氏名を使った。

くーなちゃんかい。新入りの子かな。

はい、店に来て一ヶ月です。でもお密さんは、もう何度かお見かけしているわ。是非これからも<sup>ひいき</sup>顛願にしてくださいね。

うん、そうしよう。

それから一時間、研究者の端くれと語った紳士は、自分の研究は今に日本を救うという話を滔々と話した。

やがて紳士はくーなに、一枚のメモを手渡した。そこにはリュウイチが通う研究所の場所が書いてあつた。紳士はそのメモを渡しながら、「その場所に行けば、一人の男に会える」と言つて、リュウイチの人となりを話した、らしい。

その男はきっと君にとって 運命の人 だよ。もし会つたら、その男についていけばいい。悪いようにならぬはずだ。

それはどういうこと? こんなところには、私行つたこともないわ。

行けば分かるさ。

意味深長な言葉を残して、紳士は支払いとは別に、幾枚かのお札をくーなに握らせた。当座の生活費に使えばよい、と言つて紳士は店を去つた。

その紳士は、それ以来二度と店には現れなかつた。

だから店が休みの日に、そのメモの場所に行ってみたの。それ以来その人は店に来なかつたし、気になるじゃない。行ってみたら、話通りリュウイチが歩いてきたわ。もづびっくりした。本当に運命の人か、話しかけてみた。

コーヒーを飲みながら、くーなはリュウイチにそう告白した。

「優しい人に見えたから、ついて来たわ」という言葉で、くーなは自分の告解を終えた。

ついてきて本当によかつた。

しみじみとコーヒーを飲み、くーなはライオンの描かれたマグカップを、愛おしげに手で包み込んだ。

リュウイチは黙つて聞いていた。くーなと出会つて以来、遭遇した数々の出来事は、リュウイチの驚きに対する感情を消耗させた。だからリュウイチはもう、くーなの言葉にも驚かない。

コーヒーを飲み終えると、くーながリュウイチをベッドに誘つた。まだ日の高い昼間に、二人の愛の交歎が始まった。

くーなどの交わりは、リュウイチが抱えた悩み、漠然とした不安を忘れさせる。くーなの肌に触れ、小さく艶やかな唇に自らのそれを重ねることで、リュウイチはくーなが今ここにいる実感を、くーなの実像を、彼の五感でとらえることができたからだ。そしてそのアリティは、彼の五感を通じて、頭の中に「くーなを守る」ことへの使命感を生み出した。

くーなが現れたことから始まつたリュウイチの憂鬱、不安を癒すものは、今やくーな以外にない。その矛盾をも、リュウイチはくーなとともに、余すことなく受け入れた。

交わりを終えて、汗ばんだリュウイチの肩に小さな頭を載せているくーなに、リュウイチは尋ねた。

お前エーテルって知っているか？

何か聞いたことはあるけど、学校で習つたことかしら。

じゃ作り方は分かるかい？

そんなこと、分かる訳ないじゃない。見たこともないもの。そうだよな。

リュウイチは目を閉じた。くーなの体温とビロードを思わせる肌を感じたまま、リュウイチは瞑想した。

やはりくーなは、何者かに眠らせたんだ。しかもその者は僕のいない時間を狙つて、ここに来た。使われたのはエーテル。それはエタノールと硫酸から作られる。僕のいない時間に使われたエーテル。誰か研究所の人間が、くーなを事件に巻き込んだのか？ しかし

ーなど研究所の関係つて？

リュウイチの瞑想はここで深い霧に包まれた。静かに目を開ける。  
くーなが顔をこちらに向けて、黙つてリュウイチを見ている。

くーなが倒れた晩のこと、何か覚えているか？

リュウイチへ届け物つて、宅配便の人来たわ。それで受け取りに出たの。

何時頃？

あまりよく覚えていないけど、結構遅い時間だつたわ。たぶん十時頃。それで受け取りに行つたら、いきなり首をしめられそうになつて……。そうそれから、湿つたタオルのようなもので、口や鼻を塞がれたと思う。苦しくて暴れたような気がするんだけど、声が出せなかつた。そのうちにだんだん気が遠くなつてきて、次に気がついたら病院にいたわ。でも荷物を受け取りに行つた後ことは、ちょっと記憶があやふやだけね。

その宅配便を運んできた奴には、見覚えは？

よく覚えていない。帽子をかぶつていたような気がするんだけど、どうもその辺りから、記憶が曖昧なのよ。

くーなは静かに頭を起こした。わずかに蒲団が持ち上がり、くーなの大理石を磨き上げたような肩が露わになつた。

リュウイチも起き上がり、服を着た。くーなにも服を着なよと言った。くーなは、その前にシャワーを浴びてくるわ、と言つて浴室に向かつた。

シャワー室に入ったはずのくーなは、すぐに「ない」と言つて、青ざめた表情のまま、全裸で浴室を飛び出してきた。

どうしたんだ。

ないのよ、ピアスが。右だけ。病院で落としたのかしら。今までずっと、耳についているものと思っていたんだけど。

くーなは大切なものを失つたことに、興奮していた。左耳にだけぶら下がつたピアスは、兄弟を失つたように寂しげに、くーなの動き

に合わせて揺れていた。

仕方ないよ。あんなことがあったんだ。

でも嫌。もう一度病院を探しに行く。

また買えばいいと言つリュウイチの言葉にも、くーなは耳を貸さず、探しに行くの一点張りだった。結局リュウイチが折れて、くーながシャワーを浴び終えたら、一緒に探しに行くことになった。

家から病院までの道中、一人は小さなピアスの輝きを見逃すまいと、帰ってきた道を思い出しながら病院に向かった。しかしその道中で、くーなの左耳で揺れるピアスは、自分の片割れを発見することはできなかつた。

くーなたちはつい数時間前に後にした病院に着くと、先程看護師たちの見送りを受けた正面のエントランスから中に入った。くーなは病室から自分の歩いた道を辿りながら、目を皿のようにしてピアスを探した。

探しながら一階に上ると、ナースステーションから女性看護師が、彼らを見て出てきた。この一日間、くーなの面倒をみてくれ、リュウイチに見えない面会者の来訪を教えてくれた看護師だった。

「どうしたの？ 何か忘れ物もしたの？」

看護師がくーなに尋ねた。

「忘れ物じゃなくて、落し物なの。ピンク色のピアスなんだけど、涌井さん、見なかつた？ これなんだけど」

涌井と呼ばれた看護師に、くーなは自分の左耳にあるピアスを見せた。ちょっと待つて、と言つて涌井はナースステーションに引っ込んだ。再びくーなの前にやつて来た涌井は、首を横に振りながら言った。

「こつちには落し物として、届いていないわ」

「それじゃ病室を探したいんだけど、いいかしら？」

「ええ、匡子さんの部屋には、まだ誰も患者さんは入っていないから、どうぞ」自由に。見つかるといいけど

そう言つて、涌井は一緒に一〇五号室に向かつた。

三人はくーなが寝ていたベッドを中心に、部屋中を隈なく探し回つた。しかし右耳にあるべきピアスは、この部屋でもその輝きを取り戻すことはなかつた。

「くーな、これだけ探しても見つからないんだ。もう諦めろよ」

ピアス探しに疲れ、リュウイチはくーなの肩をそつと叩いた。振り返つたくーなの目には、涙がいっぱいに溢れていた。

なおもピアス探しを続けるくーなをどうにかなだめて、涙を拭かせると、リュウイチは涌井に、一緒に探してくれたことへの礼を述べて病室を出た。重い足取りのくーなを連れて一階に降りると、意外な形でピアスはくーなの手に戻つた。

病院の一階ロビーは、外来の患者たちがあふれていた。その患者たちをかき分けるようにエントランスに向かう途中、リュウイチに声を掛けてくる者があつた。アキだつた。

こんにちは、と言ひながら、アキは患者の人の群れから、によつきりと生えてきた竹の子のように現れた。リュウイチは頭を下げると、くーなに向かつて言つた。

覚えているかい。コイちゃんのお姉さんアキさんだ。

こんにちは。この前はありがとう。アキさんっておっしゃるんですか。

くーなちゃん、もう良くなつたのね。元気そうで安心したわ。

ええ、すっかり良くなりました。

ところでこれ、くーなちゃんの物じゃないから。

そう言つてアキはバッグの中から、小さく光るピアスを取り出した。それは間違いなく、くーなの左耳の片割れであつた。

以前リュウイチさんのところで、くーなちゃんに会つたときに、何となく見覚えがあつたので、もしかしたらと思つたの。

これどこで？

アキはエントランスの方を指差した。

病院の入り口でね。先ほど風邪の診察に来た時に、ドアの前で

見つけたのよ。

くーなにピアスを手渡すアキに、リュウイチが尋ねた。

ところでくーなが入院していることをご存じだったんですか？  
アキは不意を突かれたような表情で、はつとリュウイチを見た。しかしすぐに聰明な無表情に戻ると、言った。

実は昨夜、ユイから電話で聞きましたの。

では、それまでくーなの入院については、ご存じなかつたと。  
ええ、元気なくーなちゃんが入院しているなんて、ユイから聞かされてもなかなか信じられなかつたくらいでしたわ。

そう言うとアキは、じゃあまたねとくーなに手を振つて、外来患者の群れにしばらく見え隠れしていたが、やがてその群れに飲み込まれた。

くーなは横で、大切なピアスが戻つてきたことに無邪気に喜んでいた。

家に戻るとまた騒動が持ち上がつた。くーなが「本がない」と騒ぎながら、自分の荷物を入れていた大きなバッグを引っかき回していった。シャツやスカートや下着が、ところ構わず撒き散らされた。リュウイチは半狂乱になつてゐるくーなど、衣服が散乱する部屋を見て、驚愕した。

一体今度は、どんな本がなくなつたんだよ。

トルストイの本。『戦争と平和』つて本よ。

それはくーながリュウイチと最初に出会つたとき、唯一身につけていた持ち物だつた。くーなはそれを、彼女の父の部屋に忍び込んだ時に掠め取つた、たつた一つの戦利品だと笑つて笑つた。それ以来、家を出るまでの間、父が作り上げた結界には足を踏み入れていない。だから何度も読んだわ。その本だけが、私とあの部屋との繋がりのような気がしたの。それにしてもあの部屋にある本には、文学小説であつても 戦争 なのかと思ったら、ちょっと可笑しかったわ。

それはそうと、本以外に何かなくなつたものはないのか。

ないわ。でも病院から戻つたら、バッグのチャックがちょっとだけ開いていた。それでおかしいなと思つたの。私、そういうの結構気になるのよね。シャワーの後、着替えたときに、きちんとチャックは閉めたはずなんだけどな。

ということは、本はなくなつたというより、盗まれたつてことになるんじゃないのか？

誰もいない間になくなつたんだから、そういうことになるわね。何だか怖いわ。でもどうして、あんな擦り切れかけた本だけを盗むのか、まったく理解できない。それに帰つて来た時、ドアの鍵は閉まっていたわよね。

くーなは今更ながら、背筋に冷水を浴びせかけられたように、ぞつとした顔をした。彼女の頭の中を、一日前の事件の記憶が去来した。うん、閉まっていた。だが古いマンションだし、針金一本で鍵を開けるなんて人もいるからな。それよりその本には、何か大切なものの、例えばお札のようなもの、が挟んであつたりしないのかい？いいえ、ただのおんぼろの文庫本よ。何冊かの分冊になつていたんだけど。確か四冊目あたりには、父が書いたんじやないかと思われる、何か落書きのようなものも書いてあつたしね。普通の人が欲しがるとは、到底思えないわ。

(落書き?)

その落書きっていうのは、何て書いてあつたんだ。

よく覚えていない。そもそも変な式のような、意味不明な文字が書き連ねてあつただけで、見ても全く意味不明よ。

そういうとくーなは、本は意外とあつたり諦めたよついに「もういいわ」と言つた。

本はまた買えばいいわよ。そういえば、父は、私があの部屋に入つてから、その本を探していたみたいだつたわ。何日か後に、何度も「知らないか」って聞かれたもの。でもこっちも叱られて、ふてくされていたら、知らないと言つて隠しておいたの。

くーなは、シャツや下着の海の中心に座り込んだまま、さも可笑しそうに笑つたが、リュウイチは笑わなかつた。その落書きが無性に気になつた。

その夜、いつもの風呂上りのコーヒーを飲みながら、くーなが話しかけてきた。

リュウイチ、トルストイ知つていてる?

名前くらいは知つているよ。ロシアの作家だよ。

そのトルストイの有名な言葉があるんだけど、それは? 知らないな。

やつた、リュウイチが知らずに、私が知つてることもあるのね。

嬉しそうにくーなは、トルストイの名言を披露した。

「過去も未来も存在しない。在るのは現在という瞬間だけだ」

結構好きな言葉なのよね。トルストイがどういう意味でこの言葉を言ったか、それは分からぬけど、今という瞬間を懸命に生きろと言われているような感じが好きなの。

なるほどな。でも未来も大事だと思うけどな。

そうかしら。

くーなは未来について、どう思つていてるんだい?

うまく言えないんだけど、未来 というのは、結局今、つまりトルストイが言う 現在 の延長でしかないわ。こう話している今も、そう言つていてる間に今ではなくなつて、未来 だと思つていた時間が、次の瞬間には 今 になつていてる。だからいつも 今 を懸命に生きていれば、それは結局、常に懸命に生きていることになるんじやないかしら。未来つていうのは、言うなれば予約された今 ね。

もしかすると、リュウイチは考えた。くーなの樂天的とも思えるほどポジティブな生き方の根源は、ここにあつたのではないかと。なかなかくーなもいことを言つね。

そう言つとリュウイチはコーヒーを飲み干し、「そろそろ寝よつ」と立ち上がった。

くーなの退院に始まつた、騒動に満ちた一日が終わつた。

眠りに落ちゆくリュウイチの夢の中では、昔観た、オードリー・ヘプバーンが演じてゐる「戦争と平和」の映画が再生されていた。ヘプバーンの天真爛漫な笑顔で走り回るシーンを、不条理な出来事に立ち向かい、<sup>あらが</sup>抗い、くーなを守る使命感を抱えて進む自分に重ね合させていた。

僕のナターシャを守らなくてはいけない。彼女を巻き込む、不条理な何かから守らなくてはならない。くーなの顔から天使の笑顔を消しおつてはいけないんだ。

浅い眠りにまどろみながら、リュウイチはそう誓つのだった。

その朝、研究所で一仕事を終えたリュウイチを、ツジイが休憩コーナーに誘つた。休憩コーナーにはコイもいた。

ツジイは席に着くなり、開口一番、リュウイチに唐突な質問を浴びせかけた。

リュウイチ、君と一緒に暮らしている妹さんは、本当に君の妹なのか？

リュウイチはどきりとした。一瞬口ごもった。しかしつづじいの目は真剣であり、決して冗談で聞いているようには思えなかつた。隣で一人の会話を邪魔しないように座っているのがコイだけであり、かつ彼女はすでにあらかたリュウイチとくーなの関係を知つてゐる。そのことがリュウイチを決心させた。

実は一緒に暮らしているのは妹ではありません。嘘をついたり、隠したりするつもりはありませんでした。ただ何て言つか、つまりタイミングがなかつたんです。すみません。

よく分からぬまま、リュウイチは何となく謝つた。

いや別に、謝ることはないさ。君だつて大人だし、僕も君のプライベートに、不必要に介入するつもりで聞いたのではないんだ。ただ所内で噂になつてしまつていてね。気になつたものだから。

そうでしたか。それでその噂というのは、一体どんな話なんですか？

最初は君が妹と称する女性と、急に一緒に暮らし始めたといふ、こう言つては何だが興味本位の噂話だつた。先日の打ち上げで、君から聞いた妹の話を、ついキトウやミヤシタ達に話してしまつた。それが発端だつたかもしれないし、そのことについては僕が謝らないといけないかもしれない。しかし最近は、単に噂話と放つておけないような話が持ち上がりつてきていてね……。

といふと？

うん。

そこでツジイは言つべきか、言わざるべきか、やや逡巡した。そして意を決したように、きっぱりと言い切つた。

君と一緒に住んでいる、君が妹と称する女性が、実は大和田局長の娘ではないのかといふ話が出ているんだ。まさかとは思うが、本当なのか？

実を言つと、僕にもはつきりと分かりません。ですが、彼女の本当の姓が『大和田』であることは事実です。ですから、大和田局長の娘である可能性は、否定できません。

真摯なまなざしで話したリュウイチを見て、ツジイも一応納得した表情を見せた。ツジイは「根掘り葉掘り聞いて、すまない」と言い、リュウイチの肩を一つポンと叩くと、コーヒーを飲みほし、席を立つた。

横でコーヒーを静かに飲んでいたユイも、驚いていたようだった。

リュウイチは噂話の出所については、詐索しないつもりだった。そんなことをすれば、却つてくーなに累が及ぶ可能性がある。それにツジイもわざわざ直接リュウイチを呼んで、聞いたとした以上、今後不必要な他言は避けてくれるであろう。ユイにしても今まで蔭ではリュウイチやくーなの助けになつてくれたのだ。余計な噂などすまい。そもそもユイには、噂話なんて似合わない。

しかしリュウイチは、くーなの本当の出自については知る必要があるのではないか、と考えた。

確かに今まで、大和田という姓の一致と、くーなの父親が防衛庁に勤める人物であることから、くーなの父親はすなわち 大和田局長であると考えてきた。しかし果たして防衛庁に勤務する大和田姓の人物が、いかほどいるだろう。

(やはり確かめておかなくてはいけないだろう。)

帰り道、リュウイチはくーなの父親と会う決心をした。

もし彼女の父親と対峙するとなれば、リュウイチはまだ二十歳にも

はたち

満たない少女を誑たぶらかした、とんでもない男との誹りを免れないかもしだす。少なくともくーなは、再び彼女の父の庇護下に置かれ、リュウイチとの一ヶ月にも満たない蜜月は、間違いなく幕を引くこととなるであろう。

それでもリュウイチは会わなければならぬと考えた。それは悲壮感で満たされた決心だつたけれども。

その決心は、くーながかの文豪トルストイの言葉を借りて語った言葉に、後押しされたものかも知れなかつた。

「今を懸命に生きることとは、そういうことではないのか。仮に明日、くーなどのかけがえのない蜜月が終わるとも、僕はくーなを守ると決めたんだ。

いつしかリュウイチは、くーなによつて強くなつた自分を省みた。かえり

明日は週末という夜、リュウイチはくーなに己の決心を切り出した。

君の父親に会いに行こう。

くーなは狐に鼻をつままれたような表情になつた。さもあろう。リュウイチの言葉は、くーなにとつて、父の許へ帰れという通告でもあつたから。

どうして。もう父のところへなんて、帰りたくないわ。私が邪魔なら、そつはつきり言つてくれてもいいのよ。でも父の所へは、帰らない。どうして急にそんなこと言い出すのよ。

たちまちくーなの目には、リュウイチの決心を最も鈍らせてしまつ、ダイヤモンド色の涙があふれた。実際、リュウイチは一瞬、己の言葉を取り下げるべきかとさえ考えた。しかしリュウイチは、もう以前の彼ではなかつた。

誤解しないでほしいんだ、くーな。君が邪魔だなんて、考えたこともない。いやむしろ、今の僕にとって、君は何よりも大切な人だ。だからこそ、僕は君の父親と会う必要がある。

涙で真っ赤になつたくーなの目をまっすぐ見据えて、リュウイチはつくりと言つた。

それから彼の研究所での噂話について、説明した。彼とくーのことを秘密にすることはあるか、はつきりしておかないと噂は必要以上むしよの尾ひれをつけて、二人の大切な時間を蝕むかもしないことも。そしてリュウイチは、ここ数日、一人でじっと考えていたある推量を語った。

「これはまだ僕の考えでしかないんだが、君を事件に巻き込んだのは、僕の研究所の人間ではないかと考えているんだ。

リュウイチはくーなに、彼の頭に数日来わだかまつっていた考え方話をした上で、事は急を要する、と言った。

それでもくーなは執拗に反対した。彼の胸に飛び込んだくーなは、まだ大人になりきれない駄々っ子のように、激しく頭かぶりを振つた。

でも、父の所に行つたら、きっと連れ戻されるわ。そうしたらもう、リュウイチともおしまいよ。私はまたあの開かずの間の隣に、幽閉されてしまうかもしれない。そんなの、嫌よ！

くーなの言葉は、リュウイチにも痛いほど同感できた。ただ出会つて、一緒に生活を始めただけの、一人の時間を妨げる 何か を恨んだ。リュウイチのその 何か と対峙しなければならないという決心は、もういささかも揺るがなかつた。

大丈夫だ。君は僕が守ると決めたんだ。きっと君のお父さんにも分かってもらうさ。分かつてもらえるまで、僕は何度でも話す。僕を信用してくれ。今まで、おそらく君は安全ではない。僕は君を守りたい！

訴えかけるリュウイチの眼力が、かたくななくーなる心をようやく融とかした。

くーなはまだ泣きじゃくつたまま、彼の胸の中でかすかに頷いた。

翌日、二人は夏の日差しに今にも融解しそうな、アスファルトの緩やかな坂道を、並んで歩いていた。

洒脱な邸宅が立ち並ぶ東京の山の手郊外の一角に、ひときわ目を引く、広い庭と高い塀に囲まれた家がある。黒い大理石でできた表札

に、美しく彫られた名前は 大和田 である。

リュウイチはくーなの案内で、門の前に立つた。圧倒されるほどの大邸宅の大きさに、息を呑み、思わず足がすくんだ。横を見れば、くーなは手馴れた様子で、門柱に取り付けられているインター<sup>ホン</sup>を鳴らしていた。

リュウイチは慌てて心の準備をしなければならなかつた。

はい。大和田でござります。

齡を重ねたと思われる落ち着きと邸宅にふさわしい上品さを兼ね備えた声が、インター<sup>ホン</sup>から聞こえてきた。

私、匡子。今、門の前にいる。開けてちょうどだい。

匡子なの？ お父様から、今日来ることは聞いていたわ。では今から開けますから、お入りなさい。

三秒後、金属製の重そうな門はその重厚さにふさわしく、威厳ある音を立てながらゆっくりと開いた。門の向こうには、ちょっとした森を思わせる植え込みと車が数台あつた。さらにその奥に、簡素なデザインでけばけばしさを極力抑えながら、しかも高級感は損なわずに聳え立つ家があつた。

くーなの肩をリュウイチがぽんと叩いた。くーなはリュウイチを見て頷いた。そして「行きましょう」と言つて、まるで行進でもするようにおおきく手を振り、門の中に入つて行つた。その仕草は、自由出て行つた家に再び舞い戻つたことへの、照れ隠しにも見えた。門をくぐり、邸宅の木製のドアに向かつて進み始めたとき、ドアが開かれた。中からは、髪を短く揃えた和装の女性が現れた。  
くーなが「お母さんよ」と、リュウイチに小声で言つた。ドアから顔を出した女性は、久しぶりの娘との再会を喜んでいるのか、ドアの前に出て大きく手を振つていた。

くーなの母の顔がはつきりと分かるところまで進むと、リュウイチは彼女に向かつて、一つ頭を下げた。くーなの母も頭を下げ返した。我が娘が男性をエスコートして、久しぶりに帰つてきたことにも、さほど頓着はしていなかつた。きっと世俗全般に疎いまま、齡を重

ねてきた女性なのだと、リュウイチは思つた。

母が一人を快く迎えてくれたことで、リュウイチは一時に緊張感が解け、膝が、がくりとする感覺に襲われた。

ドアの前に到着すると、一人を見比べながらくーなに母が尋ねた。

匡子ちゃんのお友達？

「そうよ。リュウイチさん。お友達っていうより、命の恩人つて感じかしら。

「まあ、そうなの！」とくーなの言葉を文字通り受け止めた母は、大仰な調子で驚いた。そしてリュウイチを頭から爪先まで、ずっと眺め、もう一度大きくお辞儀をした。

何があつたか存じませんで、申し訳ありませんが、匡子がお世話になりました。

まだ家にも入つていないうちに、くーなの母によつて、リュウイチは覚えず英雄に祭り上げられてしまった。予期しない展開に、彼はどうぎまきしながら、くーなど彼女の母の顔を交互に見ていた。

くーなの母に促され、二人はようやく邸宅の中に入った。大理石でできた広い玄関で靴を脱ぎ、それに続く廊下を奥に進んだ。廊下を突き当たつたところに、リュウイチの住むマンションの一室を飲み込んでしまうほどの大きさの応接間が控えていた。一人は広すぎるその部屋に通され、くーなの母からしばらく待つようと、グレーの大きなソファを勧められた。

十分間、ソファに座つたまま、応接間に並ぶ豪華な調度品を眺めていた。やがてくーなの母は、盆に載せたコーヒーと一人の男を伴つて、再び応接間に入ってきた。リュウイチの目はその男を、素早く捕捉した。

やはり、あなたでしたか。

唐突なリュウイチの言葉にも、その男は官僚らしい懇懃いんぎんさと尊大さを崩さなかつた。しかし男の目には、にわかに警戒の色が浮かんだ。それを察知したリュウイチは、慌てて挨拶もなくいきなり話しかけた非礼を詫び、改めて自分の名を名乗つた。

防衛庁、防衛政策局の大和田局長でしたね。以前、研究所

視察の折に、お見かけしました。

そうか。君は荒木君のところの所員かね。いかにも私は、防衛政策局の大和田だ。

リュウイチが荒木の部下であることを知り、大和田も警戒心も少し解いた。大和田は茶色の紙巻煙草を取り出すと、「失礼するよ」とリュウイチに言い、火をつけてうまそうに一息吸い込んだ。  
くーなを見て一言、「久しぶりだな」というと再びリュウイチを見た。

何か私に話があるそしだが。

はい。今日はいくつか大和田局長に確かめたいことがあって、お邪魔しました。

ほう。何だね。

その前に、一つお断りします。これから確認させていただくお話は、もしかすると大和田局長のお仕事に関わることかもしません。もし局長の、あるいは防衛庁の機密に関わるのであれば、お人払いしていただいても構いませんが。

ふむ。なかなか君は機転が利くな。では念のため、そうさせていただこう。

妻君に、「絹代、私が呼ぶまで下がっていてくれ」と言った。続いてリュウイチに「匡子は?」と尋ねた。

これまでの経緯もあるでしょうから、匡子さんにはここにいてもらいましょう。いいよね、匡子さん?

リュウイチから「匡子さん」と呼ばれたくーなは、くすぐったそうに肩をすぼめて、黙つて首を縦に振った。

盆を持ったまま大和田の脇に立つて控えていた絹代は、静かに応接間を出て行つた。

さあこれでいいかな。早速話を伺おう。

はい。まず匡子さんがこの家を出て行つた原因からお話しします。

リュウイチはそう切り出した。

そしてくーなに代わって、大和田の書斎に忍び込んだこと。それはただ単に、読むべき本を探すためであったこと。たつた一度、開かずの間に入つたことをなじられ、そのことへの反発として、高校を卒業すると同時に家出することを決心した、ということをかいづまんで説明した。

大和田はただ黙つて、じつと煙草をくゆらしたまま聞いていた。リュウイチはそこで、第一の矢を放つた。

ところで匡子さんは局長の部屋に入つたとき、マル秘と書かれた『核兵器開発』に関する書類を見たと言っています。それは本当のことですか。

それまで黙つて聞いていた大和田の瞳が、ゆっくりと大きく見開かれた。その目はリュウイチを射抜くかのように、鋭かつた。そしてその鋭い眼光のまま、視線の先をくーなに移しながら口を開いた。

いかにも。君が人払いをした理由も分かつたよ。しかしそれは、防衛庁とは何ら関係のない資料だ。部屋に入ったのなら、匡子にも分かるだろうが、私はいわば個人的な趣味で兵器の研究をしていた。

信じていいですね？

リュウイチは再び向けられた、大和田の鋭い視線を押し返しながら、念を押した。

ああ、もちろんだ。

大和田は大きく頷くと、やおら自分の研究について、ひとつひとつと話し始めた。

まだ防衛庁に荒木もいた頃だ。随分前になるが、彼と私は半ば冗談で原子爆弾の製造ができるのか、などという話をしていたことがあつてね。冗談で始めたんだが、そこはお互い、元々が研究者だ。二人とも、そのテーマに夢中になつていた。しかし理屈は知つても、なかなか実際には製造できないんだね。一つ間違えれば、自分が死んでしまうかもしれない危険なテーマだ。だが、それだけに私も荒木も夢中になつた。

そこで一息つくと、大和田はコーヒーで喉を潤した。リュウイチが言葉を継いだ。

そうすると局長の机に載っていた資料というのは……。

そうだ、その冗談で始めた研究の成果だ。実を言つと、匡子が部屋に入った段階で、原子爆弾の設計図とも言つべき計画は、ほぼ出来上がっていた。ただ一箇所を除いてな。

その一箇所とは？

その質問に大和田は逡巡した。話すべきか、決めかねているように腕を組み、およそ二十秒間じっと考え込んだ。

くーなは父の様子をじっと見ていた。一言も発することなく。

大和田とくーなの目が合つた。その瞬間、彼は話す決心をした。

そう、それこそが私の計画の要だった。けれどもその箇所は、今の私にもわからない。

どうことです？

つまりその答えは、匡子が私の部屋から、パズルの最後のピースを持ち出したんだ。本人は否定しているがね。

くーなと田を合わせたまま、さも残念そうな面持ちで、大和田は吐き出すように言った。

第一の矢が放たれた。

それは本ですか。

そうだ。君も読んだことぐらいはあるだろう。トルストイの「戦争と平和」だよ。

思わず、リュウイチとくーなは顔を見合せた。

その本を読んでいるときに、突然最後の一箇所が、私の頭に閃いたのだ。それはもう嬉しくてね。しかしベッドの灯り以外、部屋を暗くしていったから、思わず手近のペンで、その本にメモをした。資料には後で書くつもりでな。

それで結局、資料にはそのメモは書かれたんですか？

いや、だから言つているだろう。その本は、私が資料に書く前に、私の部屋から持ち出されてしまったんだよ。閃きはそのまま、

本とともに私の頭の中から消え去つた。閃きというものは、いくら理詰めで考えようとしても出てこないものだ。だから私の研究もそこで頓挫した。いや、一気にその研究への情熱が、失われてしまつたと言うべきかな。

リュウイチは激しく動搖した。予感はあつた。だが今まで、彼の心は、そんな恐ろしいものが在るという事実を受け入れることを拒んでいた。これまで彼が、己の理性で否定し続けたものが、在つた。それゆえ、リュウイチは、揺れた。

次の質問に移るまでに、リュウイチはかなりの時間を要した。大和田もくーなも、しかしその空氣を察知してか、リュウイチが再び口を開くのを黙つて待つた。

やがて上ずつたような、半オクターブ高い声で、リュウイチは話しだした。

では次の質問をさせていただきます。

ああ。

その資料は視察の際に、研究所にお持ちになりましたか。そして荒木所長とその資料について、論議されましたか。

大和田は一度、彼の<sup>プライベート</sup>秘<sup>ミ</sup>私<sup>シ</sup>的な事実について話したせいか、もはや濶みなく言つた。

持つて行つたし、荒木にも見せたよ。そもそも荒木に、私の研究成果を見せるのが、視察の真の目的だつた。荒木は核分裂や核融合の分野では、私よりはるかに先んじていたよ。だが彼には、兵器に関する知識が欠けていた。それが、彼が防衛庁を離れて、研究所を立ち上げる端緒だつた訳だが……。いずれにせよ、私が原子爆弾の製法を完成させたと話したとき、彼は我が事のように絶賛していたよ。是非拝見させてくれ、と言つていた。それで視察といふ名目で、資料を持つていくことにした。まさか堂々と原子爆弾について、議論すると言うのは憚<sup>はばか</sup>られるし、私も公務が忙しくて、そんな口実でも作らないと、純粹にプライベートな時間に荒木と話をする余裕

もなかつたのでね。

銜うことなく、淡々と語る大和田の言葉を、リュウイチは信じた。そうして素直に頭を下げた。

ありがとうございます。私のような者に、包み隠さず話していくだけで。

仕方ないだろう。娘が連れてきた男だ。私も娘を持つ親として、粗末に扱う訳にはいかないよ。

そう答えた大和田の顔に、微かではあるが初めて笑みらしい表情が浮かんだ。官僚の顔が、いつしか父親のそれに変化した。

テーブルに置かれたコーヒーは、とっくに冷めていた。リュウイチは一口飲み、大和田は一本目の煙草を取り出した。

続いてリュウイチは、彼がくーなど出会つてから一緒に生活を始めた経過を、かいづまんでも話した。リュウイチがくーなをおもんばか女にしたことは伏せた。父親の顔を見せた、大和田の心情を慮つてのことであった。

そして話はくーなが、何者かに襲われ、昏睡状態になつたことに及んだ。父親になつた大和田は、驚きを隠そともせず、かつ心配そうな表情でリュウイチの話を聞いていた。

病院での医師との会話を、リュウイチは反芻した。医師の見立てに拠れば、くーなはエーテルを用いて昏睡状態にさせられたと話した。大和田はその見立てに、科学者らしい反応を見せた。

エーテルか。まるでテレビドラマだな。だがエーテルが、そう簡単に作れるかな？

リュウイチと全く同じ感想を漏らした大和田に、リュウイチは思い切つて己の推測をぶつけることにした。

私もそう思います。

一瞬そこで間を置くと、リュウイチは一気に言い切つた。言いづらいことではあつたが、第三の矢は放たれねばならなかつた。

だから匡子さんを襲つた暴漢は、研究所の人間ではないかと考えています！

再び大和田は、沈思の表情になつた。黙つてしまつた大和田に向かつて、リュウイチは己の推測の根拠を述べた。

研究所なら、エーテルの原料になる試薬もありますし、エーテルの製法を知る者もいると思います。

さらにリュウイチは「一つ、大事なことをお伝えするのを忘れました」と前置きして、まるで苦いものでも吐き出すような調子で、言つた。これが最後の矢であつた。

しかも局長がメモを書かれた本も、先日、何物かが僕の部屋に忍び込んで、盗んでいきました。

大和田の顔が蒼ざめたが、それでも彼はじつと考え込んだままだつた。

散りつく島もない大和田を前に、リュウイチも黙るしかなかつた。横で、くーなが、停滞してしまつた空気を、不安そうな顔で見つめていた。

そのまま長い五分が経過した。目を閉じて、考え込んでいた大和田は、静かに瞳を開くと、独り言のように呟いた。

「これはもう一度、私が荒木と会う必要がありそうだな。大和田の咳きが意味するところを、リュウイチは尋ねたかった。だが大和田が苦笑に満ちた表情をしていた。それは一研究者としての苦悩とも、愛娘を危険に晒す要因を作つてしまつた父親の苦悩ともとれた。くーなを守ることを使命に、この邸宅にやつて来たリュウイチは、主に父親としての苦悩に同情した。結局、彼はその問い合わせを飲み込んだ。

リュウイチはやや大和田の表情に柔和さが戻つたところで、再び話しお出した。

「これで僕が大和田局長に確認したかつたことは、全てです。ただ最後に一つ、お願ひがあります。

何だね。言つてみなさい。

大和田の言葉には、腹を割つて話した男同士の気安さが、いつしか含まれていた。リュウイチもその言葉に、大和田の表情を窺うことなく話すことができた。

その……匡子さんをもう一度、この家で住まわせてください。  
くーなは弾かれたように、リュウイチを見た。驚きと悲しみをない交ぜにしたような表情で、彼女は頭<sup>かぶり</sup>を振つた。

それは私と君が決めることではないよ。

大和田はきつぱりと言つた。

そもそも匡子がここを出て行つたのは、私の責任なんだろ？  
私はやはり、何としても、娘を、いや誰も私の書斎に入れるべきではなかつたのだよ。そう、私はやはり大きな過ちを犯したのだ。だから今は、匡子の気持ちを尊重したい。もちろん、この家に残ることは歓迎するがね。

大和田は父としての顔を、くーなに向けた。くーなも眩しそうに、父の顔を見返した。これまでの、一般的な家庭ではおよそ交わされることのない会話は、確実に、大和田とくーなの間に長いこと横たわつていた確執を洗い流していた。

どうする、匡子？

そう尋ねた大和田の顔は優しかつた。

私、今日家に帰つてきて、良かつたと思っている。でもね、私も私自身の恩返しが終わつていないので。リュウイチさんは、行き場をなくしかけた私を救つてくれただけでなく、この私を守つて、庇<sup>かば</sup>つてくれたわ。だから私もリュウイチさんから受けた恩は返さなければならないと思うの。

いや、それは違うよ。くー……

言いかけたりュウイチの言葉を、畳み掛けるようにくーなが遮つた。

リュウイチさんは、私にとつてかけがえのない人なのよ。お父さん、信じて！ 私はこの恩返しができたら、きっとお父さんの所に戻つてくる。だから少しだけ、私に恩返しの時間をください。

いつしかくーなの目からは、大粒の涙が溢れていた。リュウイチはもう何も言わず、そつとくーなの肩に手を置いた。

大和田は腕を組んだまま、その様子を見ていた。

ふむ……分かった。

組んでいた腕を解くと、大和田はリュウイチに歩み寄り、その右手を取った。固い握手をした大和田の目にも、心なしか光るもののが浮かんでいるように見えた。

そして泣きじゃくるくーなに言った。

そつと静かに家を出るんだよ。絹代にばれたら、また一騒動起きてしまう。

そう言って快活に笑つた。もう一度とくーなに会えなくなるかもしないという覚悟で臨んだ、大和田との一度目の邂逅で、リュウイチは図らずも大和田の父親、研究者、官僚のそれぞれの矜持きょうじを持垣間見ることとなつた。

大和田は静かに応接間のドアを開けると、首だけを廊下に突き出した。誰もいないことを確認すると、人差し指を口に当てて、二人に合図した。その顔は何かいたずらを仕掛けようとしている少年のように、生き生きと楽しげであつた。

手招きされてドアに歩み寄る一人の背中を、大和田はそつと静かに押した。忍び足で玄関に向かう一人の背中に、父は小さく手を振つた。

家に帰る道すがら、リュウイチは大きく伸びをしながら、前を歩くくーなに向かつて叫んだ。

素敵なお父さんだね！

くーなは今、ここにいる幸せを堪能していた。父とのわだかまりも解け、リュウイチも彼女の隣で、朝食を頬張っている。

父はくーなに、リュウイチへの恩返しの時間を与えてくれた。リュウイチの傍にいることを許した。きっと母は出迎えたきり、いつの間にか煙のように消え去った、親不孝な娘を大いに嘆いているのだろう。

空想はいつだって楽しい。くーなはにやにやと笑っている。今、彼女は自分の空想の世界リアリティを、大きな羽を広げて飛び回っているのだ。だが空想とは、架空ヴァーチャルの世界である。そこに「今」はない。「今を懸命に生きる」とを説いたくーなは、「今」を忘れ去り、時間軸のない世界に身を委ねていた。

しかし彼女が「今」の存在する、現実世界に生きることを放棄しようとしまといと、現実の世界は、確実に未来を取り込み、それを「今」というフィルタで濾しどり、過去を紡ぎ出す作業を飽くことなく繰り返す。だからくーながふつと我に返り、再び「今」を意識したときには、すでにリュウイチは朝食を食べ終えて、「コーヒー」を飲みながら、すでにフィルタで濾された過去ミヨレートという残滓ざんしを吟味し、これから訪れるであろう「今」の連続を、頭の中で分析していた。

大和田が作成した資料が、もし研究所の何者かにわたっていたとしたら……。リュウイチはまず、その可能性から出発した。

その機会があるとすれば、おそらく大和田が視察に訪れた機会だろう。実際に研究所内を視察に周っていたときには、大和田は無論そんな資料は手にしていない。それは視察に同行したりュウイチ自身も見ていることだ。

ならばその資料は、視察の間、どこにあつたのか？

(所長室?)

そうだ所長の部屋だ。視察前に大和田は、荒木所長と部屋でまさにその資料を見て、議論していた、と言っていた。視察の間、その資料は所長の部屋にあつたのだ。

ではその時、所長室はどうなつていたのだろう。視察を担当したのはツジイ主任だった。荒木所長は視察には同行していない。もちろん荒木所長は視察から戻った大和田に、彼のライフワークの成果とも言つべき、「原子爆弾の製法」が書かれた資料は返しただろう。だが、もしも、視察の間自室にいた荒木所長が、その資料をコピーしていたとしたら……。

そしてくーなが持つっていた本が、もし彼の手に落ちていたとするならば……。

リュウイチの思考が、そこで停止した。

「リュウイチ」遠くでくーなが呼んでいる声がする。彼の心には、にわかに、その顔の色とは対照的な、どす黒い雲が立ち込めた。リュウイチ、リュウイチ。呼びかけながら、くーなが体を揺すつている。

ねえ、リュウイチ。どうしたの、変よ。

リュウイチは、はつと我に返つたが、すぐにくーなの肩を掴んだ。その目はまるで幽霊を見たかのように、大きく見開かれ、くーなは思わず息を呑んだ。

くーな、お父さんに電話してくれないか。確か昨日、君のお父さんは『もう一度荒木と会う必要がある』って言つていたよな。

そうね、言つていたわ。電話するのはいいけど。

くーなは携帯電話を取り出し、大和田の携帯電話にダイヤルした。三回かけ直した。しかし彼女の携帯電話は、空しく留守番サービスのアナウンスを繰り返すばかりだった。

じゃあ今度は、自宅にかけてみてくれ。

わかつたわよ。でも、どうしてなの？

理由はあとで話すからや。まずは君のお父さんが、家にいるのか確かめて欲しいんだ。

くーなは再び携帯電話を開き、白丸に電話した。受話器から、絹代の声がした。

はい、大和田でござります。  
もしもし。

あら匡子ちゃん。昨日はどうしてまた出て行ってしまったの。てつくり帰つて来たものと思つていたのに。

「はじめんなさい、お母さん。お父さん、いるかしら。

そのとき大和田は、庭の植木の手入れをしていくところだった。絹代に呼び出されて、間もなく大和田が電話に出た。

匡子か、どうした。リュウイチ君と喧嘩でもしたのか。受話器から、隣にいるリュウイチにもはつきりと分かるほど笑い声が聞こえた。

そうじやないわ。実はね、リュウイチがお父さんと話したいって言つているの。

「かわるわね」と受話器に言つと、それをくーなはリュウイチに手渡した。

大和田局長、お休みのところ申し訳ありません。実はもう一つお聞きしたいことがあります……。

リュウイチ君だね。何だい？

できたらお会いして、お話をさせていただきたいんですが。お時間ありますか？

そうか。

考えているのか、少し大和田は無言になつた。リュウイチは祈るような気持ちで待つた。

祈りは通じた。

夕方でも構わないかね。

ええ、ご都合のいい時間と場所をおつしやつてください。

間もなく私も外出してしまつ。夕方五時に新宿でどうかね。西

口の……そだな、JR改札で落ち合つことにしよう。

わかりました。必ずその時間に伺います。ありがとうございます。

何、構わないさ。夕方以降は、どうせ空いている。それに不謹慎かもしれないが、君の昨日の推理は、なかなか聞いていて楽しかった。ではまた、夕方会おう。

電話が切れた。

くーなはテープルに携帯電話を置くと、リュウイチに尋ねた。

父と会うの？

ああ。夕方五時に、新宿で会つて貰えることになったよ。

でも昨日、父とは話をしたばかりじゃない。どうして急にまた？もう一度、確かめておきたいことがあるんだ。それに、いい忘れたことも。

結局、くーなへの説明はそれだけだった。

午後になつて、二人は新宿に向かつた。くーなが、折角だから買い物をしたいと言い出したからだ。デパートのレストランで昼食をとつた。その後は夕方まで、リュウイチは足が棒になるほどくーなの買い物に付き合わされることとなつた。

(それにも女という生き物は、どうしてショッピングとなると、恐ろしいほどのバイタリティを發揮するのだろう)

ねえ次はあの店に行こう、と言つて、くーなはリュウイチの腕を引つ張る。リュウイチはデパートでは、完全にくーなの操り人形と化していた。

ようやくくーなの買い物への情熱は治まり、色とりどりの女性服売場が立ち並ぶフロアの一角にあるカフェに、一人は入つた。リュウイチは干からびた魚のようになつた体に、冷たい飲み物を注ぎ込み、ほつと生き返つた心地がした。

隣の空いている椅子に、大きな紙袋を一つ置くと、くーなもオレンジジュースを瞬く間に飲んでしまつた。

ああデパートで、買い物なんて久しぶり。楽しかったわ。あち  
こち連れ回してごめんね、リュウイチ。

今更ながらにくーなは、すでに疲れた顔をしたリュウイチを気遣つ  
ていた。

うん、くーなもここのことか、大変だつたしな。楽しかったの  
なら、良かつたよ。

「大変だつた」という己の言葉が、またくーなを巻き込んだ事件を  
思い出させた。否が応にも、あの事件を考えてしまふ。くーな  
への心配が、鎌首を持ち上げる。一体僕には、そしてくーなの前には、何が待ち受けているのだろう？

しかし未来は朧<sup>あはら</sup>げにしかその姿を現さない。リュウイチはすでに  
過去に押しやられた出来事の残滓<sup>ざんし</sup>をかき集めて、やがて今と  
なる未来を予測するしかないのだ。そんな危うい未来予測に、くー  
など自分の命運を託しているのかと思うと、リュウイチはふと「本  
当にくーなを守れるだろうか？」という弱気な気持ちになつた。

（とにかく突き進むしかないよな、リュウイチ）自分に向かつてそ  
う呼びかけ、とにかく弱気な心を眠らせる。気持ちを奮<sup>ふる</sup>い立て、  
真つ直ぐ前を向く。

その視線の先にある時計は、午後四時三十分を告げていた。

約束の時間に遅れまいと、リュウイチは席を立つた。くーなが抱えていた大きな袋を持ち、小さい袋はくーなが肩にかけて、一人は連れ立つてカフェを出た。

週末の夕方に差しかかる時間、デパートから駅へと向かう人で、新宿の街はごつた返している。JRの改札までの道のりはさほど長いものではなかつたが、人垣を搔き分けて改札にたどり着くまで、たっぷり十五分を要した。

改札の前もまた、恐ろしくなるほどの人たちが、波のように右へ左へ揺れていた。こんな中で大和田を発見するのは、広い波打ち際で落とした一粒の石を捜すようなものだと思った。その感慨から、リュウイチは過去の残滓の一つを拾い上げた。

(あの外来患者が行き来する病院のエントランスで、アキさんはよくくーなのピアスを見つけられたな)

感慨に浸つていると、搜すまでもなく大和田は一人の前に現れた。

やあ、待たせたね。

お父さん、なんだか外で会つというのも不思議な感じね。

そう言つてくーなは、左腕を父の腕に回し、もう一方をリュウイチの腕に絡めて、行きましょうと言つた。大和田は、間にくーなを挟んで、首だけを横に向け、ともすると人波が発する雑音にかき消されそうになる声を張り上げて話した。

どうだい。折角だから少し早いけど、食事でもしながら話をするというのには。

はい、僕はどこでも構いません。

じゃ店は私に任せてくれるね。

三人は間にくーなを挟んで、蝶のようにひらひらと人の間を潜り抜け、高層ビルの立ち並ぶプロックへと向かつた。

空にまで届くのではないかと思われる摩天楼が、いくつもいくつも伸びる高層ビル街に着くと、大和田はその中でもとりわけ高いビルに入つていった。

一階は広いホールになつており、低層階と高層階で利用するエレベーターが分かれている。大和田は高層階用のエレベーターに乗り、五十一階のボタンを押した。

エレベーターは音もなく上昇し、リュウイチの耳をキーンとさせながら、あつという間に五十一階に到着した。

大和田はエレベーターを降りると、迷うことなく、間接照明がほの暗さを演出したイタリア料理店に入った。大和田の顔馴染みの店なのか、彼が店の入り口に顔を出すと、すぐさま接客用のきつちりとしたユニフォームを着た店員が出てきた。「こちらでござります」と案内された席は、店の一一番奥に個室風にしつらえられたテーブルであった。すぐ脇の窓に目を移せば、気が遠くなるほどはるか下方に、新宿の街並みが照らし出すネオンが、やや薄暗くなりかけた景

色を彩り始めていた。

魚介が鮮やかな野菜とともに皿に載せられたアンティパストと、アペリティフのシェリーが運ばれてきた。くーなの前に、ミネラルウォーターのボトルも置かれた。くーなは真っ先にグラスを取り上げ、乾杯とグラスを突き出した。

食事が始まると、大和田はシェリーをちびちびとなめるように飲みながら、リュウイチに話しかけた。

さあ、そろそろリュウイチ君の話を聞こう。そのために来たんだからな。

そうですね。大和田局長は……。

話しかけたりュウイチを、大和田が遮った。

その『局長』というのは、やめてくれないか。君は僕の部下ではないし、ましてや娘の友人じゃないか。いや、命の恩人だつたかな。ま、大和田さんでもいいし、別にお父さんと呼んでくれても構わない。だが局長は、よそよそし過ぎる。

そこでくーなが合いの手を入れた。

『お父さん』にしちゃえ。いざれそななるかもしないしね。くーなはリュウイチに、軽いウインクをした。思わず、グラスに伸びたリュウイチの手が止まった。

リュウイチは、気まずそな咳払いを一つして、話を続けた。

では……お父さん。

横でくーなが「きやつ」と言いながら手を叩いた。大和田がくーなをたしなめると、赤面しながらリュウイチは続けた。

視察に来られた日、実際に視察に周られる前に、荒木所長と所長室で話をされましたよね。

いかにも、それはもう昨日話したと思うが。

失礼、たしかにそれは昨日お聞きしました。僕が聞きたいのは、その後のことです。大和田、いえお父さんが視察されている間、例の資料は所長室に置かれたままでしたか？

ええと、そうだな。置いてあつたはずだよ。あんなものを荒木

以外の所員に見せる訳にも行かないだろう。だから視察の間、荒木に預けたよ。

やはり……。

それがどうかしたかね。

ここからは、あくまでも僕の推察に過ぎません。昨日、お父さんとお話してから、いくつかの可能性を考えてみたんです。

ほう。

大和田はやや身を乗り出して、リュウイチの次の言葉を待った。大和田の仕草を見て、くーなの好奇心は父親譲りかもしないなと、リュウイチはこの場にそぐわない感慨を覚えた。

つまり視察の間に、荒木所長はお父さんの計画、つまりあの計画書を「コピー」することができたのではないかと。

うん、あの計画書は二十枚程度のものだし、視察の間に「コピー」することくらい、訳ないだらうな。だが視察を終えて、彼のところに戻ったときに、そのような「コピー」があるように見えなかつたがな。

そこなんです。もし荒木所長が「コピー」したという事実を知られないために、「コピー」をどこかに隠したとしたら……。元の資料をお父さんに返してしまえば、あたかも何でもなかつたかのように思いますがね。しかし、あくまでも可能性の話ですが、計画書の「コピー」を荒木所長が今も手にしているとしたら……。

なるほど。荒木に疑いを持つているという訳かい。

お父さんの友人を、悪く言つつもりはないんです。お気に障つたのなら、謝ります。しかし事実、匡子さんも理由なく危険に晒されている。しかもそれは、あの視察のすぐ後に起きた。

そういうことになるかな。

もう一度、計画書に話を戻しましょう。いいですか、お父さん。あの計画書はお父さんの書斎、それも通常は誰も入れない部屋で管理されていた訳ですよね。けれどもあの視察の日、それは研究所にあつた。そしてお父さんが視察をしていた時間、それはほんのわず

かの時間かもしだれませんが、お父さんの管理下から離れた。つまりあの計画書を複製できるとしたら、おそらくその時間しかない。そして実行できる人は……。

荒木しかいないわけか。確かに視察に出た後、彼の部屋には他の所員はいなかつたな。だが、どうして？

そこへウェイターがパスタを盛った皿を運んできた。続いて肉料理も運ばれてきた。

大和田はウェイターに「いつものやつを頼むよ」と言つた。ウェイターは、まるでイタリア女性を思わせる、ふくよかな丸みを帯びた赤ワインのボトルを持ってきた。

ウェイターが赤ワインを、大和田とリュウイチの前に置かれたグラスに注いで去つた。

くーなは運ばれてきた料理を頬張つていたが、二人の話に聞き耳を立てるとは忘れていなかつた。ワインを飲みつつ、パスタに手を伸ばしている一人に、くーなが口を開いた。

そうするところのことなのかな。リュウイチの研究所の所長さんは、お父さんの資料をコピーしたとするでしょ。でも仮にその資料を手に入れたとしても、実際にはお父さんがメモした本がないと、計画書の通りに 爆弾 を作ることはできないのよね。

その通りだ。荒木なら爆弾らしきものは作れるかもしれないが、あくまでも らしきもの でしかない。さらに言えば、荒木は完全主義者なところがあるぞ。おそらく仮にあの資料を見たとしても、その通りには作るまい。あの資料は完全には完成していないのだからな。実際、視察前に彼に資料を見せたときも、『まだ完璧ではないんだな』と言って、残念がつていた。それで何となく議論も終わり、私は視察に向かつたんだよ。

もし所長さんが、お父さんのメモを手に入れたとしたら、爆弾は作れるの？

ああ、あの資料の唯一の瑕きずはそこだけだからな。荒木ほどの実力があれば、作れるだろうよ。それにあの研究所なら、材料には事

欠かんしな。

リュウイチが大和田を見た。

そう、僕が考えたのも、その点です。そしてお父さん曰く、今日最も確認したかった点も。

といつと？

視察前に荒木所長と議論されているときに、お父さんはそのメモの書かれた本について、所長と話をしましたか？

大和田は天を仰ぎ、荒木との会談を思い出していた。彼は、彼の頭の中に残った数多あまたの過去から、荒木との会談の記憶を選別するため、しばらく唸りながら考え込んだ。そして再び、リュウイチを見て、言つた。

うん、思い出した。確かに言つたな。荒木はそのメモさえあればと、我が事のように残念がっていたよ。

そのメモは本に書かれていることも話したんですね。

話したよ。

荒木所長はその本がどこにあるかとこいつ」とを、お父さんに尋ねませんでしたか？

荒木が聞く前に、私がそのメモについて話したときに、一緒に説明したな。『うちの馬鹿娘が、一番大事なメモを本ごと持つて、どこかに行つてしまつたよ』とな。実際そのときは、匡子は家を出てしまつていたし、私の書斎に入つた者は、私を除けば匡子しかいないからね。

ひどい！『馬鹿娘』はひど過ぎるんじゃないかしら。責任は感じますけどね。

横でくーなが甘えたようなふくれつ面をしていた。リュウイチは思わず「くーな」と、いつもの呼称で呼んだ。

でもその本を君が持つて出たことが、君を事件に巻き込んだ元凶かもしれないんだぞ。

くーなはきょとんとした顔でしたが、すぐに合点が言つたようだつた。

そうね。もし所長さんがメモを手に入れようとすれば、その本を持っている私を狙うって訳ね。

動機としては十分考えられる。

何ということだ。

大和田は父としての憤りを、一瞬露にした。リュウイチは続けた。  
でもまだ、僕の中で完全にパズルは完成しない。一つ腑に落ちないことがあるんです。

いや、君の洞察力には驚いたよ。私も長年の友人を疑いたくはないが、やはり一度荒木に確かめねばなるまいな。

その前に、もう一つ確認させてください。くーなが、いや匡子さんが……。

「くーな」でいいじゃない。

そう言ってくーなが笑うと、大和田も頷いた。

じゃくーさんが家出したことを、荒木所長に最初に話したのはいつですか？

ああ、電話で話したな。匡子が出て行つた翌日だ。私もあるとときは少し動転したよ。それですぐに荒木に相談した。  
そうでしたか……。

リュウイチは両手で顔を覆うと、大きく深い溜息をついた。大和田とくーなが心配そうに彼を見た。

大丈夫かね、リュウイチ君。気分でも悪いのかい。

いえ、大丈夫です。今まで私が知りえたことから考へた推察は、以上です。後は直接、荒木所長と話をするしかないようです。

いつしかテーブルには、コーヒーとデザートが運ばれてきた。ボトルにまだ半分ほど残っているワインを見て、ウェイターが「お気に召しませんでしたか」と心配そうに尋ねた。

いや、いつも通り最高のワインだよ。気にせんでくれ。  
優しく静かに、ウェイターに大和田がささやくと、ようやく安心したようにボトルが下げられた。どうしりとした赤ワインの後の、苦

味が効いたコーヒーは心地よかつた。

ところでリュウイチ君。私は早速明日にでも、荒木と会おうと思つ。君の推察が正しければ、話は早い方がいい。

どうしてですか。

相手は荒木だ。しかも推理通りなら、資料は揃つてることになるじゃないか。荒木も科学者だ。科学者といつもののは、常に実証したがるものではないかね。

つまり荒木所長が、資料通りに原子爆弾を作ると……。

大和田は大きく頷いた。

荒木ほどの実力があれば、あの資料から実験用の爆弾を作ることくらい、そう難しいことではないはずだ。

リュウイチは背中に、うそ寒いものを感じた。

急いだ方がいいですね。できれば、その場に私も同席させてください。

しかし君からすれば、彼は所長だ。一般的企業なら、さしづめ社長だよ。そんな男を敵にしてしまふかもしれないが、それでもいいのかい？

ええ、もし私の推測が正しいならば、荒木所長は……、所長である前にくーなに危害を加えた敵つてことになります。もし僕の推察が誤りならば、そのときはもう一度始めから、くーなの敵を探さないといけませんからね。いずれにしても彼女の身の安全を確保することが、今の僕にとって第一の使命ですから。

リュウイチ。

くーながリュウイチを見つめた。その視線は、熱かつた。

リュウイチ君、君はそこまで匡子のことを……。

大和田も一瞬、やや声を詰まらせた。その語尾は不明瞭になつて、聞き取れなかつた。

よろしい。じゃ荒木へは私が連絡する。敢えて君が同行することは、伏せておこう。いいね。

はい、その方がいいと思います。荒木所長と話をする前に、所

長に何らかの予見を持たれるのは、今は得策ではないですからね。

承知しているよ。

もう一つお願いがあります。その場に、その、できればくーなも同席させたいんですが。リスクは承知していますが、推察を確信にするためには、彼女の助けが必要です。

そしてくーなを見て「いいね?」と言った。くーなは力強く頷いた。お父さんにこんなことをお願いするのが、どれほど非道なことかは理解しています。そこを曲げて、是非お願いします。

言つたじやないか。そもそも私が匡子を危険に晒したんだ。こんなお転婆を独りで放つておいたら心配で仕方ないが、今は君がついている。大丈夫だよ。

ありがとうございます。

心から感謝の気持ちを込め、深々と頭を下げた。

いや、私こそ、君と話をしていて、大いに反省したよ。何て、とんでもないものを作ってしまったんだってね。しかも我が娘にもひた隠しにして、拳句の果てには危険な目に遭わせて……。

そこで大和田は声を詰まらせた。彼が纏っていた威厳の鎧は脱ぎ捨てられた。重い鎧を背負っていた肩を落とし、両手をテーブルについた。

リュウイチ君には、本当に大切なことを教わったね。私にとつて何が一番大切なもののだつたのかを。匡子にも心配と迷惑をかけてしまつたな。

テーブルに手をついたまま、大和田は慈愛に満ちた父の目でくーなを見た。涙もういくーなの目は、すでに潤んでいた。大和田はひとつ大きく深呼吸した。長く重い深呼吸であつた。

「すまなかつた、この通りだ」

大和田は、テーブルに手をついたままの格好で、テーブルクロスに額を擦りつけるのではないかと思うほど、深々と頭を下げた。

すでに外は夜の帳が下りて、ネオンはより一層くつきりと、夜空に

映えた。その光は、はるか高いビルの窓にも射し込み、大和田の心を照らした。

## 12 帰還したぐーな（前書き）

いよいよ最終章に近づきました。ここまで読んでいただいた方がいたことが、励みとなり、何とか書き続けることができました。この場を借りて、感謝申し上げます。

次話が最終章となります。是非とも最後までお読みいただければ幸いです。

そしてできましたら、最後までお読みいただいた後、忌憚ない感想をお寄せいただければ、望外の喜びと感じます。

拙文ではありますが、どうか最後までお付き合いいただけますよう。

## 12 帰還したくーな

大和田との研究所への同行を約した朝、新聞の社会面に、次のように見出しど記事が掲載された。

「 研究所で爆発事故。放射能拡散の危険も」

昨夜未明、研究所から数回連續で小さな爆音のような音が聞こえたと、近隣住民から当局に通報があった。近くの警察が駆けつけたところ、建物の一部から煙が出ていた。うんぶん被害者の有無、被害の規模については、現在調査中である。云々

リュウイチはともすれば見落とされそうな、この小さい記事を見て、さつと氣色ばんだ。それは自分の推理の完成が間に合わなかつたことへの悔しさでもあつたが、起きてはならぬことが、現実のものになつたことへの憤りでもあつた。

リュウイチはくーなに、大至急、父へ連絡をするように要請した。くーなが大和田の携帯電話に連絡したとき、彼はすでに車中にいた。おはようござります。お父さん、今朝の新聞はもう読まれましたか。

ちょうど今、車で読んでいたところだよ。大変なことが起きてしまつたようだな。

はい、気付くのが遅すぎました。

君の責任ではないよ。君が、自分を責めることはない。いいかい、リュウイチ君。とにかく今は、研究所に足を運ぶしかない。間もなく君のマンションに着くだろうから、今少し待っていてくれ。

程なく大和田から、到着の連絡があつた。リュウイチは大和田と同行するため、ツジイに出社が遅れることを連絡しようとしたが、研

究所への電話は繋がらなかつた。

視察のときと同じく、中川の運転する黒い車が停まつていた。リュウイチは視察のときにこの車に感じた禍々しさを、またもや感じた。はやる心を抑えつけて、リュウイチはくーなとともに、大和田のセダンに乗り込んだ。

研究所までの道中、車内はほとんど無言だつた。リュウイチも大和田も、じつと何かを考えるように前だけを見つめていた。くーなもその雰囲気にのまれ、じつと車の中で身を固くしているばかりだつた。

やがて景色は、雑木林の合間に民家が立ち並ぶようになった。そして前方に 箱 が見えてきた。正面から見る限り、その 箱 は完全な形を保つているように見えたが、入り口に群がる人々が、事故があつたことを物語つていた。

お父さん、正面は報道関係の人かいっぱいいるようです。裏に回してもらえませんか。そちらなら所員しか知らない入り口があります。報道陣に見つからないよう、迂回して行きましょう。

大和田は、うむと頷くと、運転手の中川に車を後退させて迂回するよう命じた。

もしこのとき、大和田の車が正面入り口からの突破を敢行していたら、あるいはリュウイチは気付いたかもしれない。入り口に沿つた壁の内側の、大きな木が植えられている脇に、ブルーメタリックの車が停まっていたことを。

裏口に回るとさすがに人はおらず、ただ警察が残していつた黄色いロープが、壁に張り巡らされていた。裏口は、一見壁に見える部分に、小さな認証装置が取り付けられているのみであり、そこに入り口が存在することを示すものは他になかつた。そのためか、裏口附近には、出入りを規制するための警官も配置されておらず、リュウイチたちは誰にも気付かれることなく、研究所の敷地内にすべり込むことができた。

敷地に入ると、箱の裏側が見えた。裏側もその形はほぼ完全だつたが、所長室の隣にある倉庫付近の壁に穴が開いており、その周囲だけが黒かつた。

とにかく中に入りましょう。車はどこか離れたところに隠しておいた方がいいかもしません。正面から入れない記者が、いずれ裏に回つてくるかもしれませんからね。

そうしよう。

大和田はその黒い穴の近くで、中川に電話をした。車を連絡があるまで、研究所から遠ざけた場所で待機せよとの指示だつた。三人は、リュウイチを先頭に箱に足を踏み入れた。

研究所の裏口は、一階の一番奥にある所長室のすぐ隣に設けられていた。所長室も、一階ホールもひつそりとして人気が感じられない。リュウイチはホールの隅にあるベンチに、一人を連れて行つた。

「少し待つていてください」と言い残して、彼は二階に続く階段を駆け上がつた。

プロジェクトルームに入ると、すぐにツジイと目が合つた。今回のプロジェクトには参画していないコラを除き、キトウミヤシタもいたが、コイはないようだつた。

どうした、リュウイチ。随分遅い出社じゃないか。

すみません。今朝電話を入れたんですが、繋がりませんでした。そうか、昨夜の事故で電話が不通になつてしまつていたんだつた。とにかく今は待機を命じられている。リュウイチもあまりうるつくなよ。

そう言って仕事に戻らうとするツジイを、リュウイチは呼び止めた。

ツジイさん、一緒に来てもらえませんか。

聞こえなかつたか、今は待機だと言つていいんだ。

分かっていますが、急ぐんです。

リュウイチの目は、あくまで真剣だつた。

ツジイに、階下に防衛庁の大和田局長を待たせていることを耳打ち

した。何か喋りだしそうになつたツジイを口配せで制して、リュウイチは、お願いしますと頭を下げた。

ツジイは仕方なさそうな顔で、行こうと言つた。ツジイは他の所員に「絶対に部屋を離れるな」と大声で命じた。突然の号令に、呆然としているメンバーを尻目に、リュウイチとともに静かに部屋を出た。

一階で、リュウイチはツジイを大和田とくーなに引き合させた。大和田はツジイを見ると、すぐに立つて、握手を求めた。

先日は視察でお世話になりましたな。

大和田局長、今日はまた急にどうしました?

ツジイは唐突に目の前に現れた大和田に驚いていた。そして隣に座つているくーなに目を移した。

こちらのお嬢さんは?

リュウイチに尋ねた。

先日お話した、僕の妹です。いや、正確には、大和田局長の娘さんです。

いつたいどういうことなんだ。訳が分からぬぞ、リュウイチ。ツジイはからかわれたと思ったのか、やや声を荒げた。物音一つしない、事故から明けたばかりとは思えぬほど静まり返つたホールに、ツジイの声は事の外よく響いた。リュウイチはたしなめるように、「しつ」と指を唇に当てた。

すみません、ツジイ主任。今はあまり詳しくお話している暇がないません。急いでいるんですよ。ところでツジイ主任に、もう一つお願ひがあります。

ツジイは慄然とした表情のまま言つた。

何だい。

ツジイ主任は、確かに所長室への入室ができるんですね。

ああ。それがどうかしたのかい?

リュウイチは声を潜めて、耳打ちするような調子で言つた。

リュウイチは声を潜めて、耳打ちするような調子で言つた。

実は大和田局長が、荒木所長にお会いしたがっています。今日、研究所に来られたのもそれが目的です。ただ所長室に入るまで、荒木所長には悟られたくない。だからツジイ主任に、所長室を開けていただきたいのです。

傍らにいた大和田も、口添えした。

ツジイ君、私からもお願ひする。

ツジイは困ったような顔をしたが、渋々ながら承知した。

分かりました。大和田局長をお連れすれば、所長も文句は言わないでしよう。ただ所長は、事故がショックだつたようで、朝から部屋に入つたきりなんです。

実は私も、そのことで話をしに来た。君の悪いようにはしないつもりだ。

大和田のきつぱりとした言葉に、ツジイも心を決めたように、行きましょうと言った。

ホールの廊下は薄暗く、所長室の隣にある倉庫代わりの部屋の前に、『立入禁止』の札が立てられているのが物々しかつた。

ツジイは所長室の前に立つと、ゆっくりと認証装置に手をかざした。緑色のランプが点滅し、ピッという電子音が静かな廊下に響いた。ゆっくりとドアが開いた。

部屋の中には、荒木と二人の女性がいた。三人はデスクの前に置かれた円卓を取り囲むように、正三角形を描く位置に座っていた。ツジイとリュウイチがまず部屋に入った。大和田とぐーながそれに続いた。

リュウイチとツジイの間からテーブルを見たぐーなが、声を上げた。  
あら、コイさんとお姉さんもいたのね。

そのとき不思議なことが起きた。荒木のデスクに置かれた、小さな四角いスピーカーが、くーなの発した声を、ほんの少し遅れてややノイズが入った音で繰り返したのである。

テーブルに座つた三人は反応を示さなかつたが、たつた今この部屋

を訪れた四人は、一斉にそのスピーカーを見た。

何だこれは？

どこから声が出てているの？

リュウイチとくーなの声が、重なり合つた。それらの声もスピーカーは忠実に繰り返した。

リュウイチは憤りに満ちた顔で、デスクに歩み寄り、スピーカーのスイッチを切つた。そして怒りに蒼ざめた顔で、荒木に掴みかからんばかりの勢いで言つた。

荒木所長。あなたはここで、僕やくーなの話を盗み聞きしてい

たのですか？

荒木は含み笑いをしていた。彼はリュウイチの発言を無視して、大和田を見た。

やあ大和田。連絡もなく研究所に来るとは、どうしたのだ。まあ、君が来ることは分かつていただがね。

いつたい昨夜の事故は、どういうことだ。まさか、お前……。すると荒木は堪え切れないといった風で、「あつはつは」と自虐的に笑つた。

おい、荒木。何が可笑しいんだつ！

まあそう怒るなよ、大和田。実験にはありがちな些細なミスさ。それにこの実験は、君のために行なつたとも言えるんじゃないかな。ということは、貴様、やはり私の資料を盗んだんだな。

人聞きが悪いな。資料は君に返したじやないか。

コピーしたのだろう、あの視察の日に。そうしてお前は、あの資料に書かれた製法にしたがつて、恐ろしい物を作ったんじゃないのか。

恐ろしい物 を考えたのは、お前の方だぞ。しかしあのような事故が起きてしまつたし、今更隠しても仕方があるまい。確かに作つたよ、プルトニウム爆弾の試作品だ。無論、実験目的だから、ごく微量のプルトニウムしか使用していない。しかしこれほどの威力を発揮するとは、な。やはり科学者というものは、何事も実験し、

実証しなければならないのだよ。大和田、君もそうは思わないか。

今は、科学者としてのあり方を議論しているんじゃない。お前の作つたものが、そしてやろうとしている実験が、どれほど危険なことが、まさか分からぬはずあるまい。

分かつてゐるよ。だから予想を上回る速さで、プルトニウムが自発的に核分裂を始めたときは焦つたさ。それでつい爆発音を聞いて、隣の実験室に使つていた倉庫に入つてしまつた。

入つてしまつた？　ということは、荒木、お前まさか！

ああ、私としたことが。科学者としてあるまじきことだが、私は無防備で部屋に入つたからな。どうやら大量の放射能を浴びてしまつたようだ。恥ずかしいことだが、被曝したよ。

どうして。なぜそんなに実験にこだわるんだ。

君の研究成果がすばらしいからさ。大和田、君の資料は本当に素晴らしいものだつたよ。妬ましいほどにね。だから私の手で作りたかったのさ。

だからと言つて……。お前自身が危険な目に遭つてどうするんだ。しかも関係ない人間まで巻き込みやがつて……。

そこまで言つと大和田は絶句し、その場にしゃがみ込んだ。

くーなが父の横で、心配そうに背中に手を当てて、何かしら声をかけた。リュウイチの頭には、ここ数日、何度も考へ、検証した推測が、これまで以上の現実感を伴つて去來した。父を気遣うくーなの様子を見て、言い得ぬ憤怒が、腹の底からこみ上げてきた。全ての事実をつまびらかにすることを、リュウイチは自分の心に誓つた。リュウイチは狂氣めいた、うつろな目をして座つている荒木を睨みつけた。こみ上げる怒りを必死になだめながら、リュウイチは努めて冷静に切り出した。だがその声は、少し震えたビブラートになつていた。

荒木所長。僕からもいくつかお聞きしたいことがあります。よろしいですか？

荒木は疲れ切った目を、少しだけ動かした。

何だね。

荒木の全身からは、倦怠感が噴き出していた。

あそこにいるのは、大和田局長の娘さんの、匡子さんです。彼女が家出したことはござ存知ですよね。

ああ。

荒木は無関心な顔で、投げ遣りな返事をした。しかし横に座り、先ほどから黙つて成り行きを見ていたユイは、リュウイチの言葉に驚きを隠さなかつた。

そうだったの。

思わずユイの口から、咳きが漏れた。アキはただ能面のように無表情なままだつた。

では荒木所長は、匡子さんが家を出た後、新宿の店で働いていたことも知つていましたね。

すっかりお見通しつて訳か。ああ、知つていたよ。

どうして、それを？

コラとアキに調べさせたのさ。

アキ？

おお、そうか。まだそのことは知らなかつたのか。まあいい。

私ももう永くはないだろうし、いい機会だから紹介しておこう。私の長女のアキ、それに次女のユイだ。

この言葉には、リュウイチも心底驚いた。脳天から、太い鉄の棒を撃ち込まれたような衝撃があつた。アキがぐーなも巻き込んだ一連の出来事に関与しているとは薄々感じてはいたが、よもや親子だったとは。

リュウイチはアキとユイの顔を見た。アキは俯いて黙つていた。ユイは先程の驚きの表情を脱ぎ捨てて、無表情の仮面を被り、荒木の方を見ていた。

なるほど、そういうことでしたか。

君がどこまで突き止めたのかは分からんが、どうせ終わつたこ

とだから話してやろう。

そして荒木は胡乱な表情のまま、静かに話し出した。

荒木は、大和田が作成した資料を探していた。荒木には到底考え出すことのできないアイデアを大和田は持っていた。荒木は、どうにかしてそのアイデアの書かれた資料を入手しようとした。せめてその計画を、自らの手で具現化したいという、科学者としての矜持でもあり、嫉妬でもあった。

そんなことを考えていたら、大和田から電話があつた。くーなが家出をしたという連絡である。荒木は「それは大変だ」と大和田を慰めたが、それは彼にとつて千載一遇のチャンスでもあつた。最初はくーなの居場所を突き止めて、それと引き換えに資料を入手しようとした、らしかつた。

最後に、「大和田は天才だよ」としみじみとした声で付け加えた。

では、どうして所長は、匡子さんに、僕のところに行くように仕向けたんですか。メモを渡してまで。

すると後ろで、くーなが何かを思い出したように、あつと声を上げた。

リュウイチ。確かにこの人だわ。私に店でメモをくれたのは。

君なら私と大和田の関係について、知らなかつたからな。私は大和田の娘をどこか自分の目の届くところに置いておきたかつたんだよ。それに幸い、君の住んでいるところは、アキの家から近かつた。つまり君という人間が、私にとつて、彼女を預けるのに一番好都合だつたつてことだ。

何てことを！

リュウイチは絶句した。思わず荒木につかみかかりそうになる衝動を抑え、努めて淡々と言葉を紡いだ。まだ確かめねばならないことが残つていた。

もう一つ、確認したいことがあります。これが今回、僕が真相を突き止めようとしたきっかけです。荒木所長はどうして匡子さんを昏睡させなくてはならなかつたんです。

大和田が視察に訪れたとき、本に書かれたメモのことを話したからさ。あの視察の機会に、私は待望の資料の写しを、図らずも入手することができた。だから娘さんは、何らかの方法で大和田の許に返そうと思ったよ。しかし大和田自身が、その資料は完全ではないと話した。そうしてその資料を完全なものにするには、娘が持っている本が必要なのだとな。

匡子さんが持ち出した本に書かれた メモ ガ、ということですよね？

その通りだ。だから私は大和田の娘を、もう少し君のところに留めておくことにした。そしてそのメモを入手するための方法を考えたのさ。

堪りかねたように、大和田は獣のような咆哮を叫びながら、荒木に掴みかかった。高級官僚として荒木に接していた、視察の時の姿はもはや微塵もなかつた。

慌ててリュウイチとツジイが、間に割つて入った。もう大和田は怒りから来る興奮を隠しきともしなかつたが、荒木は一層倦怠感を剥きだしにして、椅子にぐつたりとした。

いけないと思い、リュウイチは矢継ぎ早に質問した。

それではそのメモを探すために、匡子さんを昏睡させたと？

荒木は力なく頷いた。その目は半開きで、口を開くエネルギーさえ残されていないように見えた。荒い息を吐き、肩が激しく上下した。

それで、そのスピーカーから何故匡子さんの声が……。

そのとき荒木は、完全に目を閉じて、椅子から崩れ落ちた。アキが荒木に駆け寄る。「お父さん」と言いながら、何度も体を揺すつたが、もう荒木は何の反応も示さない。ツジイが救急車を呼ぶと言つて、部屋を飛び出した。大和田は床に這いつぶばってしまつた旧友の姿を、複雑な表情で見つめるばかりであつた。

ツジイはすぐに戻ってきて、正面はまだ人が一杯なので、裏口に音

を鳴らさずにしてもらいうよう依頼した、と言つた。そして救急隊員を誘導するために、再び部屋を出て行つた。コイがツジイの後を追いかけた。

部屋に残された大和田とくーな、リュウイチ、アキの四人は、床に横たわる荒木をそつと入り口の近くに運んだ。しばらくするとツジイが戻ってきて、救急車の到着を告げた。続いて救急隊員が担架を持つて部屋に入ってきた。荒木は謎と科学者の矜持を抱えたまま、ツジイとユイに付き添われて、病院へと運ばれていった。

残つた四人はしばらく無言のまま、家主のいない部屋に立ち尽くした。やがてアキが観念したような溜息とともに、重い口を開いた。  
続きを読む

そう言ってアキは、再び円卓の脇に置かれている、とうに正三角形を形成していない椅子の一つに腰をかけた。くーなと大和田も残りの椅子に座つた。リュウイチだけが荒木のデスクにもたれかかるよう立つたまま、アキの方を見た。

ではアキさん、まずこのスピーカーからくーなの声がしたのは、何故ですか。

ピアスです。くーなちゃんのピアスに、小型集音マイクを埋め込みました。私がしたことです。

アキはすまなそうに、赤面して俯いた。

なるほど、あなたが病院で渡したピアスが、それだつたんですね。

くーなは驚いて、両耳からピアスを外した。左右を見比べると、なるほど右のピアスに埋め込まれた石の中心に、ほんの小さな黒い点が見える。それが集音マイクなのだろう。それは、一目では見分けがつかないほど精緻<sup>せいじ</sup>に作られていた。

リュウイチが再びスピーカーのスイッチを入れて、くーなに何か話してみて、と言つた。くーながピアスに向かつて、「リュウイチ」と呼びかけた声は、果たして机の上のスピーカーからこだました。

しかしくーなは、ピアスを落としたと言つていました。彼女がピアスをなくしたことを、あなたは、あるいは荒木所長はどうして知つたのでしょうか。

知つたも何も、それも私がしたことです。くーなちゃんが病院に運ばれた翌朝、リュウイチさんが病院に来る前に、眠つていてるくーなちゃんの耳から私が抜き取りました。

話し始めると、アキは堰を切つたように説明を始めた。それは例え自分の父である荒木に加担したものにせよ、どこかで自分の理性を曲げたことへの自戒にも見えた。

少し遡つてお話します。リュウイチさんがユイや先程の主任の方と打ち上げをした夜、駅でお会いしましたわね。

リュウイチは聞き役になり、「ええ」とだけ相槌を打つた。

実はリュウイチさんが駅に着いたことは、すぐにユイから連絡がありました。私の携帯電話です。それで私は、すぐさま車から出て、改札に向きましたの。

ずいぶんタイミングがいいと思いましたよ。でもどうして僕に会う必要があったのですか？

アキは言いにくそうに逡巡した。ややあつて口を開いたが、その声はそれまでの闊達さを失い、震えを帶びた。

父が……父が、その……くーなちゃんのところにおりましたから。本当にくーなちゃんには、もう何て言つていいか。今更ですが、本當にごめんなさい。

アキの目には、みるみる涙が浮かんだ。彼女の慚愧ざんきの気持ちは、堪たまたえ切れず涙となつて流れ落ちた。

くーなが、目の前の自分を恐怖に陥れた首謀者の肩に手を置いて、慈愛の目で彼女を見た。こんなときでも、彼女の目は潤んだ。リュウイチは、そのくーなの姿に、聖母を見出していた。くーなはマリアの優しさで、アキを包み込んでしまつた。

アキさん、あなたもお父さんに頼まれてやつたのでしょ。それに私はもう、ほら、ぴんぴんしているわ。

アキはその言葉で、とうとう陥落した。その場で崩れ落ちるようにな  
椅子から降りると、大和田とくーなに向かつて、繰り返し頭を下  
げた。

そのアキの姿を見ながら、リュウイチは思い出していた。病院から  
の帰り道、駅前の書店から、駅の改札口は見えなかつたことを。そ  
してそのことが、彼の心に澁あつとなつてこびりついていたことに気が  
ついた。

それゆえにリュウイチは、打ち上げの晩、アキが見事なタイミング  
で改札に現れたことに、違和感を覚えたのだ。今にして思えば、荒  
木所長とその一人の娘の、あっぱれとも言いたくなるような連係ブ  
レイだつた。

その間、アキは大和田の慰めで、ようやく己の慚愧ざんきへの禊みそぎを終えよ  
うとしていた。泣き腫らした目を隠すように下を向いたまま、アキ  
は再び椅子に座りなおした。

アキさん、最後に一つ、確かめておきたいことがあります。

アキはまだしゃくりあげたまま、頷いた。

僕の家に忍び込んで、くーなの本を盗んだのは、誰なんですか？

それも、私です。

しゃくりあげながらアキが語るには、事実はこうだつた。

くーなを昏睡させた夜、眠り込んだくーなを見て、荒木はリュウイ  
チの部屋に忍び込んだが本は発見できなかつた。鍵のありかも分か  
らないので、荒木は粘土のような物で鍵穴の型を採つた。後日、そ  
の型から、荒木は合鍵を作つてアキに渡した。アキはくーなが退院  
する前に、リュウイチの部屋から本を奪うことを、荒木に指示され  
たそうである。うががそれでアキは、本を盗み出すまでの間、常にリュウ  
イチの動向を窺い、リュウイチがくーなを見舞つている間に彼の部  
屋に忍び込んだという。

この一連のくーなを巡る事件で、アキの果たした役割は、それは彼  
女の自發的な行動ではないにせよ、大きかつた。そしてそのターゲ  
ットに、アキの近くに住んでいる、何も知らないリュウイチを選ん

だ、荒木の計算の巧妙さに今更ながら身の震える思いがした。

全てが終わり、リュウイチと共に謎を紐解いたくーなも、彼女自身の受難から解放された。

結局、荒木は搬送先の病院で、まもなく死亡した。アキは泣いた。ユイも泣いた。そして大和田も。

大和田は自分が興味本位で作った、些細な数頁の資料が、かような結果を招いたことに、すべてが明らかになつた後も、ずっと己を責めていた。己の資料のために、旧友を失い、愛娘を危機に追い込んでしまつたがゆえに。

大和田はこの事件から五年後、絹代に看取られながら、まだ若いと惜しまれつつ荒木の後を追うこととなる。しかし彼は、いまわの際まで自分を責め続けたといつ。

ともあれ全てを白日の下に晒して、主あむじを失つて崩れかけた 箱あみ を後にした三人は、中川の運転する車で大和田の邸宅に戻ってきた。前と同じように、絹代は快くリュウイチを迎えてくれた。

リュウイチが通された部屋は、居間だった。絹代の心づくしの料理がテーブルに並べられて、ささやかな饗宴こう宴が始まった。

食事の席で、大和田はリュウイチが止めるのも聞かず、何度も床に頭をこすりつけてお礼を言つた。

本当に君がいなければ、私も、そして匡子もどうなつていたか分からぬ。君にはどれだけ感謝しても、し尽くせないほどだ。

饗宴の間、大和田は感謝の言葉を繰り返した。そのときの大和田の顔は、まるで憑物つきものが落ちたように、晴れ晴れとしていた。

居間では四人の笑い声が、途切れることなく、いつまでもいつまでも続いていた。

### 13 - 10年後のHペローグ（前書き）

私の当サイトでの初投稿作品「へーな」も、本章で最終話となります。これまで読んでいただいた方に、お礼を申し上げます。  
最後まで書き続けられるだろうかと心配になりましたが、読んでくださる方がいることを励みに、ここまで何とか漕ぎつけました。  
最終話、是非お楽しみください。

そして拙作への感想も、是非一言お書き添えいただけますよう、お願い申し上げます。

お茶、いかが。

リュウイチの前に、美しい白髪をたたえた上品な老女が、コーヒーの入ったカップを置いた。カップにはコアラの絵が描かれている。随分使い込んだカップで、ところどころ黒ずんでおり、デザインも今のリュウイチにはいささか不似合いに思われたが、彼は今もそれを好んで使っている。

絹代が淹れるコーヒーは絶品だ。十年前、この家の応接間で、絹代が給仕してくれたコーヒーの味は、今も変わらない。彼女の入れたコーヒーは、いつもたおやかに香りが立ち昇り、リュウイチはいつまでもその香りを嗅いでいたくなる。

香りとともに、過去が今も色褪せることなく、鮮明に蘇る。

今になつて思い返してみても、背筋がゾツとする。もう一十年の歳月が経過した。リュウイチがくーなに出会つてから。リュウイチがくーなどの出会いに思いを馳せていると、絹代がテープルの上に一通の封書を置いた。封筒の表には『大和田隆一様』と書かれている。見覚えのある筆跡だ。今は亡き、くーなの父、大和田琢麿が書いたものであろう。

お母さん、これは？

実はお父さんが亡くなる前、あなた宛に残した遺書なの。お父さんは『私がもし死んだら、これをリュウイチ君に渡して欲しい』と言つていてね。私はそれをずっと預かっていたのよ。

しかしお父さんが亡くなられて、もう十五年くらい経ちますよ。ええ、そうね。本当はこんなもの、見せずにおこうと思つていたの。私とともにあの世に持つて行って、お父さんにご返してしまおうとね。だつてこれを読めば、あなたはきっと辛い出来事を思い出すことになるわ。

リュウイチは「はあ」といきか間の抜けた相槌を打つた。  
でも、やはり気になるのよ。

読んでいないんですね。

もちろんよ。それでお父さんの遺志を、このまま封印していいのかしら。やはりこれはあなたに読んでもらうべきなのではないかな、とも思ったの。そもそも開封もしないで、リュウイチさんに渡さないまま、中身を勝手に想像して、封印したまま私があの世に抱いていて、もし想像した内容と違っていたらお父さんに怒られてしまうわ。だから。

「まあ読んで聞かせてください」絹代はそう言って、テーブルの上を手探りで自分のカップを探し、コーヒーを飲んだ。いつもリュウイチを、そしてくーなを物静かに支えてくれていた、畠田の母は、見えないはずの目をじっと閉じて、それきり黙つてリュウイチが読むのを待っていた。

絹代は三年ほど前から、急に視力が衰え、今はほとんど見えない。それでも住み慣れた家の中のことば、手が覚えていると言い、健常者のように何でもこなしてしまつ。

彼女の最近の口癖は、「ただ字だけは読めないのよ」だった。視力の衰えに伴つて、彼女の気力もまた衰えたようだつた。静かな物腰の中に氣丈さを備えていた絹代も、もう以前の彼女ではなくなつていふ。

リュウイチは、「では読ませもらいます」と言い、目の前の封筒を開けた。封筒は何の飾り気もない純白だつたが、中にびつしりと文字の書き込まれた便箋もまた純白だつた。

飾り気のないところも、まるで定規を当てたよにきつちつと真直<sup>まっす</sup>に書かれた字も、父らしいなとリュウイチは思つた。

一度絹代の手に触れて、読みますよと声をかけてから、リュウイチはゆっくりと遺書を読み始めた。

隆一君

今、これを読んでいる君は、匡子と一緒にいるのか。そうであつて欲しいと、死に際してそれだけが今の私の願いだ。

我が友にして、永久の仇敵でもある荒木毅彦が、匡子と君を巡り合わせて以来、君が匡子のために奔走し、助けてくれたことは感謝に堪えない。ここに匡子の父として、今一度感謝したいと思う。

思えば君と匡子を引き合させたのも、私が元凶だった。家庭も我が家のことも顧みず、ただひたすら神を冒涜するようなことに盲進してしまったがゆえ、君は匡子とともに、実に数奇な出来事に巻き込まれてしまつた。荒木もまた、私が犯した罪の哀れな犠牲者となつた。

かくも罪深い私を励まし、匡子を救うために身を盾にしてくれた君に、図らずも出逢えたということだけが、唯一、神が私に与えたもうた僕僕だつたかもしない。

私には科学者としての資格はなかつた。科学は人を不幸にしてはならないし、人に隠れてこそこそと研究するものでもない。

私は自らの手で、大切な友を始め、多くのものを失つた。だが幸いにして、君は匡子とともに、今も私の傍そばにいてくれている。

だから我が心の友なる君に、いささか親に似て不出来な娘と、私が遺した遺産の全てを譲ることとしたい。また身勝手なお願いであることは承知の上で、残された絹代を匡子とともに支えてはくれまい

か。

おそらくは絹代も反対はすまい。

糟糠そうこうの妻なる絹代に、私は何の恩返しもできないまま、あの世に旅立つこととなつてしまつた。だから君に、私の持てる全てを譲るとともに、我が妻に、私が考へうる一番素敵な贈り物、すなわち君を匡子とともに遺のこして旅に出ようと思つ。

大和田 琢麿

最後の数行はやや字が乱れていた。父はこれを、まさにいまわの際

の、最後の力を振り絞つてしたためたのである。

絹代は静かに泣いていた。そのうつろな目からは、とめどなく流れる涙が、天井から降り注ぐシャンデリアの光を反射して美しく輝いていた。

むせび泣きながら、絹代は「やはり、読んでもうつて良かつた」とリュウイチの手を握った。何度も、ありがとうと繰り返した。リュウイチはくーなの耳で光っていた、ピンクのピアスの輝きを思い出した。絹代の涙の輝きを見て、再び二十年前の出来事に思いを馳せた。

唐突に目の前に現れて、妹になると主張したくーな。無遠慮にリュウイチの部屋に上がりこみ、それでも憎めなかつた。そして妹から女への秘めやかな儀式。

あれは恋だつたのか？

それともくーなが巻き込まれた、数々の苦難から彼女を救つてやろうという、青臭い英雄主義ヒーロイズムに過ぎなかつたのか。

くーなどの思い出は、どれも過去へのフィルタでろ過されることなく、今もリュウイチの中に在る。あいやむしろ、思い出は二十年という歳月の中で、精製され、美しい結晶として昇華している。

くーなはいみじくも言つていた。

今を生きる、と。

そして父は、母を支えてくれと遺した。

だから、とリュウイチは考えた。くーなど僕を逢わせてくれた父のためにも、くーなと母を支えなくては。

リュウイチが再び父の遺書に目を戻したとき、隣で母はリュウイチの手を握つたまま、テーブルの上に顔を伏せていた。リュウイチは、眠つてしまつたのかな、と思つた。

絹代は、最後まで静かに、安らかに息を引き取つた。

くーなが娘とともに家に戻ってきたとき、リュウイチは絹代の手を握って、静かに絹代の顔を見ていた。リュウイチと絹代の周囲だけ、時間が凝固したように見えた。

「パパ」と叫びながら、娘の圭が駆け寄った。まもなく中学生になる圭は、母であるくーなの面影を映して、愛くるしい顔立ちをしていた。リュウイチは圭に、目を細めて優しく微笑みかけた。

お祖母ちゃん、寝ちゃったの？

圭、お祖母ちゃんはね。つい今しがた、お祖父ちゃんのところに行つたんだよ。

部屋の入り口で、リュウイチに駆け寄る圭を見て、微笑んでいたくーなが、急に顔色を変えて絹代のところに駆け寄った。絹代の体を揺すりながら「お母さん」と呼びかけた。絹代の体はもはや自律性を失い、くーなの腕にもたれかかった。

くーなが、わっと泣き声を上げた。その声に驚いてか、圭も呼応するように泣き出した。

(泣き虫などこれまで、そつくりだな)

リュウイチは泣き声で合唱する母娘を見て、現在の状況にはそぐわない感慨を持った。

リュウイチの腕にすがりついて、泣きじゅぶん圭に、彼は父の慈愛を込めて、優しく諭した。

お祖母ちゃんはお祖父さんの待つ、天国に行つたんだよ。見てみなよ、圭。だからお祖母ちゃんは、こんなに幸せそうな顔をして、眠つているじゃないか。もうお祖母ちゃんは、お祖父ちゃんと天国に住むつて決めたから、起きることはないけれどね。でも圭、君にはパパもいるし、優しいママもいる。だから、そろそろお祖父ちゃんに、お祖母ちゃんを返してあげよう。お祖父ちゃんも独りで寂しいのさ。

圭は納得したよつこ、涙を拭いて「うん」と首を振つた。父の腕にすがりついたまま、祖母の安らかな 寝顔 を見ている圭の表情も

また、優しかった。それはいつか、リュウイチがくーなの顔に見出した聖母の表情であった。

その日、しめやかな通夜が行なわれた。読経が終わり参列者も皆帰つた部屋で、リュウイチは独り、絹代の眠る棺の前に座っていた。棺の前で一度合掌すると、リュウイチは立ち上がり、そつと棺の蓋を持ち上げた。青白い顔をした絹代の、白装束の胸元に、リュウイチは胸のポケットから取り出した何物かを差し込んだ。

それは父、琢磨の遺書であった。

「これは僕とお母さんだけの秘密です。くーなことは僕が守ります。圭のことも。だから安心して、父の許へ旅立つてくださいね。そして父に『ありがとう』と伝えてください。

小声で眠る絹代にそう呟くと、リュウイチは再び棺の蓋を閉じた。

絹代が荼毘だひに付された日。

絹代と父の遺書を天に送るかのように、煙突から出る黒煙は真直ぐに空へ立ち上った。左に圭、右にくーなど、しつかり手を繋いで、リュウイチは天に昇る竜にも似た煙を、じっと見送った。リュウイチは微笑んで、今も過去もない世界で、待ち遠しそうな顔をして、祖母の帰りを待っている祖父を見ていた。そつとくーなど繋いだ手に、力を込めて。

(ア)

### 1-3 110年後のHペローグ（後書き）

「へーな」最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。  
た。

次回作で、またお逢いできることを楽しみに……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2597d/>

---

くーな

2010年10月8日12時05分発行